

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター調査報告書 第46集

具同中山遺跡群Ⅱ－1

－中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅴ－

2000年3月

建設省

高知県

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

具同中山遺跡群Ⅱ－1

2000年3月
建設省
高知県

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



調査区完掘状況（南方向から）



調査区遠景（北方向から）



弥生土器大壺出土状況



土師器高杯・須恵器出土状況



須恵器壺



弥生土器大壺

序

財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターでは、平成4年度より建設省四国地方建設局の委託を受けて中村市と宿毛市を結ぶ高規格道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しております。四万十川支流の中筋川に沿って、高規格道路が建設されているわけですが、中筋川流域は県下でも有数の遺跡が密集している地域です。特に古墳時代では、河川周辺で行われた祭祀遺跡が確認されています。さらに中世では、戦国の様相を垣間見ることができる山城跡が各集落に残っているようです。

本書は、平成7年度に実施した具同中山遺跡群Ⅱ-1の成果をまとめたものです。弥生時代前期・中期から古墳時代にかけての複合遺跡として大変貴重な成果を上げることができました。弥生時代では幡多地方で数少ない中期の資料や、古墳時代では祭祀遺物など連綿と続く各時代の遺構・遺物を検出することができました。この報告書が埋蔵文化財の保護・保全、さらには今後の考古学研究の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施や報告書の作成にあたっては、建設省四国地方建設局中村上事事務所並びに高知県中村上木事務所の埋蔵文化財に対する深い御理解と御協力を賜ったことに心から謝意を表するとともに、関係各位には多大な御指導と御教示を頂いたことに、厚く御礼申し上げます。

平成12年3月

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 河崎正幸

例 言

- 1 本書は、高規格中村宿毛道路建設に伴う具同中山遺跡群Ⅱ-1の発掘調査報告書である。
- 2 具同中山遺跡群は、中村市具同に所在する。
- 3 調査は、建設省四国地方建設局・高知県の委託を受け、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。本調査は平成7年5月から平成7年11月まで実施した。本調査面積は、2,028㎡である。
- 4 本報告書の作成・執筆は、各調査員が分担し編集は松田が行った。文責は、執筆者名を文末に記した。古墳時代出土遺物の執筆については、久家隆芳(高知県文化財団埋蔵文化財センター調査員)が行った。
- 5 検出遺構に関しては、流路(SR)、土坑(SK)、柵列(SA)、その他の遺構(SX)で標示している。出土遺物の実測番号は、写真図版中の番号と一致している。
- 6 遺構、遺物の測量及び写真撮影は各調査員が行った。航空写真は、(株)アイシーに委託した。さらに出土遺物の木製品は(株)京都科学、種子及び土壌分析はパリノ・サーヴェイ(株)に委託した。
- 7 出土遺物実測図の縮尺は、弥生時代中期土器は $\frac{1}{3}$ 、弥生時代後期終末から土師器は $\frac{1}{4}$ で統一している。
- 8 調査にあたっては、建設省四国地方建設局中村工事事務所、高知県中村土木事務所の御協力を頂いた。また具同地区長をはじめ地元住民の方々に、遺跡に対する深い御理解と御援助を頂き、厚く感謝の意を表したい。
- 9 出土遺物、その他図面類の関係資料は財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第1章 調査に至る契機と経過	(松田)
第1節 調査の契機	1
第2節 調査経過と調査組織	1
第3節 調査日誌抄	2
第2章 高知県及び遺跡の環境	(山崎)
第1節 高知県及び遺跡の環境	5
第2節 高知県の歴史的環境	6
第3節 共同中山遺跡群及びその周辺	7
第3章 調査の方法と基本層序	(伊藤)
第1節 調査の方法	9
第2節 基本層序	10
第4章 調査成果	
第1節 検出遺構と出土遺物	(筒井) … 15
1 検出遺構	15
2 遺構出土遺物	22
第2節 遺構外出土遺物	
1 縄文時代～弥生時代	(松田) … 31
2 弥生時代後期終末から古墳時代の土器	(久家) … 37
第5章 まとめ	
1 調査成果から	(松田) … 69
2 共同中山遺跡群出土の弥生中期の土器について	(松田) … 69
3 共同中山遺跡群出土土師器高杯に関する覚え書き	(久家) … 72

挿 図 目 次

- Fig. 1 高知県及び中村市の位置図
 Fig. 2 中村市及び各市町村図
 Fig. 3 共同中山遺跡群及び周辺の遺跡
 Fig. 4 調査区位置図
 Fig. 5 基準点設定図
 Fig. 6 グリッド設定図
 Fig. 7 セクションポイント図
 Fig. 8 セクション図
 Fig. 9 調査区遺構配置図
 Fig.10 S A 1 平面図及び断面図、S K 1・2・3 平面図
 Fig.11 S K 1・2・3 平面図及びエレベーション図
 Fig.12 P 1・2 平面図及びエレベーション図
 Fig.13 S R 1 平面・エレベーション図及び出土遺物垂直分布図
 Fig.14 S R 2 平面・エレベーション図及び出土遺物垂直分布図
 Fig.15 炭化物集中及び遺物出土状況
 Fig.16 S X 1 平面図及び断面図
 Fig.17 S R 1 出土遺物実測図
 Fig.18 S R 2 出土遺物実測図 1
 Fig.19 S R 2 出土遺物実測図 2
 Fig.20 S R 2 出土遺物実測図 3
 Fig.21 S R 2 出土遺物実測図 4
 Fig.22 S X 1 出土杭実測図 1
 Fig.23 S X 1 出土杭実測図 2
 Fig.24 弥生時代 VI・VI' 層出土遺物分布図
 Fig.25 弥生時代 VI・VI' 層出土遺物接合図及び垂直分布図
 Fig.26 IX 層出土縄文土器実測図
 Fig.27 弥生土器実測図 1
 Fig.28 弥生土器実測図 2
 Fig.29 弥生土器実測図 3
 Fig.30 石鏃実測図
 Fig.31 古墳時代遺物分布図
 Fig.32 古墳時代出土遺物分布接合図及び垂直分布図 1
 Fig.33 古墳時代出土遺物分布接合図 2
 Fig.34 古墳時代出土遺物分布接合図 3
 Fig.35 大壺集中出土状況図
 Fig.36 古墳時代遺物実測図 1
 Fig.37 古墳時代遺物実測図 2
 Fig.38 古墳時代遺物実測図 3
 Fig.39 古墳時代遺物実測図 4
 Fig.40 古墳時代遺物実測図 5
 Fig.41 古墳時代遺物実測図 6
 Fig.42 古墳時代遺物実測図 7
 Fig.43 高杯分類図
 Fig.44 I b 類 S F 別法量分布図
 Fig.45 高杯計測部位凡例

表 目 次

- Tab. 1 S A 1 柱穴計測表
 Tab. 2 S X 1 木杭計測表
 Tab. 3 遺構出土遺物観察表 1
 Tab. 4 遺構出土遺物観察表 2
 Tab. 5 遺構外出土遺物観察表 1
 Tab. 6 遺構外出土遺物観察表 2
 Tab. 7 遺構外出土遺物観察表 3
 Tab. 8 遺構外出土遺物観察表 4
 Tab. 9 遺構外出土遺物観察表 5
 Tab.10 遺構外出土遺物観察表 6
 Tab.11 遺構外出土遺物観察表 7
 Tab.12 S X 1 木杭観察表
 Tab.13 出土遺物取り上げデータ表 1
 Tab.14 出土遺物取り上げデータ表 2
 Tab.15 出土遺物取り上げデータ表 3
 Tab.16 出土遺物取り上げデータ表 4
 Tab.17 出土遺物取り上げデータ表 5
 Tab.18 出土遺物取り上げデータ表 6
 Tab.19 出土遺物取り上げデータ表 7
 Tab.20 出土遺物取り上げデータ表 8

写真図版目次

巻頭カラー 1	調査区完掘状況（南方向から） 調査区遠景（北方向から）	P L. 18	弥生土器大壺出土状況 第Ⅴ層遺物出土状況
巻頭カラー 2	弥生土器大壺出土状況 土師器高杯・須恵器出土状況	P L. 19	土師器甕出土状況 土製模造鏡・土師器高杯出土状況
巻頭カラー 3	須恵器壺 弥生土器大壺	P L. 20	第Ⅴ層土師器出土状況 同上
P L. 1	調査前全景 調査区表土層掘削状況	P L. 21	第Ⅴ層遺物出土状況 同上
P L. 2	調査区北壁セクション 調査区中央バンクセクション	P L. 22	第Ⅴ層遺物出土状況 同上
P L. 3	第Ⅳ層 P 1 検出状況 第Ⅳ層 P 2 検出状況	P L. 23	第Ⅴ層土師器出土状況 同上
P L. 4	第Ⅲ層 S A 検出状況（西方向から） S A・S K 完掘状況（西方向から）	P L. 24	発掘作業風景 同上
P L. 5	S R 2 セクション（北方向から） 同上（北西方向から）	P L. 25 P L. 26	出土遺物 1 出土遺物 2
P L. 6	S R 2 完掘状況（西方向から） 同上（北方向から）	P L. 27 P L. 28	出土遺物 3 出土遺物 4
P L. 7	第Ⅸ層 S A 検出状況（西方向から） 同上（南方向から）	P L. 29 P L. 30	出土遺物 5 出土遺物 6
P L. 8	第Ⅸ層 S A 半截状況 同上	P L. 31 P L. 32	出土遺物 7 出土遺物 8
P L. 9	第Ⅸ層 S A 半截状況 調査区完掘状況	P L. 33 P L. 34	出土遺物 9 出土遺物 10
P L. 10	第Ⅳ層焼土・遺物出土状況 同上	P L. 35 P L. 36	出土遺物 11 出土遺物 12
P L. 11	S R 1 遺物出土状況 S R 1 土師器出土状況	P L. 37 P L. 38	出土遺物 13 出土遺物 14
P L. 12	S R 1 土師器出土状況 S R 2 遺物出土状況	P L. 39 P L. 40	出土遺物 15 出土遺物 16
P L. 13	S R 2 遺物出土状況 同上	P L. 41 P L. 42	出土遺物 17 出土遺物 18
P L. 14	S R 2 木製品出土状況 第Ⅸ層遺物出土状況	P L. 43 P L. 44	出土遺物 19 出土遺物 20
P L. 15	第Ⅸ層遺物出土状況 第Ⅸ層石鏃出土状況	P L. 45 P L. 46	出土遺物 21 出土遺物 22
P L. 16	第Ⅵ層遺物出土状況 同上	P L. 47	出土遺物 23
P L. 17	第Ⅵ層遺物出土状況 同上		

第1章 調査に至る契機と経過

第1節 調査の契機

四方十川支流の中筋川下流域には、縄文時代以来連続と人間の残した生活痕を確認できる。特に古墳時代には、流域沿いに大規模な祭祀跡が確認され護岸工事に伴う発掘調査が昭和61年度から高知県教育委員会によって実施されている。この一連の調査により古墳時代から中世にかけての遺跡が広く分布していることが周知された。これら遺跡のなかで最も広範囲な遺跡として共同中山遺跡群が挙げられる。

中村市は、宿毛市同様幡多地方の中心となる地域であるが、主要幹線としての役割をはたしている国道56号線は愛媛県南予に繋がる流通のルートでもあり、四国西南部の大動脈として利用されている。国道56号線は、近年特に交通量が増加し市街地付近では交通渋滞が頻繁に生じる状況である。そのような状況から建設省四国地方建設局中村工事事務所は、中村宿毛間の渋滞緩和と高速道時代の幕開けを鑑み、高規格中村宿毛道路の建設計画が進められている。さらに具同地区に関しては高知県による県道中村下ノ加江線の計画も同時に進められた。中筋川流域は、遺跡の密集地帯として周知されているところであり、計画路線にかかる埋蔵文化財包蔵地の保護について建設省四国地方建設局中村工事事務所と高知県教育委員会は協議を積み重ねてきた。協議の結果、計画路線変更が不可能な埋蔵文化財包蔵地について、平成3年度から財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが試掘調査を実施し、遺構・遺物が検出され本調査が必要な地点について発掘調査を実施してきている。今回調査対象となった具同地区は、建設省と高知県が同時に工事計画を進行している。工事計画範囲は、古墳時代を中心とした広範囲な共同中山遺跡群が所在していることから、平成5年度に試掘調査を実施した結果古墳時代の流路及び土師器片を検出した。

試掘調査の結果に基づき、建設省四国建設局中村工事事務所、高知県及び高知県教育委員会が協議した結果、遺物の集中する範囲を中心に発掘調査を実施することで合意した。平成7年4月1日付けで委託契約を締結し、発掘調査は高知県教育委員会が受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。

第2節 調査経過と調査組織

平成7年5月8日から中村事務所において準備に入り、調査区の矢板設置作業を行い5月30日から調査区の掘削作業に入った。調査は順調に進み11月21日に終了し埋め戻し作業に入った。その後平成7年度は、中村事務所において基礎整理作業に入り、調査概報を作成した。平成8年度に整理作業と報告書作成作業に着手したが、報告書印刷は両側に隣接する調査区のⅡ-2区の調査報告と合冊で印刷する計画であった。しかし平成8年度において、Ⅱ-2区の用地交渉で地主との調整ができず高知県と建設省用地である共同中山遺跡Ⅱ-2の調査が平成11年度まで延期になった。共同中山遺跡群Ⅱは、建設省と高知県の開発でありⅡ-2が延期となったことから、建設省・高知県と協議した結果印刷は平成11年度にⅡ-1のみで行うことになった。

発掘調査は、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施し、平成7年度の調査体制は以下のとおりである。

総括……………埋蔵文化財センター所長 原雅彦

調査事務総括……………総務課長 田岡英雄 調査総括……………調査課長 岩崎嘉郎

調査担当……………主任調査員 松田直則・伊藤強 調査員 山崎正明 調査補助員 筒井三菜

事務担当……………主幹 吉岡利一 主事 石川馨

発掘作業員…浜田昌一・正木信邦・野並いほり・立石正吉・岡上悦美・岡本定美・岡本寿美子・岡本弘美・沖和子・中山末子・布陽子・松本菊美・林延子・中山昭子・大原千代枝・岡本隆江・長崎竹美・岡本芳子・桑原定・橋田逸於・秋森広松・岡崎美代子

整理作業…吉本睦子・竹村延子・宮地佐枝・橋田美紀・門田美知子・山本由里・岡本智子・岡村朋美・小野由香

第3節 調査日誌抄

- | | |
|------------------------------------|--|
| 5月8日 中村事務所開所。 | 6月7日 調査区北壁断面の写真撮影とセクション図を作成する。 |
| 5月10日 調査準備を行う。 | 6月14日 調査区北壁及び東壁のセクション図を作成する。13日まで雨が降り作業中止にする。 |
| 5月17日 調査区周辺草刈り作業。 | 6月15日 調査区北壁の写真撮影を行う。Ⅲ層でピットを検出する。 |
| 5月18日 調査区欠板設置作業。 | 6月19日 Ⅲ・Ⅳ層からの掘削を機械力で行うが、土師器片が出土し始めたので人力掘削に変える。 |
| 5月30日 調査区掘削作業開始。 | 6月20日 Ⅲ・Ⅳ層を手掘りで掘削を行う。土師器の小破片が出土する。 |
| 6月1日 現地プレハブ設置及び掘削排土運搬、調査区周辺に基準点設置。 | |
| 6月2日 調査区北壁セクション精査、Ⅲ層の掘削を開始する。 | |
| 6月5日 前日の雨のため排水作業。 | |
| 6月6日 調査区北壁の断面の精査を行う。Ⅰ層からⅣ層までを確認する。 | |



- 6月21日 調査区北西隅Ⅲ・Ⅳ層を人力掘削を行う。
- 6月22日 調査区南西隅柵列をS A 1と名称する。
- 6月26日 S A 1のピット埋上 一部掘削。
- 6月27日 調査区南西部ピット群プラン確認。清掃後S A 1プランの写真撮影その後実測にはいる。調査区北西部Ⅳ層の掘り下げを行う。遺物が密集して出土する。
- 6月28日 南西部柵列S A 1の半截作業。北西部はⅣ層の掘削にはいる。
- 6月29日 北西部遺物集中地点の清掃、その後写真撮影。
- 6月30日 南西部ピット群の完掘を行う。
- 7月6日 南西部S A 1やS Kの検出遺構の平面測量を行う。
- 7月7日 南西部S A・S Kの清掃後写真撮影。北西部Ⅳ層包含層の掘り下げを行う。
- 7月10日 調査区北西部上器集中地点の写真撮影。調査区西側Ⅲ層掘り下げを行う。
- 7月11日から13日 調査区南西部Ⅲ層の掘り下げを行う。
- 7月17日 調査区西端に南北のトレンチを設定しこれをトレンチCとする。南西部はⅢ層の掘り下げを行う。
- 7月18日 トレンチCの掘り下げを人力で行う。北半分はⅥからⅧ層を人力で掘り下げる。
- 7月19日から26日 南西部Ⅳ層からⅤ層の掘り下げを行う。
- 7月27日 南西部Ⅴ層から大壺の破片が集中して出土する。
- 7月28日 大壺集中地点周辺の清掃。包含層Ⅴ層の人力による掘削を行う。
- 7月31日 大壺周辺の写真撮影を行う。調査区側Ⅴ層の掘り下げを人力で行う。
- 8月1日 昨日に続き調査区西側Ⅴ層の掘り下げを行う。県議会総務委員会の視察がある。
- 8月2・3日 大壺出土地点周辺の平面実測及び取り上げ作業を行う。
- 8月4日 調査区の中央部から東側部分のⅣ層からⅤ層の掘削を行う。東側部分からは、遺物の出土が少ない。
- 8月7日から18日 包含層Ⅴ層からⅣ層を掘り下げる。及び包含層の遺物取り上げ作業。
- 8月21日 調査区南西部のⅤ層を人力で掘削。北西部は遺物が出土しないため機械力で掘削を行う。



8月22日 調査区南西部で流路跡を確認する。
8月24日 南西部掘削作業。包含層出土遺物の
取り上げ。流路跡をS X 1とする。
8月28日 調査区北西部は機械力で掘削し南西
部は流路跡S X 1の掘削。
8月30日 S X 1の実測作業。南西部V層の人
力掘削作業。
8月31日 中央部北側V層の掘り下げを行い出
土遺物の取り上げを行う。
9月4日から17日 調査区全体のV層を中心に
包含層の掘削を人力で行う。
9月18日 V層掘り下げと、S X 1の下層出土
遺物写真撮影及び実測。
9月19日から21日 V層掘り下げ。S X 1の下
層にさらに流路跡の可能性あり。
9月25日 包含層VI層の掘り下げにはいる。
9月26日から28日 VI層を人力で掘削する。
弥生土器が出土し始める。遺物の取
り上げを行う。
10月3日 IV層弥生の包含層を人力で掘り下げ
る。流路跡のS R 2を確認する。S
R 2の遺物を取り上げる。
10月6日から16日 VI層の掘り下げや、遺物出
土状況の写真撮影や実測、遺物取り
上げを行う。

10月17日から26日 トレンチCの層序確認や写
真撮影。IV・IV'・VII層を掘り下げ
る。S R 2の埋上遺物を取り上げる。
S X 1の平面実測。
10月27日から11月1日 S R 2の埋土掘り下げ。
遺物出土状況の写真撮影。
11月2日・6日 S R 2の完掘写真撮影。平面
実測を行う。
11月8日 全体の清掃の後航空写真撮影。
11月9日から14日 調査区南半分埋め戻し作業。
11月15日 VII層下層IX層より杭列を検出する。
11月16日 VII'層及びIX層を人力で掘り下げ
る。杭列の実測と断面の写真撮影を行う。
11月21日 調査終了で調査区北半分を埋め戻し
作業開始する。
11月30日 現場プレハブを撤去して、中村事務
所で整理作業にはいる。

(松田)



第2章 高知県及び遺跡の環境

第1節 高知県の概要及び地理的環境

上佐国高知県は北を急峻な四国山脈に、南は太平洋に開かれた地形を呈し、古来より遠流の地として知られているように、ともすれば物流の遮断されやすい要素を持っている。現在も交通問題・人口の都市集中化現象・地方や山間の過疎化・高齢化社会・産業の立ち後れ等さまざまな課題を抱えている。しかしながら、21世紀を迎えようとしている今日、本州-四国を結ぶ大橋の開通・高速道路や港の整備・高知空港の拡張計画等が図られ大きく変貌を遂げようとしている。また、知事によって「新しいなか主義」や「情報維新」が唱

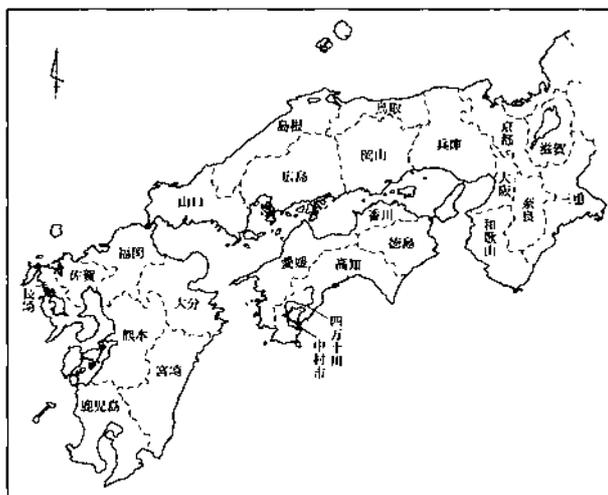


Fig.1 高知県及び中村市の位置図

えられ、地域の活性化が目指されている。半面、開発に伴い多くの重要な遺跡が次々に失われ、大きな損失となっている。また、現代社会の抱える諸問題は年を追って深刻化しており、私たちの未来や、人間の持つ生活の本質とは何かが、現在問われようとしている。

高知県は東西に600km以上の海岸線を有し、その形は恰も扇をひろげた地形を呈している。その海岸線を大きく見ると、地殻変動の結果、両サイドの室戸岬・足摺岬では土地が隆起して全国的にも有名な海岸段丘が発達している。一方、中央部の高知平野では土地が沈降して、低くなっている現象が見られる。これは、プレートテクトニクス理論による、フィリピン海プレートが南海トラフに沈み込む際の圧縮に伴うエネルギー（繰り返される南海大地震）による結果である。浦戸湾から浦ノ内湾・須崎湾・久礼湾・興津から佐賀にかけてはリアス式海岸が発達しており、天然の良港が多く形成されており、県西部に沈降海岸が多いことを示している。また、県の両端部の宿毛湾や甲浦湾にもそれが見られ、豊後水道や紀伊水道を挟んだ他地域との出入口としての機能を果たしてきた。一方、県境から海岸線までの南北の幅は約30kmと狭く、県域の79%が山地という数字が示すように、平野は各河川の河口部にわずかにしか存在しない。従って高知県は海洋県であると同時に山岳県でもある。地質構造的には、嶺北地方に三波川帯が、県の中央部に秩父帯が、県の中央部南縁及び東部と西部に四万十帯が広がっている。これらは、御荷鉾構造線、仏像構造線、中筋・安芸構造線と呼ばれる断層によって画されており、南に位置している四万十帯の形成年代が最も新しい。気温は黒潮が流れる太平洋側と標高の高い県境側では格差があり、降水量も内陸山間部に顕著である。このような条件のもとで、人々は古来よりそれぞれの自然環境・社会環境に溶け込んだ生活を展開し、自ずとそれぞれの地域で独特の生業・産業・風習・祭り等が営まれ、固有の文化が生み出されてきたのである。

第2節 高知県の歴史的環境

県下における遺跡の発掘調査は年々増加の一途を辿り、大規模調査も行われ始めている。ここでは、近年の調査成果を中心に、県内の遺跡を各時代毎に概観してみたい。人々の生活（遺跡）は、地理的要因によって左右される場合が多く、主に先述の地形的特色に合った遺跡分布を示す。

1. 旧石器・縄文時代

県内の旧石器時代の遺跡は、段丘上を中心に10ヶ所前後が分布しているだけで、その数は非常に少ない。しかし、新たに県西部でナイフ型石器等が確認されはじめている。縄文時代の遺跡は、従来県下の7割近くが県西部に集中していた。しかし発掘調査の増加により、中央部でも縄文遺跡が河岸段丘上や丘陵の谷間、さらには沖積平野の深いところからも見つかっている。特に近年注目を集めているのが本山町の松ノ木遺跡で、1992年の発見以来5次にわたり調査が行われ、その出土遺物の量・内容共に西日本でも屈指のものとなっている。近年調査が行われたのを見ると、中央部では柳田遺跡（後期・晩期）、林田シタノジ遺跡（後期・晩期）、栄エ田遺跡（後期・晩期）、奥谷南遺跡（前期・中期）があり、西部では国見遺跡（中期・後期）、船戸遺跡（後期・晩期）、十川駄場崎遺跡（早期～後期）、木屋ケ内遺跡（早期・前期）がある。また、山間部では松ノ木遺跡（主に後期）、北川遺跡（後期）と圧倒的に後期から晩期にかけての遺跡が多い。

2. 弥生・古墳時代

弥生時代の遺跡は、何と言っても拠点的母村集落と言われる田村遺跡が著名である。遺構出土の一括資料や水田遺構は、多くの研究者から注目されている。西部では縄文晩期土器と遠賀川土器とを伴出した入田遺跡が知られている。集落は、全般的に前期末と後期後半に増加する傾向にあるが、特に県中央部の洪積台地上において、後期末のタタキ目をもつ土器群が住居址から多く出土している。当該期における住居址数は優に100棟を越す勢いであり、社会構造の変化・鉄器の普及等を窺い知ることができる。まさに古墳出現前夜の一様相と言えよう。また、弥生終末～古墳初頭の集落が山間部において見つかれば注目されている。古墳時代の集落の分布は全般的に少ない。しかし、中村平野の後川・中筋川流域の河川祭祀跡は大規模で全国的にも有名である。この中筋川水系上流に県下では唯一の前方後円墳である曾我山古墳が確認されている。このことは文化流入の門戸であった事と同時に、波多国における大和政権下の国造を想定する要因になっている。他に土佐山田町で確認された四国最大の方墳である伏原大塚古墳などもあるが、ほとんどは「小円墳、横穴式石室、群集」といった特徴をもつ後期古墳が中央部の山麓部を中心に分布している。

3. 奈良・平安時代

古代に入り律令国家体制が整うと、国郡制が定められ、土佐国の歴史の主要舞台は高知平野に移る。文献上からすると郡衙は、初め安芸、土佐、吾川、幡多の4郡が設置され、その後高岡、香美、長岡が加えられている。また、各郡にはいくつかの郷が成立している。南国市比江にある土佐国府跡の調査が1979年から継続的に行われている。第11次までの調査の結果、内裏・国庁・国庁前といった小字が示すような遺構は検出されておらず、今後の調査に期待が持たれている。しかしながら、方形の柱穴をもつ掘立柱建物跡や緑釉陶器、硯、墨書・刻書土器などは土佐国府跡の歴史の変遷を知ることができる。他にも野市町や土佐山田町等で郡衙などの官衙跡やそれに関連するものと考え

られる遺跡が数例確認されている。それ以外にも国分寺跡や比江廃寺跡といった重要な遺跡の調査も行われている。併せて調査結果の報告を待ちたい。

4. 鎌倉・室町～江戸時代

中世においては山城の調査例が圧倒的に多い。長宗我部元親の最後の拠城である浦戸城跡や、土佐七守護の一人といわれる津野氏の居城である姫野々城跡等は注目を集めた。芳原城跡、二ノ部城跡、扇城跡、江ノ古城跡、ハナノシロ城跡、曾我城跡等は、地域の在り方、地域の中心人物や城の目的や機能性、更にはその勢力等の関連を探る上で重要な成果を挙げている。主に15世紀後半から16世紀前半の遺物が多いようである。中村市の具同中山遺跡やアゾノ遺跡等では集落の変遷を追うことができる。物資の流通や南海大地震（1498年）の噴砂跡等多くの情報を与えてくれた遺跡でもある。他に特筆すべきものに、佐川町の岩井口遺跡がある。13世紀に成立した在地領主のものと考えられる館跡で、2条の溝に囲まれて、17棟の掘立柱建物跡が検出されている。近世では、高知市の鹿持雅澄邸跡や安芸市の五藤家屋敷跡といった、云わば特別な調査例だけであったが、高知城や小籠遺跡並びに永田遺跡等の調査が進み、県中央部において資料が増えはじめている。南国市の奥谷南遺跡においては17世紀中頃の儒墓が確認されている。全国的にも調査例の少ないものであり貴重である。

第3節 具同中山遺跡群及びその周辺

当遺跡は、中村市具同の中筋川左岸一帯に広がる、古墳時代の祭祀跡を中心とした複合大遺跡群である。絶対位置は、北緯32度-58分-19秒、東経132度-54分-48秒で、遺跡周辺から河口までの距離は約11kmである。本来の四万十川と中筋川の合流点付近の沖積平野に位置する。ここは蛇行する中筋川によって形成された自然堤防地帯であり、自然堤防と氾濫源から構成されている。河川の増水・氾濫時には、河道の両側に砂・シルトが堆積し自然堤防が形成される。その背後の後背湿地も、氾濫時に堆積するシルト・粘土から成る。通常、下流の沖積平野は豊水地であり、反対に水の害のほうが多い。従って、自然堤防上に集落を形成し、水はけの悪い後背湿地は水田として利用される事が多い。この人々による土地利用の公式は昔も今も変わらず、遺跡周辺はその景観を留めている。中筋川流域に広がる一連の遺跡は、この立地条件のもとに分布している。

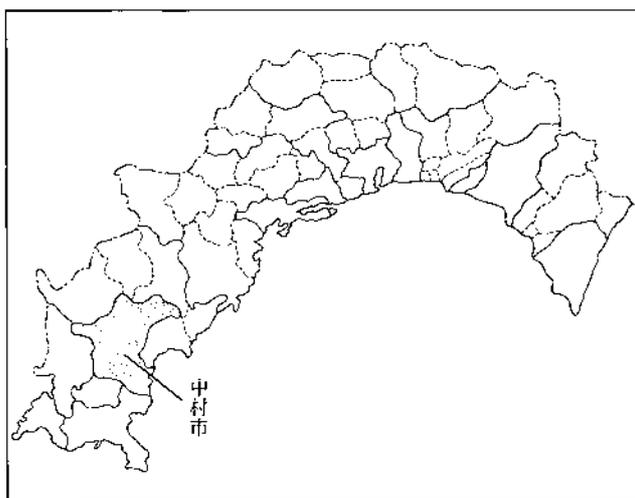
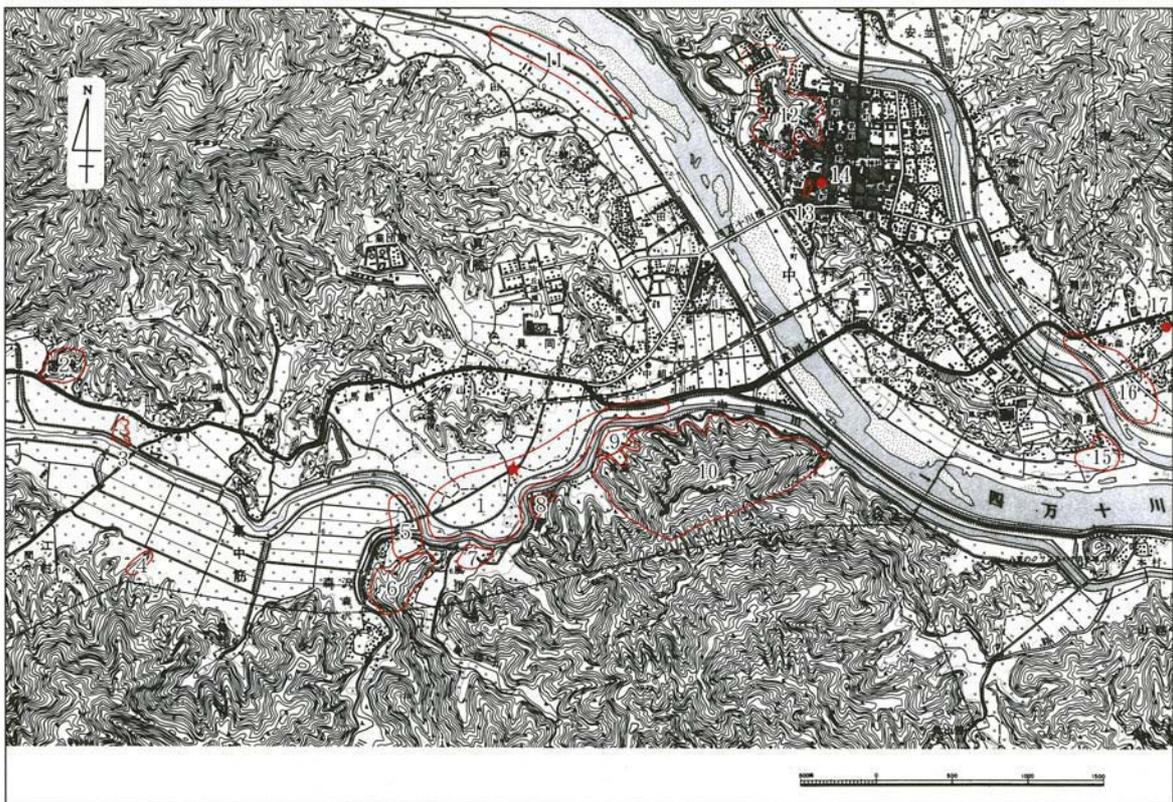


Fig.2 中村市及び各市町村図

四万十川は、不入山に源を発し、人々の生活を潤し土佐湾西部に流入する。下流の中村市では中筋川、後川を合せる。延長196kmを誇り、県下最大の河川として知られている。河口部は三角江（エスチュアリー）になっており、古来より交通が栄えている。日本最後の清流と言われ、青海苔

類の生産、鮎・鰻等の漁獲高は全国の河川中で有数であり、人々への恩恵は計り知れない。一方、中筋川は、白皇山に源を発し宿毛市と三原村の境界をなしたのち平田で中筋平野に入り、東向きを変え、平野内を蛇行しながら四万十川へと向かう。流路延長36.4kmの間にはいくつもの支流が合流しており、当遺跡の付近でも森沢川・風指川が流れ込む。中村の地はこれらの河川によって形成され、人々の生活もそれに支えられてきた。半面、多くの文献や人々の伝承が示すように、県下でも屈指の洪水地帯であった。多くの水害についての問題は、中村市の歴史を語る上で看過できないものである。この主な理由として上流域と下流域の降水量の差、河川の高低差、河川の曲流等を挙げる事ができ、江戸期以来、長い歴史の中で様々な方策が講じられてきたところである。特に中筋川下流域では四万十川からの逆流により氾濫が顕著であり、中村の人々の歴史はまさに水との戦いの歴史であったと言っても過言ではない。こうしたことから解るように、当遺跡の主な性格は、古墳時代洪水に悩まされていた当地の人々が、荒ぶる神として「川」を崇拝の対象とし、祭りを行った河川祭祀跡であると言える。時間が流れて21世紀を迎える現在、自然（四万十川等）との共存が叫ばれている中、これらは、未来に向けて私たちが如何にあるべきかについての示唆に富むひとつの証である。(山崎)



No	遺跡名	種別	時代	No	遺跡名	種別	時代	No	遺跡名	種別	時代
1	具同中山遺跡群	祭祀・集落跡	縄文～中世	6	森沢城跡	城跡	中世・近世	12	中村城跡	城跡	中世
2	今時対象地			7	風指遺跡	集落跡	弥生・平安・中世	13	中村貝塚	貝塚	縄文
3	国見城跡	城跡	中世	8	アノノ遺跡	集落跡	中世	14	桑岡遺跡	集落跡	古代～近世
4	国見遺跡	散布地	縄文・古墳	9	具重遺跡	祭祀遺跡	古墳	15	角崎遺跡	散布地	古墳・中世
5	間城跡	城跡	中世	10	香山寺跡	社寺跡	中世	16	古津賀遺跡	祭祀・集落跡	古墳～中世
6	船戸遺跡	集落跡	縄文・古墳～中世	11	入田遺跡	散布地	弥生	17	古津賀古墳	古墳	古墳

Fig.3 具同中山遺跡群及び周辺の遺跡

第3章 調査の方法と基本層序

第1節 調査の方法

今回の調査区は県道中村下ノ加江線に沿って、台形状の広がりをみせる。東西は約80m、南北は約24mを測り、調査対象面積は2,028 m^2 、調査区南辺、西辺は道路に面する。特に調査区南辺に接する県道は時間帯によって大型車なども通行するので、道路崩壊を防ぐための措置として南辺、西辺に限って道路より約2m後方に鉄製矢板を設置した。調査区北辺、東辺に関しては勾配約30度の緩斜面に留め、木の端材を仮設して土留めとした。また調査に先立って(株)ワタリ測量設計コンサルタントに依頼し、調査区周辺に4級基準点を3点設定した。

表上下約1.8mまでは、試掘調査時に遺物の分布をみなかったため、基本的に重機を用いて除去した(部分的に遺物が散見する場所では手掘りも併用した)。その後、層序確認のために調査区西端部中央にトレンチAを、調査区北端にトレンチB(排水路も兼ねる)を開削した。また降雨の場合かなりの湧水が予想されるので、2m四方の排水用水溜めを調査区北西角に設定し、6インチ水中ポンプを設置した。

包含層は縦横にサブ・トレンチを開削し層序確認ののち手掘りで掘削に当たった。出土遺物は必要に応じて写真撮影を行い、トータル・ステーションを用いて出土地点を測量したのち取り上げた。遺構は写真撮影ののち平面図、断面図を必要に応じて作成した。調査区東部は遺物の量も少なく、手掘りによる掘削と併行して、遺物の分布をみないところは重機を使用して掘り下げた。

表土下約5.2m、第X層(泥炭層)まで掘削したのち、最終確認のため東西約40mにわたってトレンチCを開削し、遺物、遺構のないことを確認した。完掘状況、遺跡周辺の様子等については航空写真撮影を行い、調査を終了した。

なおグリッド設定については、4×4mを公共座標に沿って調査区全体に配置し、呼称は南北を北からA→B→C、東西を西から23→24→25とし、北西隅から東へA-23、A-24、A-25とした。東西ライン上に1～22の呼称がないのは、当初、本調査区の西に当たるⅡ-2区を合わせて発掘調査報告書にまとめる予定であったため、諸般の事情により今回はⅡ-1区のみを報告書を刊行するに至ったことにより、1～22は削除した。



Fig.4 調査区位置図

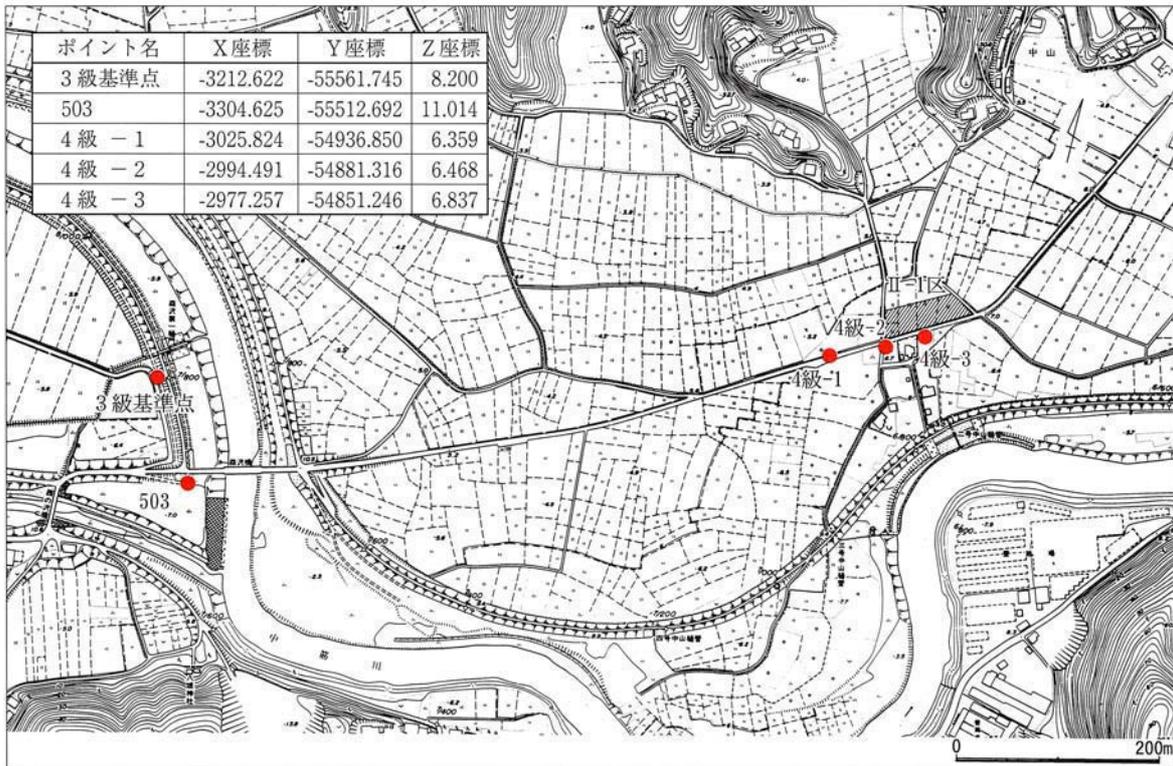


Fig.5 基準点設定図

またトータル・ステーションは、船戸遺跡、共同中山遺跡群Ⅰに続いて、今回で3度目の使用となった。3次元データを1度の測量で取り込み、ディスプレイ、プロッタに出力することで、データを視覚的に捉えられることができる。緊急発掘調査が増加し、調査の迅速化が求められる今日、有効な機器であるといえよう。しかし「共同中山遺跡群Ⅰ」の発掘調査報告書においても指摘されているように、いくつかの使用上の問題点が考えられ、トータル・ステーションを用いるべき発掘調査、及び用いる場合の調査方法、整理作業の方法については、今後も検討を要する課題の一つに挙げられる。

第2節 基本層序

調査区北壁及び、トレンチC南壁で確認した基本層序は以下の通りである。

- 第Ⅰ層 表土層
- 第Ⅱ層 青灰色粘質土層
- 第Ⅲ層 褐色粘質土層
- 第Ⅳ層 オリーブ灰色シルト層
- 第Ⅴ層 暗オリーブ灰色シルト層
- 第Ⅵ層 オリーブ灰色シルト層
- 第Ⅵ'層 オリーブ黒色シルト層
- 第Ⅶ層 暗オリーブ灰色粘質土層

- 第Ⅳ層 オリーブ黒色粘質土層
- 第Ⅳ'層 暗オリーブ黒色粘質土層
- 第Ⅲ層 暗灰黄色粘質土層

第Ⅰ層は表土層で現在の耕作土である。現況は水田と畑地であった。

第Ⅱ層は旧耕作土と考えられる。掘削直後は青灰色であるものの、酸化鉄分を多く含み数日で褐色に変色する。

第Ⅲ層は古代の遺物包含層であり、標高5.15～3.05mの間に厚く堆積している。調査区西部では130～110cm、調査区東部では80～60cmの厚さを測り、西へ強く傾斜する。出土遺物は須恵器及び土師器で、ほとんど細片であるが約300点ほど出土している。

復元図示できた遺物は、須恵器9点、土師器6点であった。また第Ⅲ層中からは、古代に伴う遺構として、調査区西部中央に柵列及び土坑を検出している。

第Ⅳ層は古墳時代の遺物包含層である。標高4.55～2.85mの間に堆積しており、中央部が厚く100～110cmを測るが、西部、東部は40～50cmほどの厚さであった。調査区東部では西に向かって傾斜しており、西部ではほぼ水平に堆積する。出土遺物は土師器細片がほとんどで、これに若干の須恵器が混ざる。復元図示できた遺物は土師器6点であった。

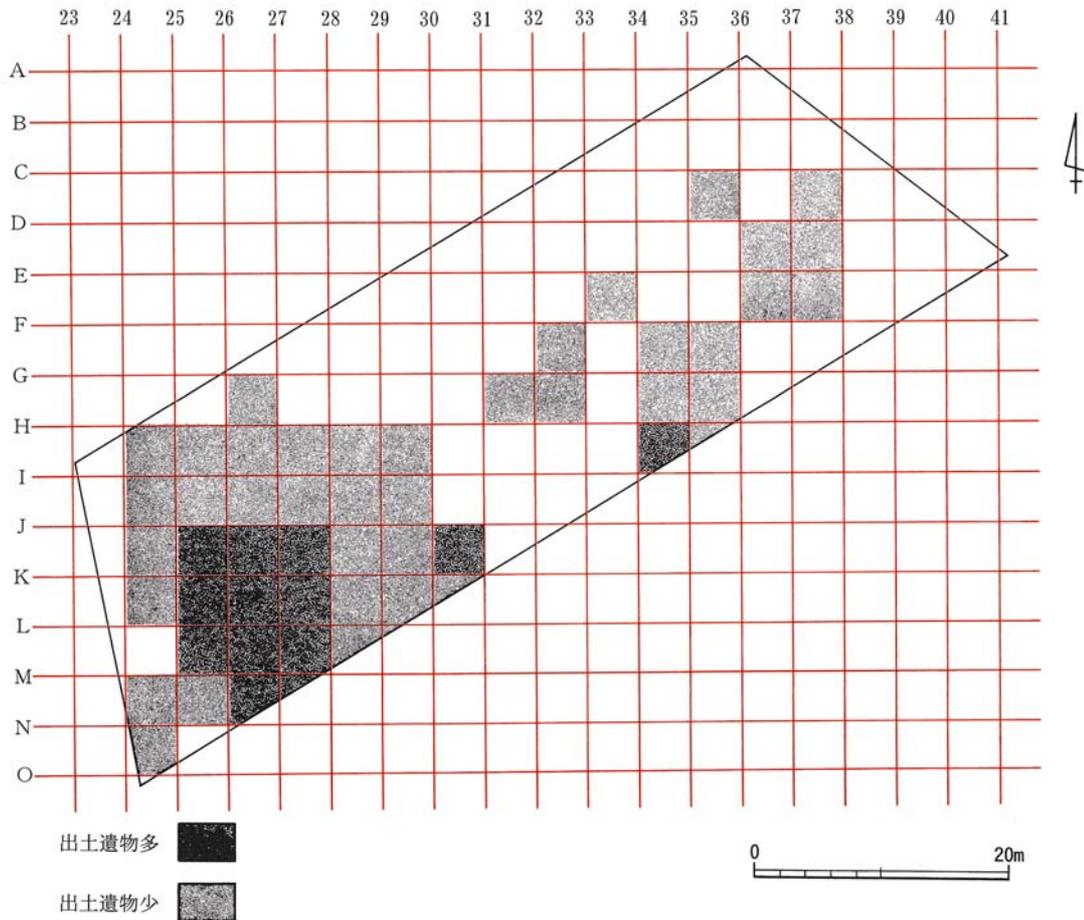


Fig.6 グリッド設定図

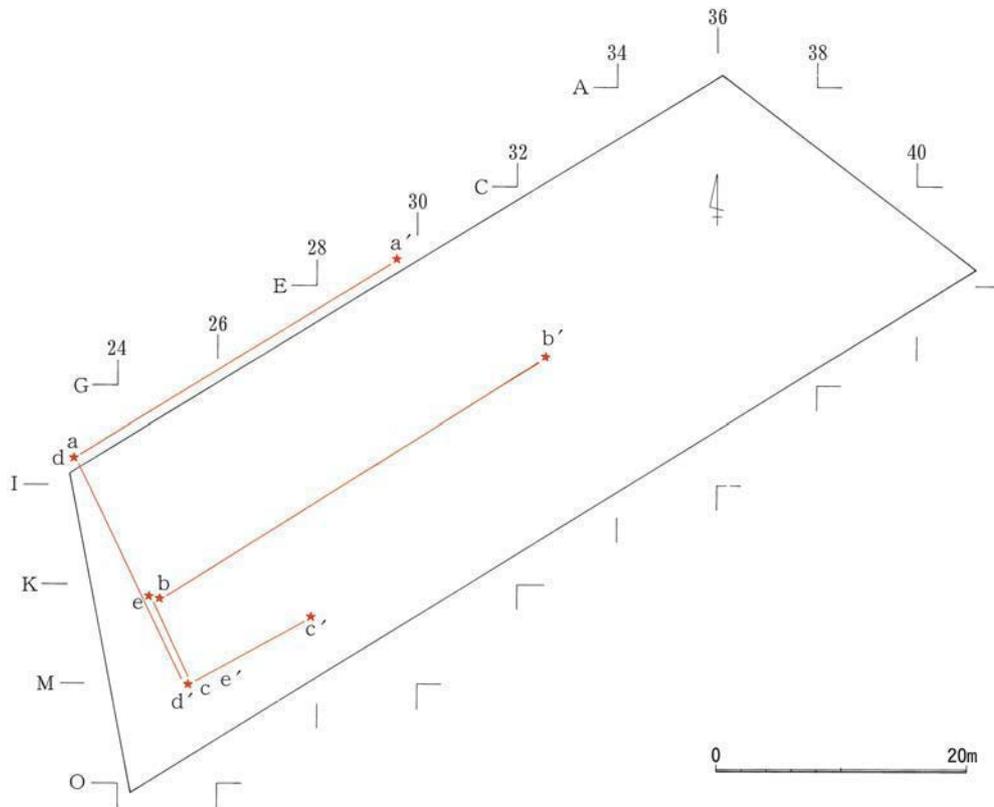


Fig.7 セクションポイント図

第V層も古代の遺物包含層で、少量の炭化物を含み、標高4.05～2.30mの間に厚く堆積する。調査区東部では130cmほどの厚さを測り、ほぼ水平に堆積する。中央部から西部では60cmほどの厚さで西に傾斜する。出土遺物は須恵器、土師器を中心に約4400点を数え、包含層出土遺物のうち7割強がこの層より出土している。復元図示できた遺物は、ほとんど土師器で110点あまりであった。

第VI層は弥生中期の遺物包含層で、標高2.80～1.80mの間に堆積し、厚さは約50cmを測る。ほぼ水平の堆積をみせるが、調査区西部でやや西に向かって傾斜する。出土遺物は弥生土器約250点であり、そのうち15点ほどが復元図示できた。また遺構としては、調査区南西部に自然流路を検出している。第VI'層は弥生中期の遺物包含層で、炭化物及び植物遺体等を多く含む。標高2.25～1.70mの間に約30cmの厚さで堆積し、緩やかに西へ傾斜する。出土遺物は約250点を数え、15点ほどが復元図示できた。遺構としては第VI'層中からも自然流路を検出することができた。

第VII層は標高2.45～1.30mの間に約60cmの厚さで堆積し、調査区中央部で西への傾斜をみせる。出土遺物は弥生土器細片数点のみである。第VIII層は標高1.60～1.05mの間に50～30cmほどの厚さで、ほぼ水平に堆積する。第VIII'層は標高1.20～0.90mの間に30～20cmの厚さで、ほぼ水平に堆積する。

第IX層は標高1.05m以下に堆積する。出土遺物では1点のみであるが、弥生前期土器が復元図示できた。また前期に伴う遺構として、杭列を検出した。なおこの下層は泥炭層であった。(伊藤)

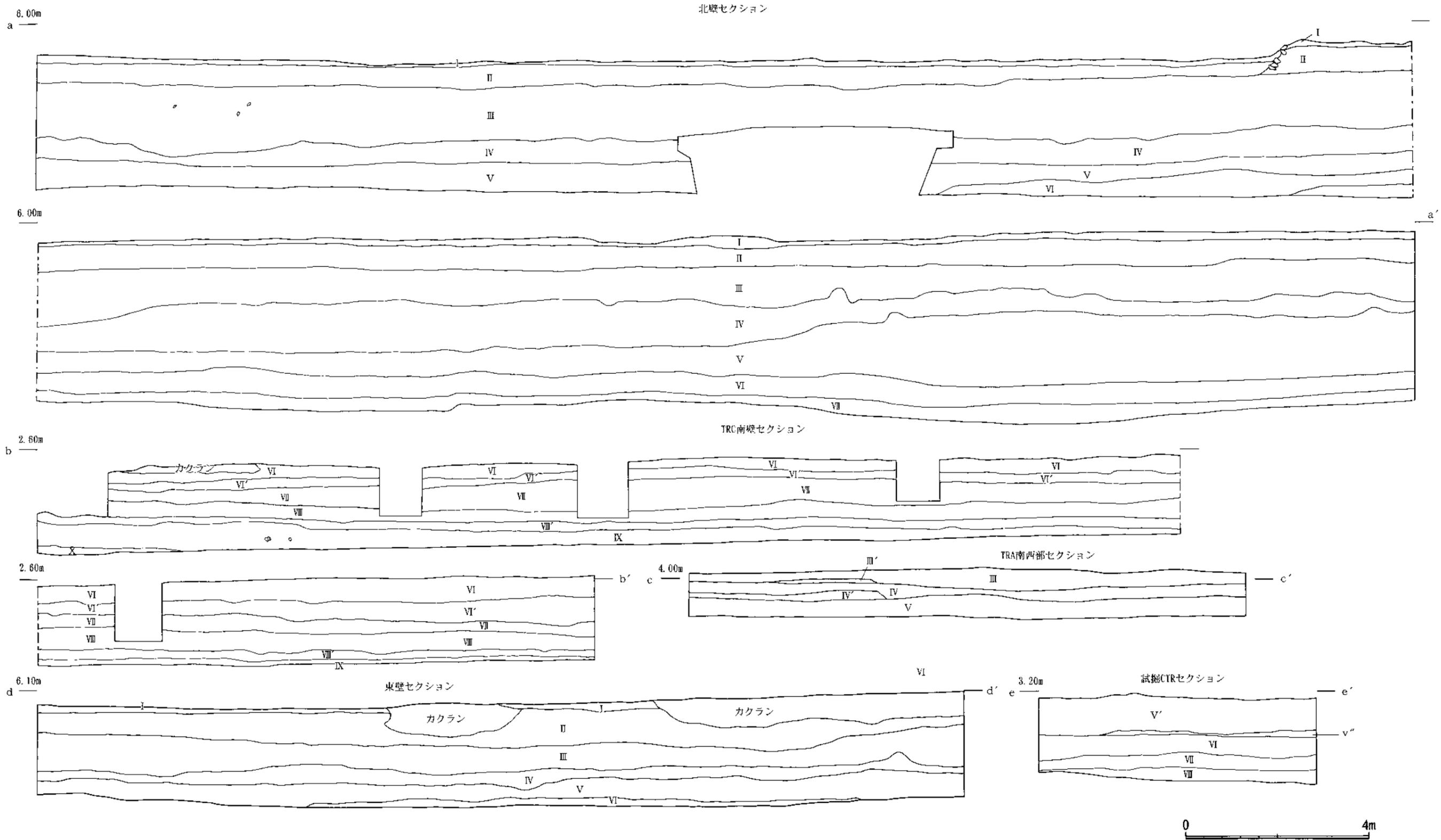


Fig. 8 セクション図

第4章 調査成果

第1節 検出遺構と出土遺物

1. 検出遺構

具同中山遺跡群の調査では昭和63年、平成元年の中筋川の河川堤防工事に伴う工事により、古墳時代の祭祀跡、古代・中世の掘立柱建物跡や集石遺構等が検出されている。平成6年度に行われた具同中山遺跡群Ⅰの調査では第Ⅰ区において弥生時代から鎌倉時代にかけての自然流路跡と小規模ではあるが、古墳時代の祭祀跡を確認している。

今回の具同中山遺跡群Ⅱ-1の調査においては、第Ⅲ層において柵列1条、土坑3基、第Ⅴ層においては柱穴2基、焼土2基、自然流路1条、第Ⅳ層では自然流路を1条、第Ⅸ層においては用途不明遺構1基を検出した。遺構は第Ⅴ層の柱穴2基を除くとほとんどが調査区の西側に集中しており、同様に遺物の分布も調査区の西南部分に範囲が広がっている。各遺構については各層ごとに述べていくこととするが出土遺物が少ない為、時期を特定できない遺構が多い。遺構内からの出土遺物については後述することとしたい。

(1) 第Ⅲ層検出遺構

SA1

調査区南西部、J-25~27、K-25・27の第Ⅲ層より検出した。東西方向に約7.5m、南北方向に約2.2mを測るL字状を呈した柵列である。遺構は22基の柱穴から形成されており、東西方向に17基、南北方向に5基の柱穴が確認された。柱穴の平面規模はP20が60cmと最大径を測り、最小径はP14の15cmを測るが、多くは23~25cm前後を測る柱穴から形成されている。柱穴の形状は円形を呈するものが大半を占める。柱間距離はP3からP4の間が最長の約85cm、P9からP10が最短距離の約28cmを測るが、ほとんどは40~55cmを測る。柱穴の深さは最も深いP20で約24cm、P8、13、19が最も浅く約6cmを測るが、10~15cmを測るものが最も多い。埋土はすべて単層の暗青灰色粘質土である。22基の柱穴の内、P4~7、9、10、12、14~17、20、21の13基内には柱根が残存していたが、後世の削平の為か、先端の細片のみである。各遺構（柱穴）の規模については、Tab1を参照されたい。

SK1

調査区南西部、K-26において検出した。SA1からは南に約3.5mの所に位置している。平面規模は長径が約1m、短径は75cmを測る楕円形状を呈しており、深さは約26cmを測る。埋土はSA1と同じく単層の暗青灰色粘質土層である。出土遺物に関しては皆無である。

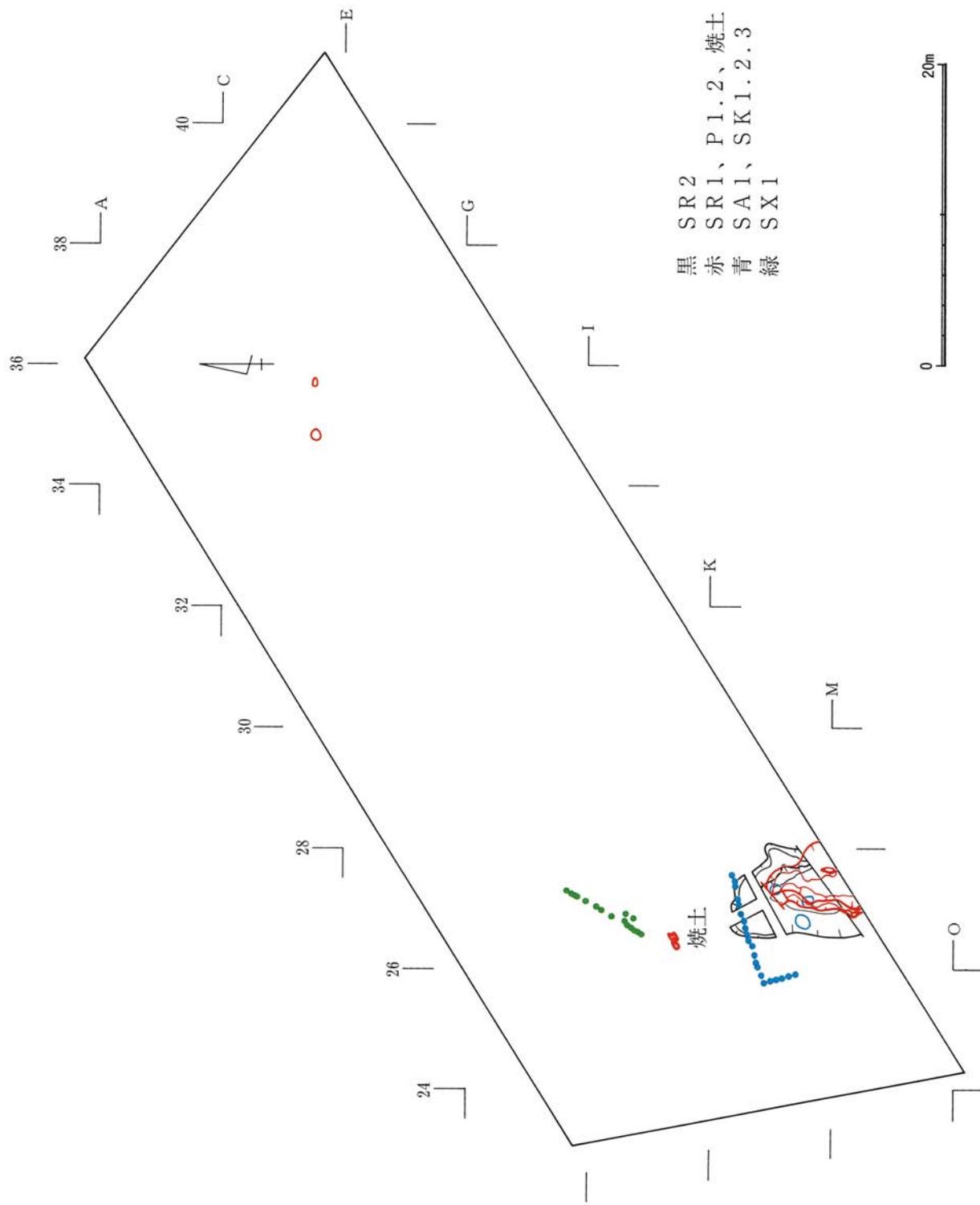


Fig.9 調査区遺構配置図

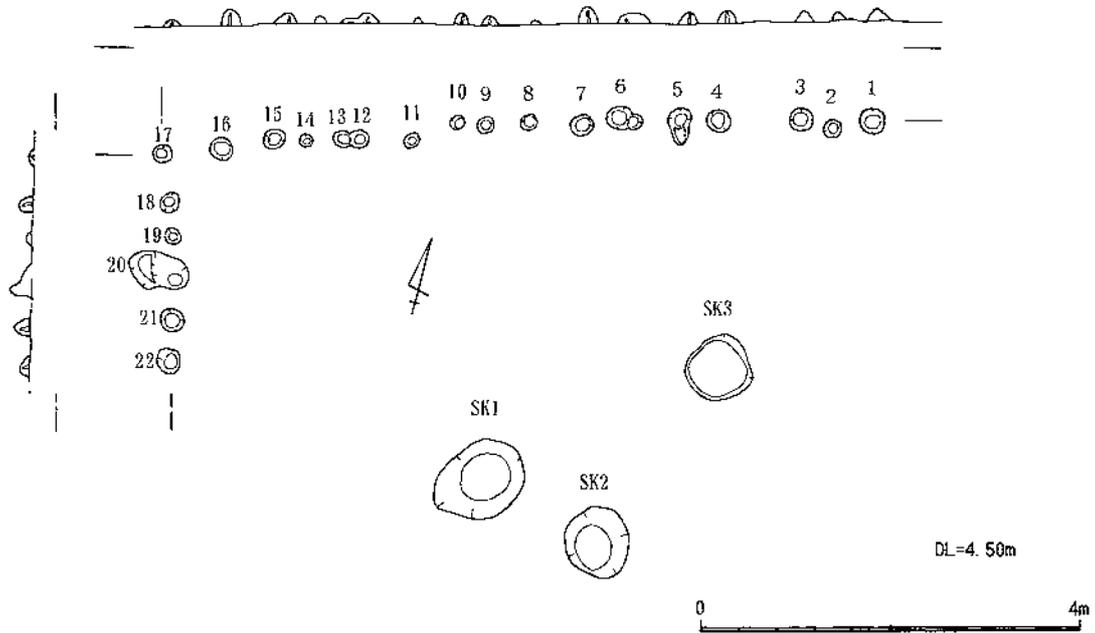


Fig.10 SA 1 平面図及び断面図、SK 1・2・3 平面図

柱穴番号	平面規模(cm)	深さ(cm)	形状	柱穴番号	平面規模(cm)	深さ(cm)	形状
1	27×27	14	円形	12	18×20	10	円形
2	19×19	10	円形	13	19×(16)	6	円形
3	25×24	13	円形	14	14×15	9	円形
4	21×23	15	円形	15	22×23	12	円形
5	(40)×25	13	不定形	16	24×25	18	円形
6	25×(35)	12	不定形	17	18×20	9	円形
7	22×24	19	円形	18	22×22	16	円形
8	17×18	6	円形	19	18×18	6	円形
9	19×18	11	円形	20	37×(65)	24	不定形
10	16×17	13.5	円形	21	23×25	19	円形
11	15×17	7	円形	22	26×26	12	円形

Tab.1 SA 1 柱穴計測表

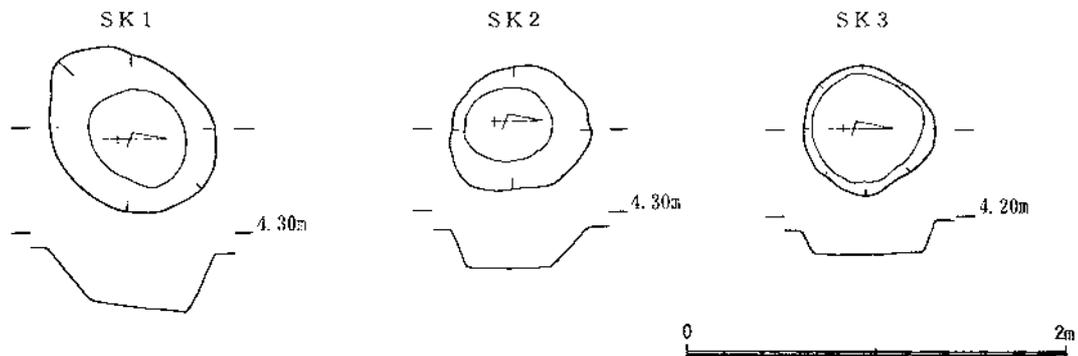


Fig.11 SK 1・2・3 平面図及びエレベーション図

SK 2

調査区南西部、K-27において検出した。SK 1の東側約1.3mに位置している。平面規模は長径が約73cm、短径は67cmを測り、ほぼ円形を呈している。深さは約22cmを測り、埋土はSK 1と同じく単層の暗青灰色粘質土層である。出土遺物に関しては皆無である。

SK 3

調査区南西部、K-27において検出した。SK 1、2と同様にSA 1の南側に位置し、SK 1の東側約2.7mに位置している。平面規模は長径が約70cm、短径は65cmを測り、ほぼ円形状を呈している。深さは約19cmを測り、埋土はSK 1、2と同じく単層の暗青灰色粘質土である。出土遺物に関しては皆無である。

(2) 第IV層検出遺構

P 1

調査区東部のD-35において検出した。検出段階では平面規模は長径が約38cm、短径は約27cmを測る楕円形状を呈していたが、断面観察段階で掘り込みがみられ、柱穴の長径規模は約58cmを測る。深さは約36cmを測り、中央には直径約25cmの柱根が残存している。また掘り込み部分からは約10cm大の河原石が確認された。柱根を固定するために使用された可能性も考えられる。埋土は単層の青灰色粘質土層であり、出土遺物については皆無である。

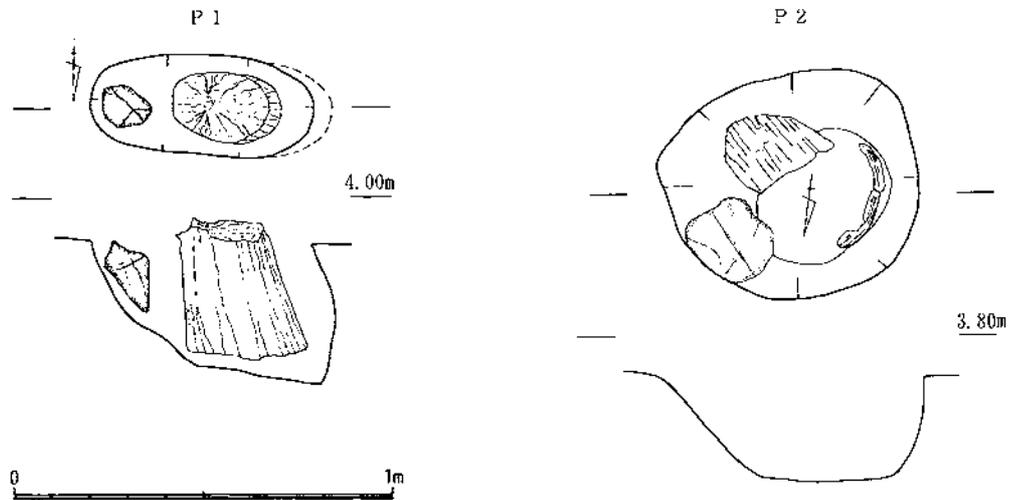


Fig.12 P 1・2 平面図及びエレベーション図

P 2

調査区の東部のD-34、P 1 から南東約3.6m地点より検出した。長径は70cm、短径は60cmを測る楕円形状を呈し、柱穴の深さは約28cmを測る。中央にはP 1 と同じく柱根が残存していたと考えられるが、後世の削平のためか部分的にしか残存していない。P 1 と同じく約20cm大の河原石が確認された。埋土は単層の青灰色粘質土層で、出土遺物は皆無である。

SR 1

調査区南西部L-26~28、M-27において検出した。検出範囲は南北方向に約4.6m、東西方向に約5.7mを測る。自然流路の一部と考えられる。平面規模は東西方向では流路の端と思われる北部で約2.2m、中央部では約3.4m、南部では約5.7mを測り、南側にいくほど範囲は広がっている。また西側は浅いテラス状を呈している。流路の深さは北部で40cm、南部の最深部では約90cmを測り、北部から南部にかけて深くなっている。流路の南部は調査区南限にあたるために、全体を検出することはできなかった。南側に行くほど幅が広く深くなることから、流路は南側の調査区外にのびると考えられる。埋土は単層の暗茶褐色腐植土層である。出土遺物はFig.17-1~10をはじめとする土器の他、土師器細片もあわせると約172点出土しており、遺物の大部分は北側の斜面部に集中して出土している。

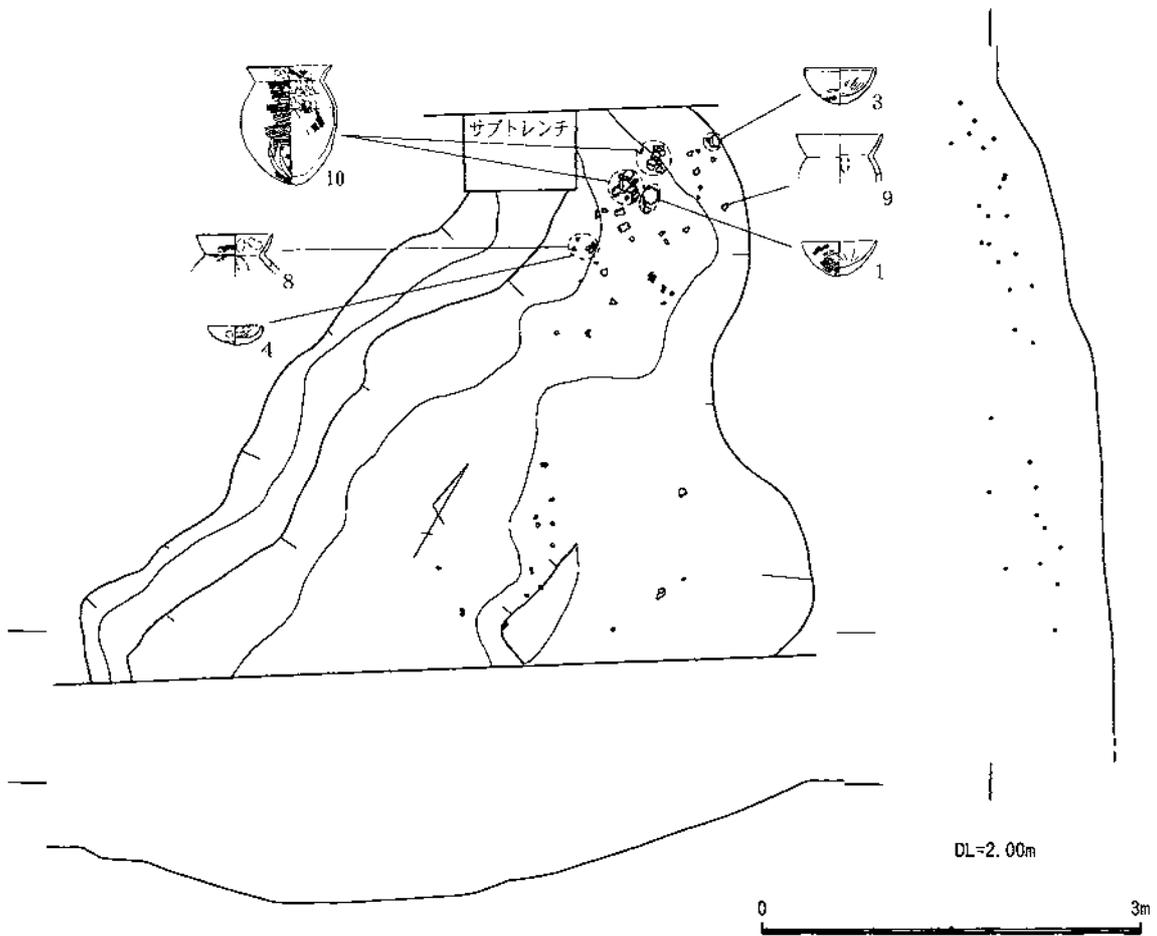


Fig.13 SR1平面・エレベーション図及び出土遺物垂直分布図

SR2

調査区南西部、L-26、27、M-26、27において検出した。第IV層で検出したSR1の下層にあたる。SR1と同じく自然流路の一部分と考えられる。平面規模は南北方向に約6.7m、東西方向に7.6mに及ぶ。東西方向では北部では2m、中央部では3.6m、南部では約7.6mを測り、南側に行くほど範囲が広がる。深さは北部では20cm、最南部の最深部では約1.4mを測り、SR1と同じく北から南側にかけて範囲も広く、深くなっていく。調査区の南限にあたる為に、遺構全体の把握は不可能であったが、SR1と同じく調査区外にのびるものと考えられる。埋土はオリーブ黒色腐植土層で、木片を多く含んでいる。出土遺物はFig.18-11からFig.20-36をはじめとする縄文晩期から弥生後期後半の土器が出土している。また木製品その他、土器片が細片もあわすと約337点出土している。遺物の大部分は流路北端に集中している。

炭化物集中

調査区西部のJ-26~27にかけて検出した。遺物の集中とともに暗黒褐色の炭化物集中を検出し

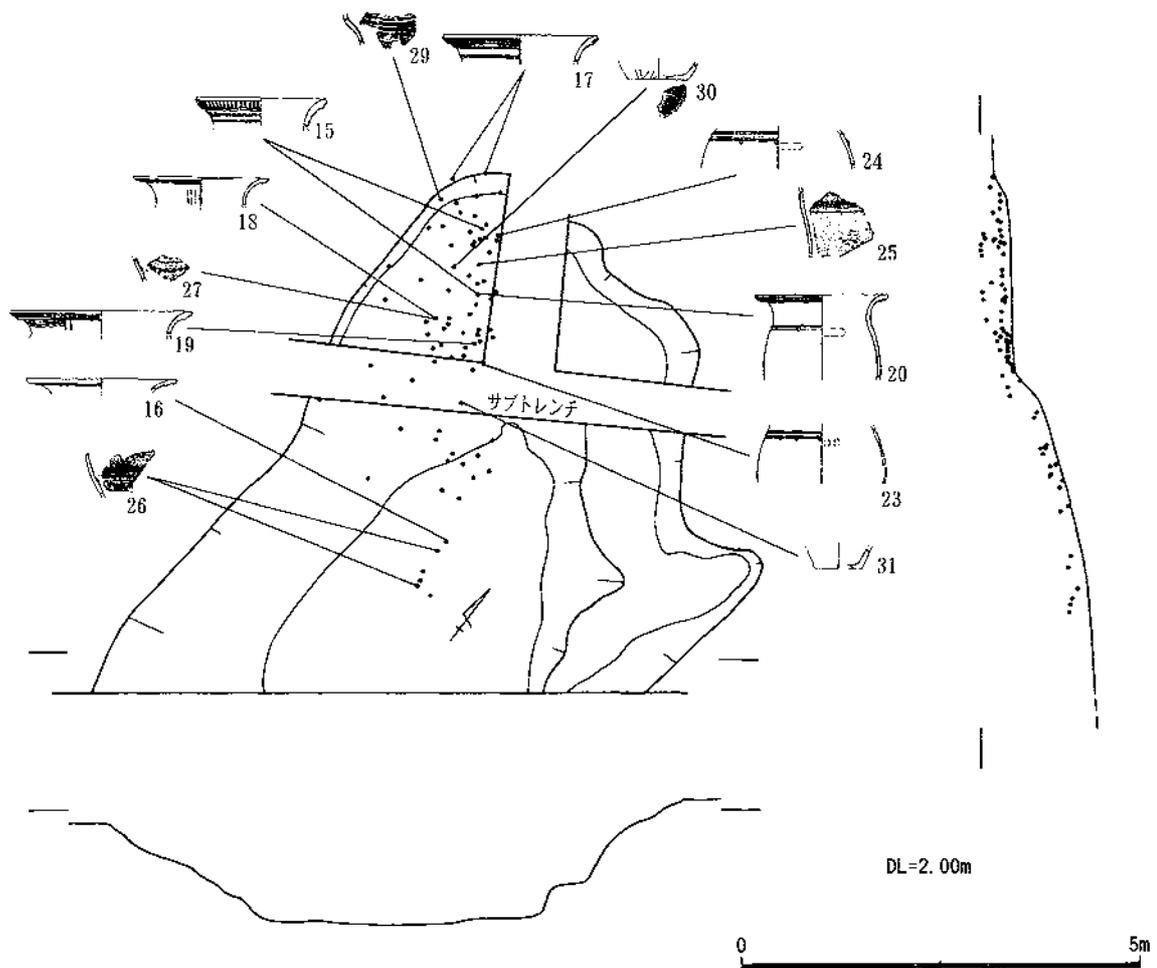


Fig.14 SR2平面・エレベーション図及び出土遺物垂直分布図

た。平面規模は長径が50cmと、35～45cmの範囲を測る2箇所からなる。ともに平面形は不定形である。範囲内には土器片が混在しており、土器片部分には炭化物が特に集中している。炭化物集中内にはFig.37-134、Fig.38-142、Fig.40-153、155、157の土器が出土しているが、どれも甕のみである。この遺物に関しては次章の包含層遺物で詳しく述べるが、134は外面、142は口縁部外面、153は内面に煤の付着が認められる。周辺からはFig.37-118の甕とFig.36-82の手握ね土器が出土しており、118は口縁部から体部にかけて一部煤の付着が認められる。

(3) 第IX層検出遺構

SX1

調査区北西部のI-26、II-27において杭列を検出した。杭列は南西から北東方向に2列を確認した。東側の1列には16本、約0.6m離れた西側には2本の木杭が打たれている。杭列の距離は西側が約6.2m、東側で約0.6mを測り、ともに、北東方向の調査区外にまで伸びると考えられる。調査では木杭を検出したのみで、柱穴等の掘り込みは確認できなかった。杭間距離は杭3から4の間

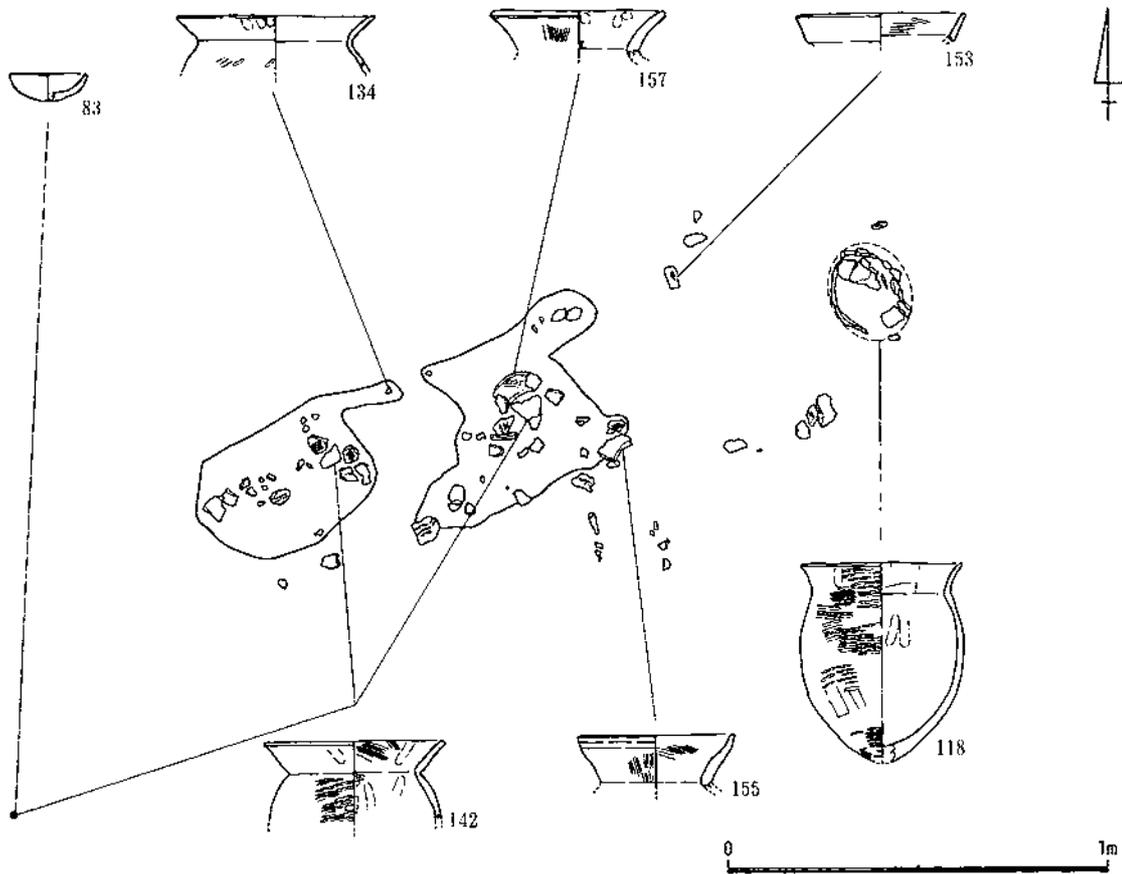


Fig.15 炭化物集中及び遺物出土状況

が最短の20cm、杭6から7の間が最長で84cmを測り、等間隔では打たれていない。各杭の規模は腐植により原形を留めているものは少ないが、杭14の全長18.5cmを測るものから、杭16の全長83cmを測るものまで存在する。平均では40cm台のものが多い。全幅は5cm未満のもの3本、5～10cmのもの10本、10cm以上のものが2本あり、全厚は2～3cmと非常に薄い作りを呈している。また、先端は三角形に尖らせてはおらず、ほとんどの先端は幅の広い板状を呈している。このSX1の側からはFig.29-78の甕が出土している。

2. 遺構出土遺物

今回の調査では第Ⅲ層において柵列(SA1)、第Ⅳ層において自然流路の一部と考えられるSR1、SR2を検出した。ここではその遺構から出土した遺物について述べていきたい。SR1で

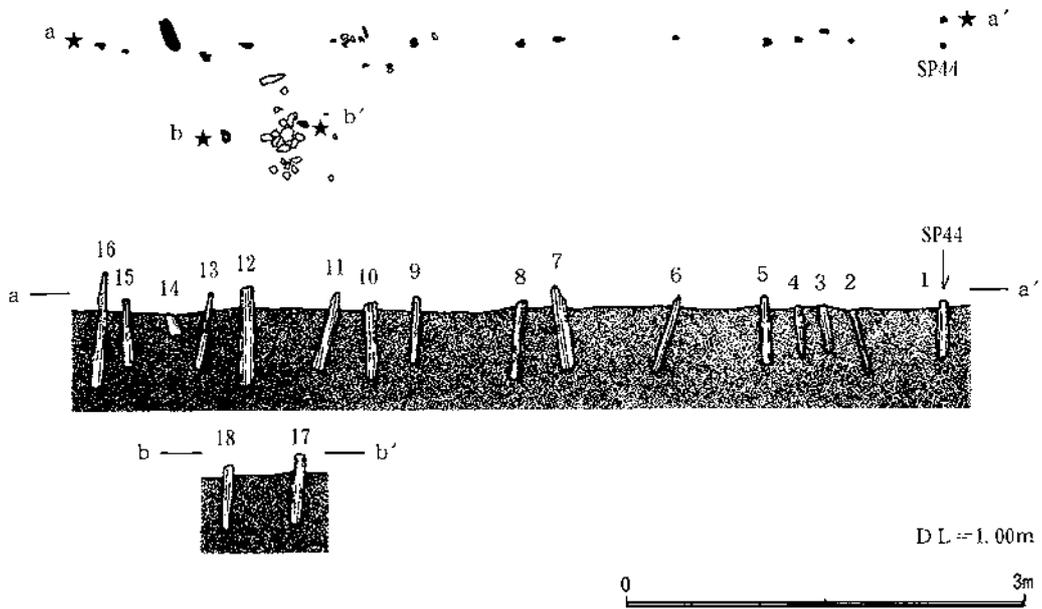


Fig.16 S X 1 平面図及び断面図

杭番号	層位	法量(cm)			杭番号	層位	法量(cm)		
		全長	全幅	全厚			全長	全幅	全厚
1	IX	(47.9)	9.7	3.4	10	IX	52.6	6.5	2.7
2	IX	(48.5)	4.25	1.2	11	IX	54.7	4.8	2.0
3	IX	32.8	6.9	2.0	12	IX	(68.0)	10.1	3.3
4	IX	42.0	6.0	1.0	13	IX	73.2	5.5	1.6
5	IX	49.4	6.2	3.0	14	IX	(46.3)	9.5	3.7
6	IX	52.1	5.6	1.5	15	IX	(52.3)	5.3	1.5
7	IX	61.8	8.3	3.5	16	IX	83.2	8.4	3.8
8	IX	55.7	4.4	3.2	17	IX	55.8	7.2	2.8
9	IX	46.5	5.0	2.1	18	IX	55.3	4.85	2.4

Tab.2 S X 1 木杭計測表

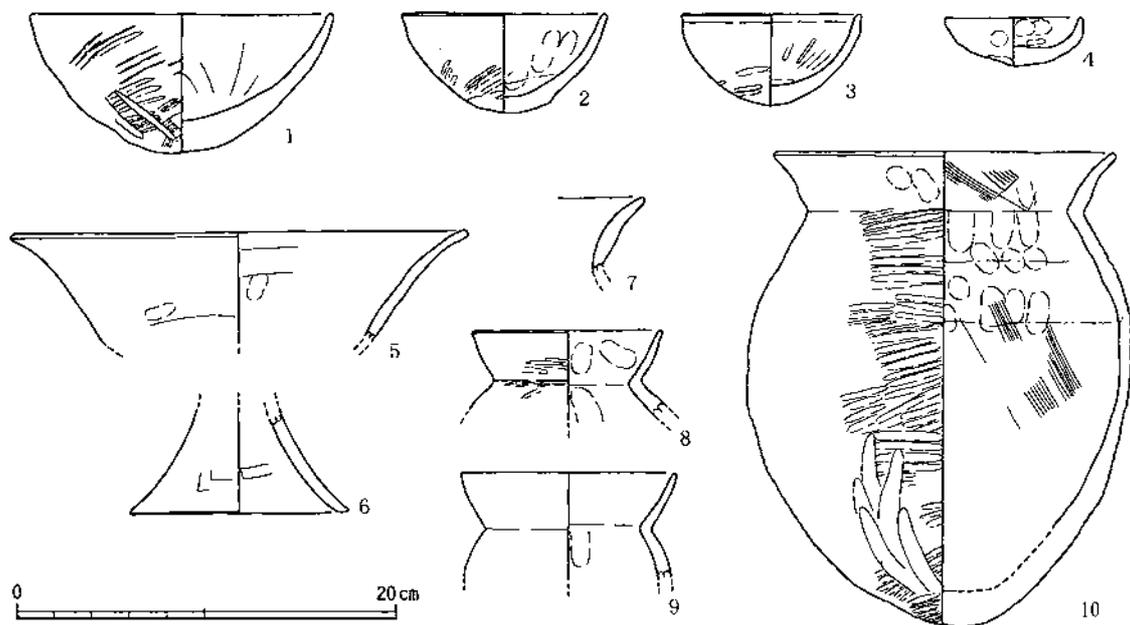


Fig.17 S R 1 出土遺物実測図

は土師器が172点の他、木製品等が出土している。S R 2では縄文土器1点、弥生土器が細片もあわせると337点出土している。下層の第IX層ではS X 1を検出し、木杭を検出している。ここでは図示できた土器、木杭等について述べていく。詳細については遺物観察表を参照していただきたい。

(1) S R 1 出土遺物 (1~10)

1~3は土師器の鉢である。1はやや尖底気味の底部から体部は斜め上方に伸び、口縁部に至る。内面には篋状工具による放射線状のナデがみられる。また外面は底部から口縁部付近までタタキ調整が行われ、底部付近はその後ナデが施されている。2は体部は丸みをもち、体部外面にはタタキ目痕、内面には篋状工具によるナデ痕がみられる。3は底部は指頭によりやや平底をなし、体部は丸みをおび口縁部に至る。底部から体部にかけては叩き成形のあとナデが施されている。口縁部内外面には横方向のナデ、体部・底部内面にはナデが施される。4は手捏ね土器の鉢である。体部から口縁部にかけては内弯しており、杯形を呈している。内外面共に、指押しにより成形されている。5は高杯の杯部である。体部から口縁部にかけて外反している。内外面ともにナデ調整が施され、所々煤が付着している。6は高杯の脚部である。底部は「ハ」の字状に開く形態を呈しており、端部は下方につまみ出している。内外面ともに篋状工具によるナデ調整が施されている。7は甕の口縁部である。内面は篋状工具によるナデ、外面には同じくナデ調整が施されている。外面には煤が吸着している。8、9は壺である。8は頸部から口縁部まで残存している。頸部は「く」の字状に

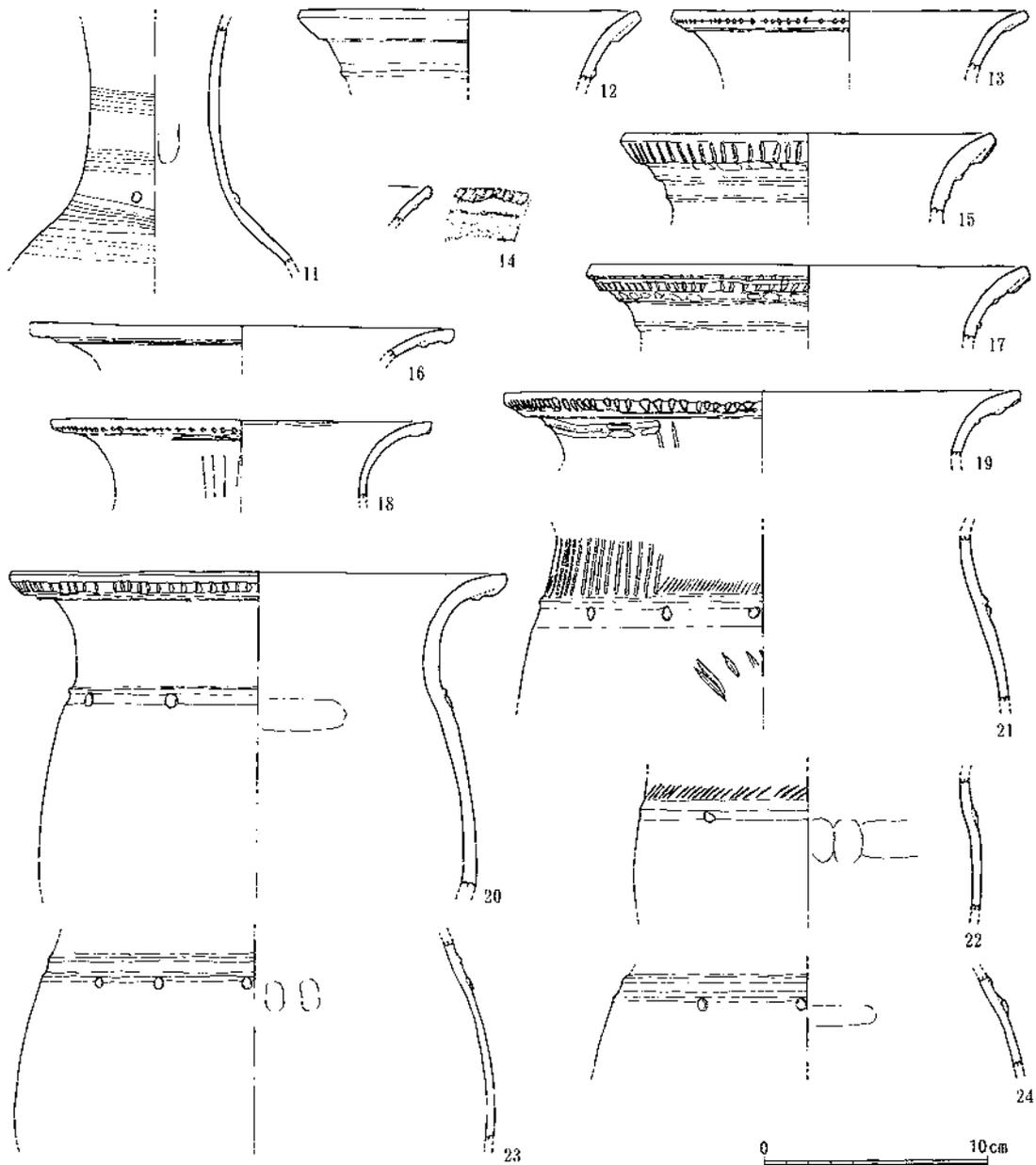


Fig.18 S R 2 出土遺物実測図 1

曲がり口縁部に至る。外面は叩き成形の後、ミガキ調整をおこなっている。内面にはナデが施されている。外面は一部煤が付着している。9も頸部から口縁部にかけて残存しており、頸部から口縁部にかけては、「く」の字状を呈している。内外面ともにナデ調整が施され、外面には一部煤が付着している。10は甕である。やや尖底気味の底部より体部にかけて丸みをもって立上がり、上方に伸びる。体部から頸部にかけては内弯し、口縁部に至る。口縁部は外反しながら上方に伸びる。頸部から胴部の外面は叩き成形、体部下半から底部にかけては叩き成形の後、ナデが行われている。頸部内面には指頭による圧痕、口縁部から体部内面にはハケ調整がみられる。内外面ともに煤が付着している。

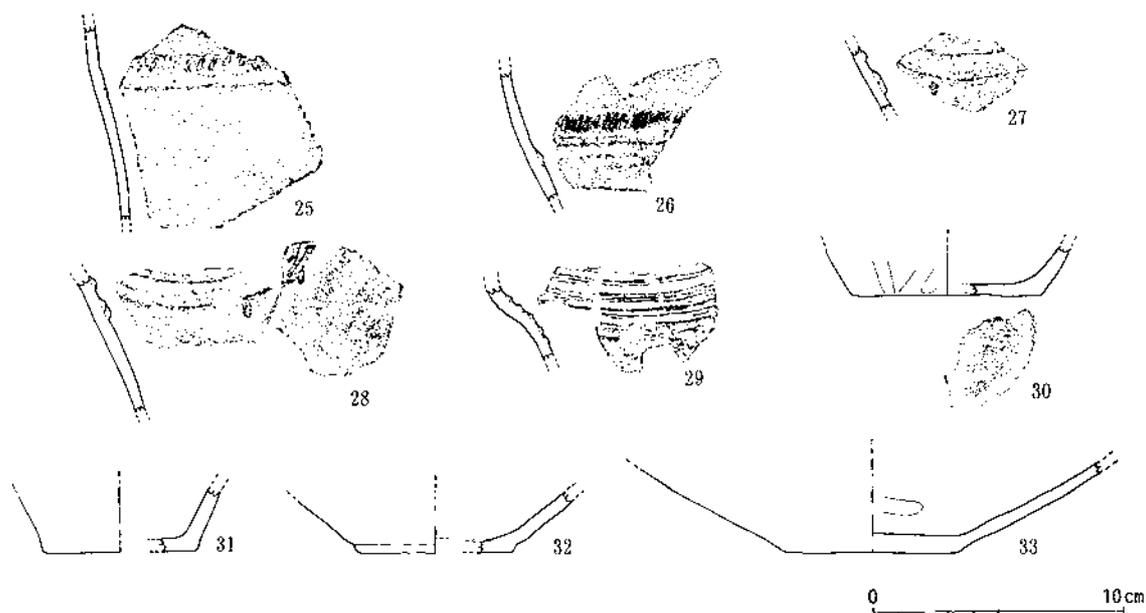


Fig.19 S R 2 出土遺物実測図 2

(2) S R 2 出土遺物 (11~37)

11は壺の頸部である。胴部から頸部にかけてゆるやかに立上がり、頸部は斜め上方に伸びる。全体的に摩耗が著しく調整が明確ではないが、外面には5条の櫛描が2箇所、頸部から胴部にかけては数条の櫛描がみられる。頸部の櫛描下には楕円形状の浮文が貼付されている。12は壺の口縁部である。端部は粘土帯を貼付し肥厚させており、頸部外面には微隆起帯が巡る。口縁部下はナデがみられる。13は壺の口縁部である。頸部から口縁部へは外反しながら伸び、端部は平坦面をなしている。外面には粘土帯を貼付し肥厚させており、浅い刻目が施されている。また粘土帯の下方は指押しのためか凹凸がみられる。その下方には2条の微隆起帯を貼付している。14は壺の口縁部である。端部外面には薄い粘土帯を貼付しており、口唇部には刻目を施している。粘土帯下はナデている。15は壺の口縁部である。口縁端部には刻目を浅く施し、下位には微隆起状の突帯が巡る。他に比べ器壁が薄い作りとなっている。16は甕の口縁部である。全体に摩耗著しく調整は不明瞭であるが端部には粘土帯を貼付し、肥厚させている。また下方には微隆起帯が1条巡っている。15と同様に薄い作りを呈している。17~19は甕の口縁部である。17は頸部から口縁部にかけて大きく外反し、端部は面取りされたような平坦面を呈している。外面には粘土帯を貼付して肥厚させており、その上から刻目を施している。粘土帯直下は押圧されており、所々凹凸状を呈している。その下方には2条の微隆起帯が施されているが、同様に指押しを行っており、凹凸状を呈している。18は頸部から口縁部にかけて大きく外反し、端部は面取りされている。外面には幅の狭い粘土帯を貼付して肥厚させており、口唇部には刻目が施され、刻目下は横ナデを行っている。口唇部下には横方向のハケ目調整、頸部には縦方向の荒いハケ目調整を施している。全体に器壁は薄い作りを呈している。19は頸部から口縁部にかけて外反し、端部は面取りされ平坦面をなしている。口縁部外面には幅5mmの粘土帯が貼付され、上位 $\frac{1}{2}$ には刻目がなされ、すぐ下位は篋状の工具により押圧されている。口

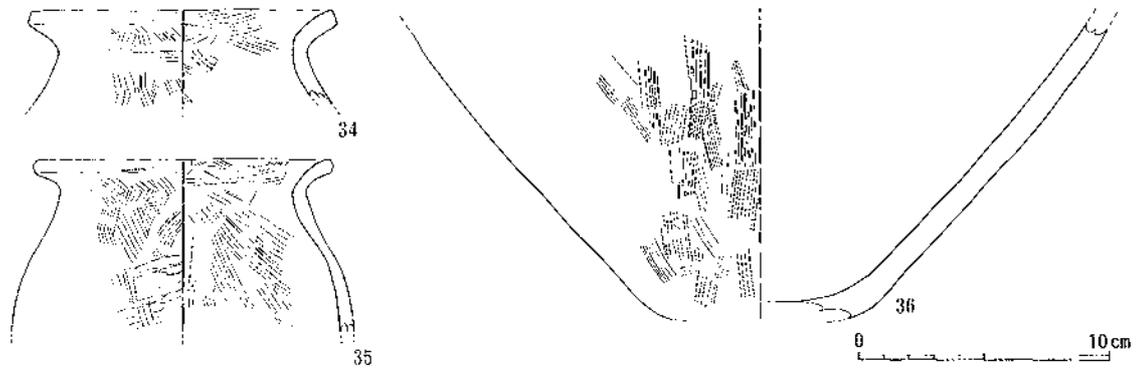


Fig.20 S R 2 出土遺物実測図 3

縁部下位も同じく篋状工具により押圧され所々に凹凸がみられる。内外面には一部煤が付着している。20はやや丸みをおびた胴部から頸部に至り、頸部はくびれ、口縁部にかけて大きく外反する。端部は面取りされており、口縁部外面には幅5mmの粘土帯が貼付され、下端には刻目が施されている。下位は強いナデにより微隆起帯を作り出している。頸部から胴部にかけてはそれを区画するように細い微隆起帯が巡っている。微隆起帯の上下は横方向の強いナデが行われ、段を明確化し、下位には3mmを測る楕円形状の浮文が2箇所貼付されている。内面もナデによる調整が行われている。外面には一部煤が付着している。21~24は甕の体部である。21は20と同様に頸部と胴部を画するように微隆起帯が巡り、下位には3mmを測る楕円形状の浮文が2箇所貼付されている。頸部外面には刻目と縦方向の篋描が12条施されている。全体に器壁は薄く、外面には一部煤が付着している。22は外面に微隆起帯が1条巡る。上下は強いナデにより段を形成している。頸部外面には篋状工具による刻目が施されている。微隆起帯の直下には楕円形状の浮文が貼付されている。内外面はナデ調整を行う。23も同じく頸部と胴部を画する微隆起帯が2条施され、下位の微隆起帯直下には円形浮文が貼付される。全体の様相は分からないが、浮文は約4cm間隔で貼付されている。全体に摩耗が著しく調整は不明瞭である。24も23と同じく頸部と胴部間には2条の微隆起帯、下位の微隆起帯には円形浮文が貼付されている。内面にはナデ調整がみられる。25は頸部から体部間に1条の微隆起帯がめぐり、頸部外面には斜位方向の刻目が施される。微隆起帯下位には1箇所円形浮文が剥離したと思われる箇所が存在する。全体に摩耗が著しいため調整は不明瞭である。26も頸部から体部にかけて残存している。外面には微隆起帯を1条巡らし、上方には斜位の刻目が巡らされている。27、28も体部のみ残存している。外面には微隆起帯を2条巡らし、下位には楕円形状の浮文を貼付して



Fig.21 S R 2 出土遺物実測図 4

いる。28は微隆起帯間を押圧して成形し、器壁は薄い作りを呈している。29は体部片である。外面には4条の微隆起帯が巡る。30～33は底部である。30は平底から体部にかけて斜め上方に伸びる。外面には篋状工具による削り、ナデがみられる。底部外面には篋状の痕が残る。31は平坦な底部から体部は斜め上方に伸びる。内面には煤が付着している。32は平坦な底部から体部は斜め上方に伸びるが、底面の上方で段をなしており、高台状を呈している。33はやや大振りの平底の底部から体部は外上方へ大きく開いていく。内面には一部ナデ調整がみられ、全体に薄い作りを呈している。34、35は甕の胴部から口縁部である。胴部に最大径をもち、体部から頸部に向かって「く」の字状に曲がり、口縁部に至る。口縁部端部はやや平坦面をなしている。胴部外面は叩き調整の後ハケ調整、頸部から口縁部にかけては不定方向のハケ調整を行っている。口縁部内面は横方向のハケ、頸部から胴部内面は斜位方向のハケがみられる。ともに弥生後期後半の様相をもつ。36は甕の底部である。平坦気味の底部から体部は斜め上方に開きながら伸びる。体部外面は叩き調整の後、縦方向・斜位方向の丁寧なハケ調整を行う。内面には煤が付着している。37は縄文土器の深鉢の口縁部である。口縁端部外面には刻目突帯文、外面には条痕が施されている。その他に図示できなかったが、薄い木片を編んだと考えられる木製品が出土している。

(3) S A 2 出土木製品 (38～46)

調査区北西部 I-26、H-27の第Ⅸ層において検出した杭列の杭である。まだ調査区外に続くと考えられた。杭は全体で17本検出したが、腐植したものが多くを占め、図示できたものは9点のみである。各杭とも先端を三角形状に加工したものはなく、ほとんどが断面が薄い矢板状の板材を呈している。詳細は後項の観察表を参照されたい。(筒井)

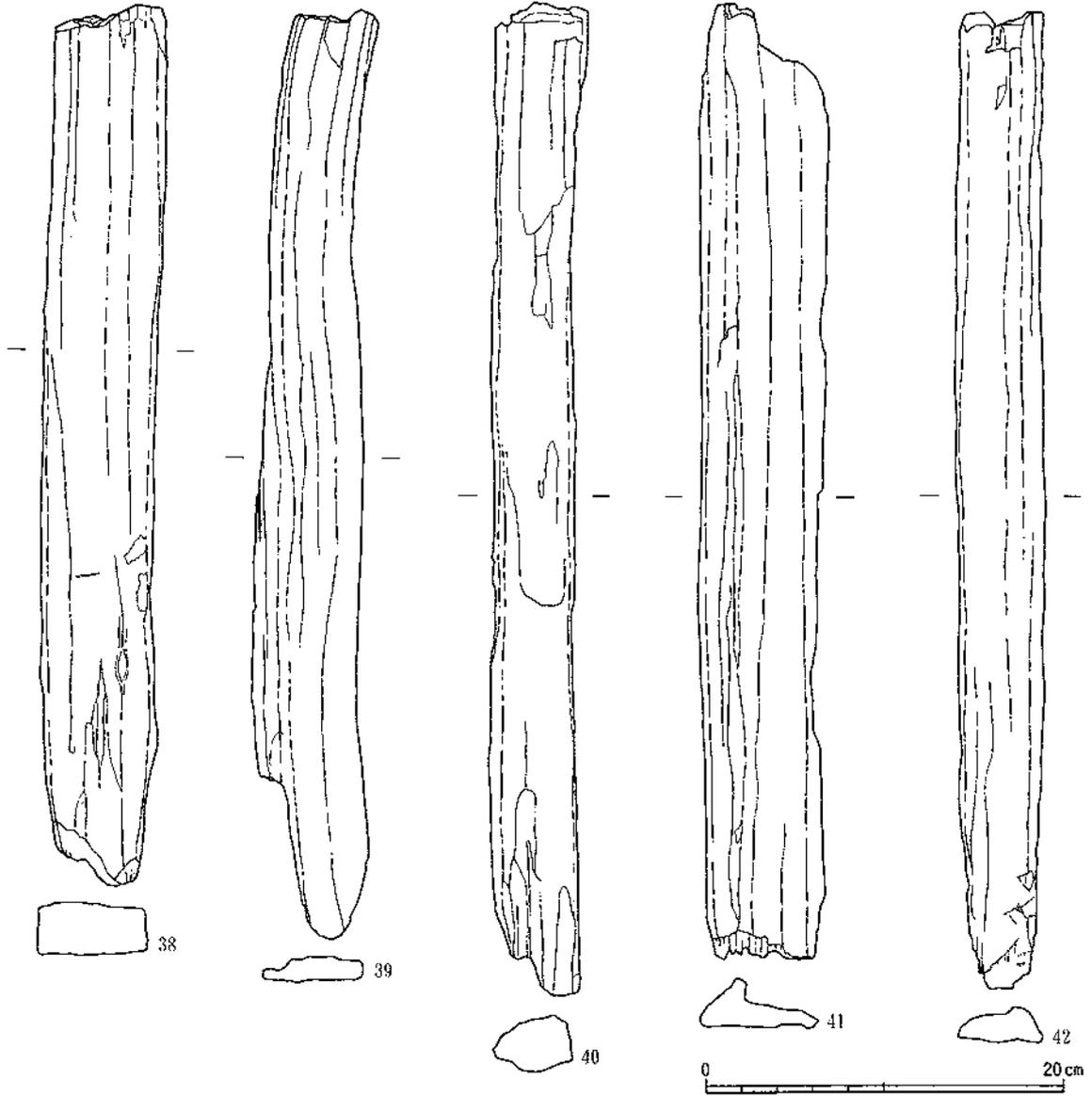


Fig.22 S X 1 出土杭実測図 1

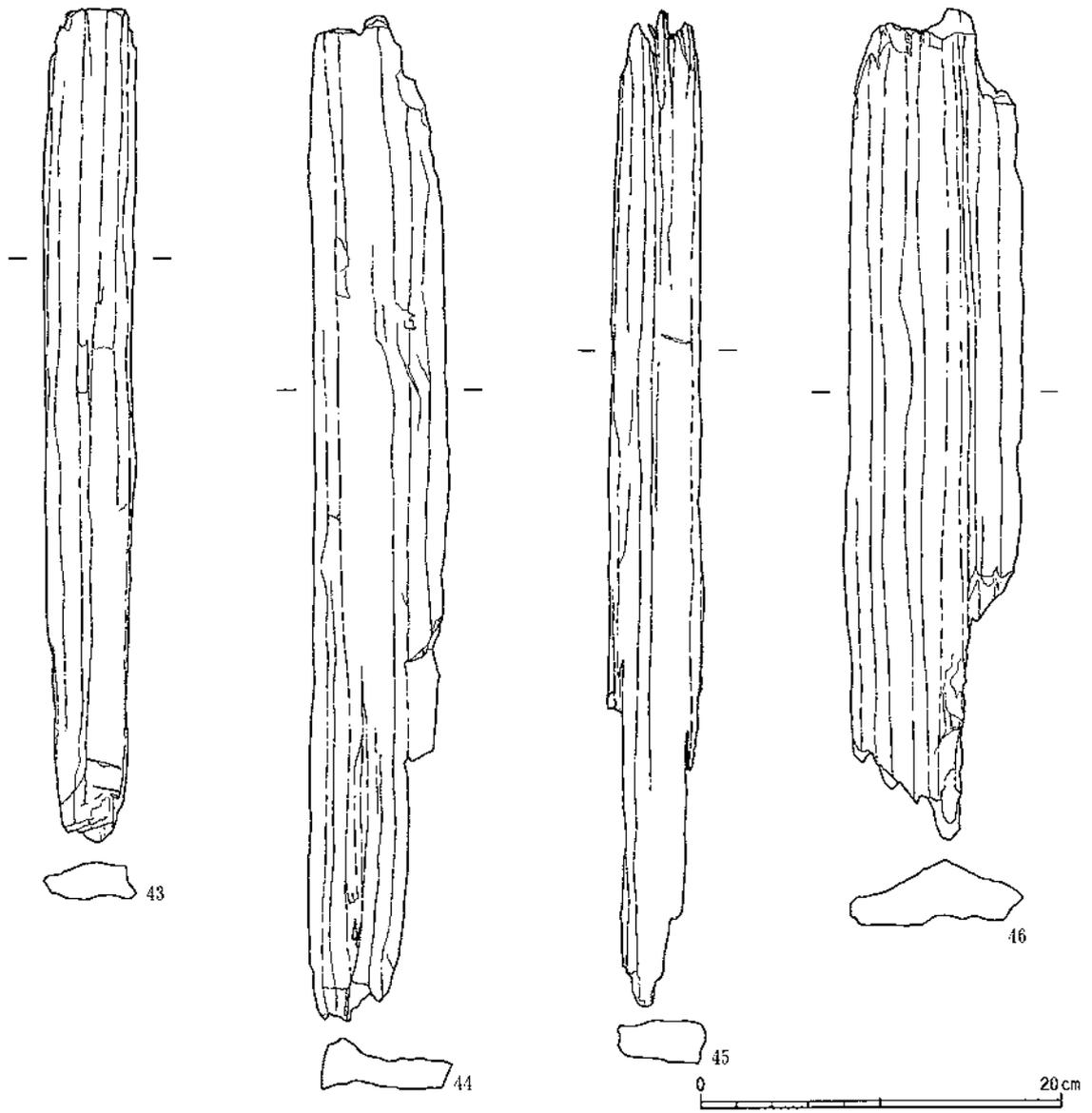


Fig.23 S X 1 出土杭尖测图 2

第2節 遺構外出土遺物

1. 縄文時代～弥生時代

遺構外の出土遺物は、主にV層からIX層の包含層出土遺物である。縄文時代から弥生時代前期の遺物は、IX層から2点出土しており数少ない。弥生中期の遺物は、本調査区の西側部分を中心にVI層からVI'層にかけて出土している。弥生中期の遺物破片点数は約900点という少ない出土量で、さらに実測可能な遺物も細片で全体的な器形を伺い知るものが少ない。しかし細頸壺やいわゆる土佐型甕と呼称され、四国西南部に主に認められる特徴を有する土器等が出土している。

ここでは、個々の遺物の特徴を述べていくことにして、法量・出土層位等の詳細は法量表を参照願いたい。また、弥生中期の土器群の中で従来形態から壺と表現されていた遺物について、いわゆる土佐型の範疇に入ると考えられる遺物については、ここでは甕として表現しておく。

縄文晩期の土器1点が、調査区西側部分のIX層から出土している。47は、浅鉢の口縁部破片と考えられる。口径は復元できないが、口縁部は外反し端部外面に一条の沈線が施される。調整は、全体的に摩耗が著しいが、内面に一部横位の磨きが確認できる。色調は、内外面暗褐色で胎土は石英・長石粒や1mmの砂粒を多く含む。

48から53までは壺で、細頸壺に分類できるものである。48は、胴部から直線的に上方に立上がり、頸部中程よりやや外方に外傾して口縁部に立上がる。頸部は、9本単位で7条の櫛描直線文が施される。施文は、精巧ではなく原体は細くて浅い。口縁部は、櫛描の上から刻目を施す。浮文は、口縁下7箇所施されているが、間隔は一定でない。口縁部内面は、横ナデで頸部は筒状の原体で縦方向のナデを行う。内外面に煤が付着する。49は、48と比べ口径がやや広くなるが、頸部から上方

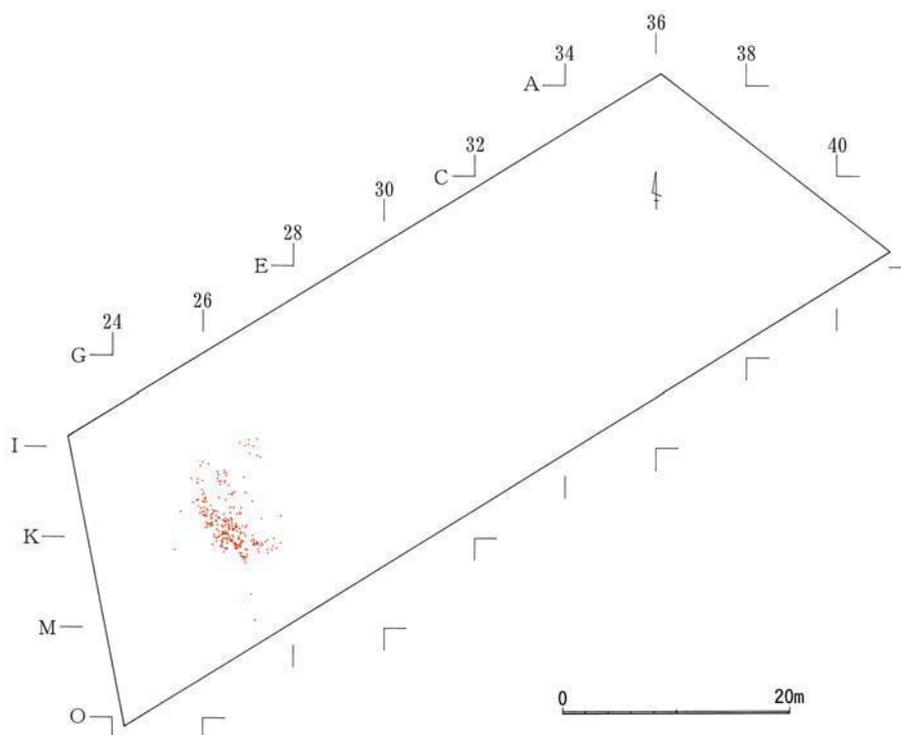


Fig.24 弥生時代VI・VI'層出土遺物分布図

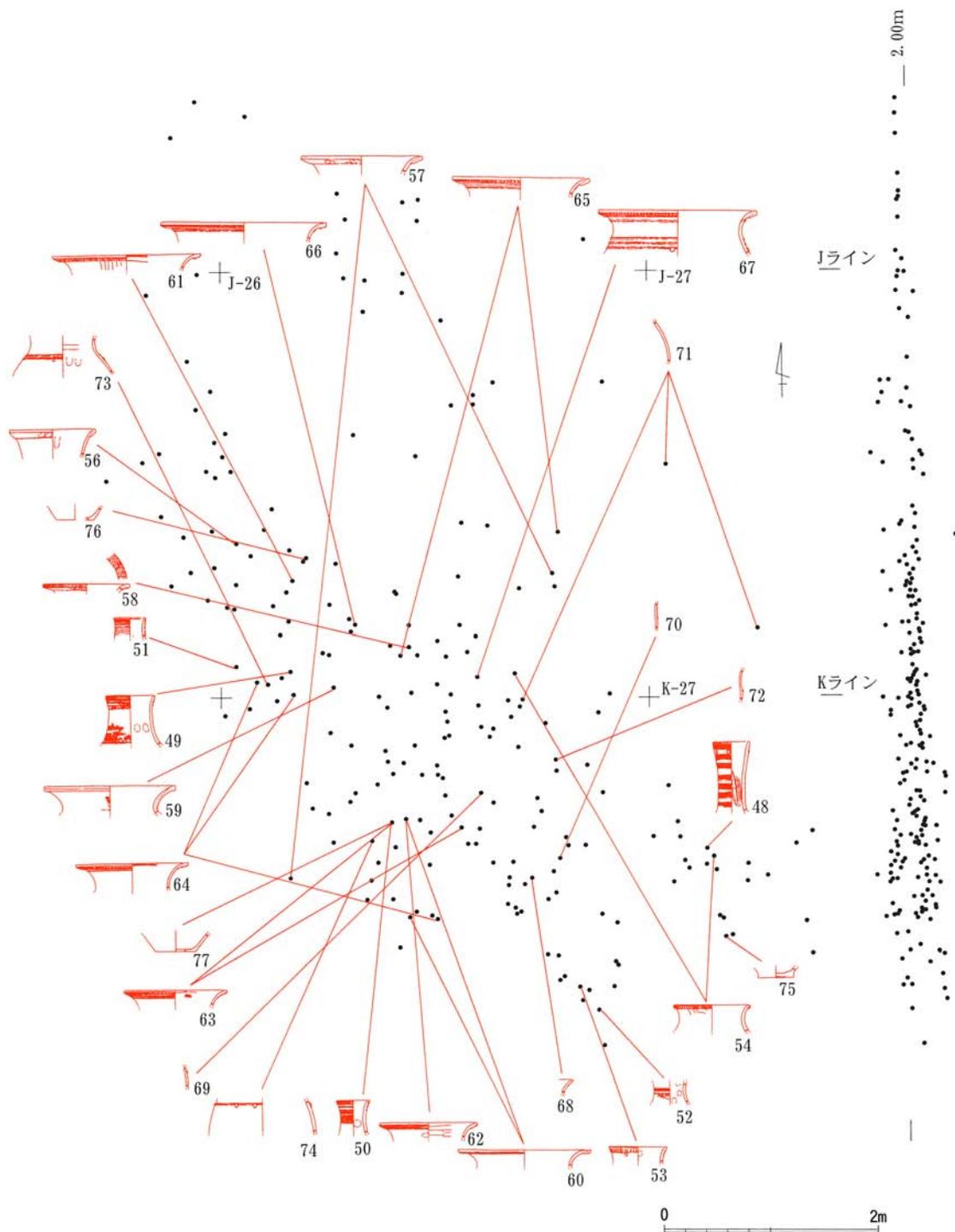


Fig.25 弥生時代VI・VI'層出土遺物接合図及び垂直分布図

に立上がり、口縁部は緩やかに外傾する。頸部外面は、櫛描波状文と直線文を交互に施文され櫛描の原体は細く浅い。口縁部外面には、粘土を貼付し縦位の刻目を入れる。その下位には、2条の微隆起帯を貼付し、その間には刺突文が施される。微隆起帯の下位にも櫛描波状文が施される。内面はナデ調整される。50は、頸部から上方に立上がり、口縁部は緩やかに外傾する。頸部は、櫛描直線文が施文される。口縁部外面には、粘土を貼付し縦位の刻目を入れる。

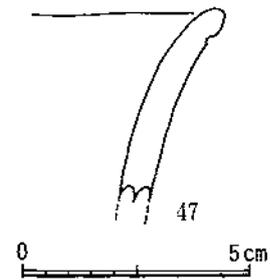


Fig.26 IX層出土縄文土器実測図

その下位には、2条の微隆起帯が貼付される。内面はナデ

調整され、一部に指頭圧痕が残る。51は、頸部から上方に立上がり、口縁部は緩やかに外傾し端部は面をなす。口縁部外面には、薄い粘土帯を貼付し斜位の刻目が施される。頸部外面には、3条の微隆起帯が施されているのが確認できる。52は、頸部が上方に立上がり、外面に数状の櫛描直線文とその下には波状文が施される。全体的に摩耗が著しい。53は、頸部から上方に立上がり、口縁部は緩やかに外傾する。口縁部外面には、幅1.2cmの粘土帯を貼付し縦位の刻目を入れる。その下位には、円形浮文が貼付される。内面はナデ調整される。全体的に摩耗が著しい。

54から59は、広口壺と考えられる。54は、頸部が短く上方に立上がり、大きく外反し口縁部に至る。口縁部は、幅8mmの粘土帯を貼付し、口縁端部は丸くおさめ外面に刻目が施される。外面はやや摩耗しているがミガキ状に残るところがある。55は、頸部が上方に立上がり、口縁部にかけて大きく開く。口縁端部は面取られ、幅7mmの粘土帯が貼付される。粘土帯外面には、深く刺突され刻目が施される。口縁部から頸部にかけて外面に縦方向の荒いハケ目が施される。口縁部内面横ナデ調整である。56の口縁部は、ラッパ状に開き幅1.7cmの粘土帯を貼付する。粘土帯の外面には、一部指頭圧痕が残る。内面は、ナデが施される。57は、大きく開く口縁部に、幅2.4cmの粘土帯が貼付され肥厚させる。内外面横ナデが施される。58は、大きく開く口縁部に、粘土帯が貼付され肥厚する。断面貼付の痕跡は明瞭ではない。口縁端部は面をなし、端面に刻目が施される。口縁部内面にも1.7cmの幅で斜格子文が施される。全体的に摩耗が著しい。59は、大きく開く口縁部に、端部は肥厚し内線文が施される。口縁部内外面横ナデ調整で、頸部外面には縦方向のハケ調整が残る。

60から67と73・74は、いわゆる土佐型甕の範疇でとらえられる甕である。60は、大きく開く口縁部に、幅1.5cmの粘土帯が貼付され肥厚する。口縁端部は面をなし、端部下端に刻目が施される。口縁部内外面横ナデ調整が施される。61は、大きく開く口縁部に、幅1.6cmの粘土帯が貼付され肥厚するが断面貼付の痕跡は明瞭ではない。口縁端面の下部で粘土帯上端部に刻目と下端部は微隆起帯1条が施される。刻目と微隆起帯の間に指頭圧痕が残る。口縁部外面には、篋状工具による縦線が施される。内面は、横ナデ調整が施される。62は、大きく開く口縁部に、幅1.5cmの粘土帯が貼付され肥厚する。断面貼付の痕跡は明瞭ではない。口縁端部は面をなし、端面の下方で粘土帯上端部に刻目と下端部は微隆起帯1条が施される。全体的に摩耗が著しい。口縁部から頸部にかけて内外面ナデ調整が施される。63は、大きく開く口縁部に、幅7mmの粘土帯が貼付され肥厚する。口縁端部は面取られ粘土帯外面に刻目が施される。粘土帯の下方に微隆起帯2条が施される。内面は、

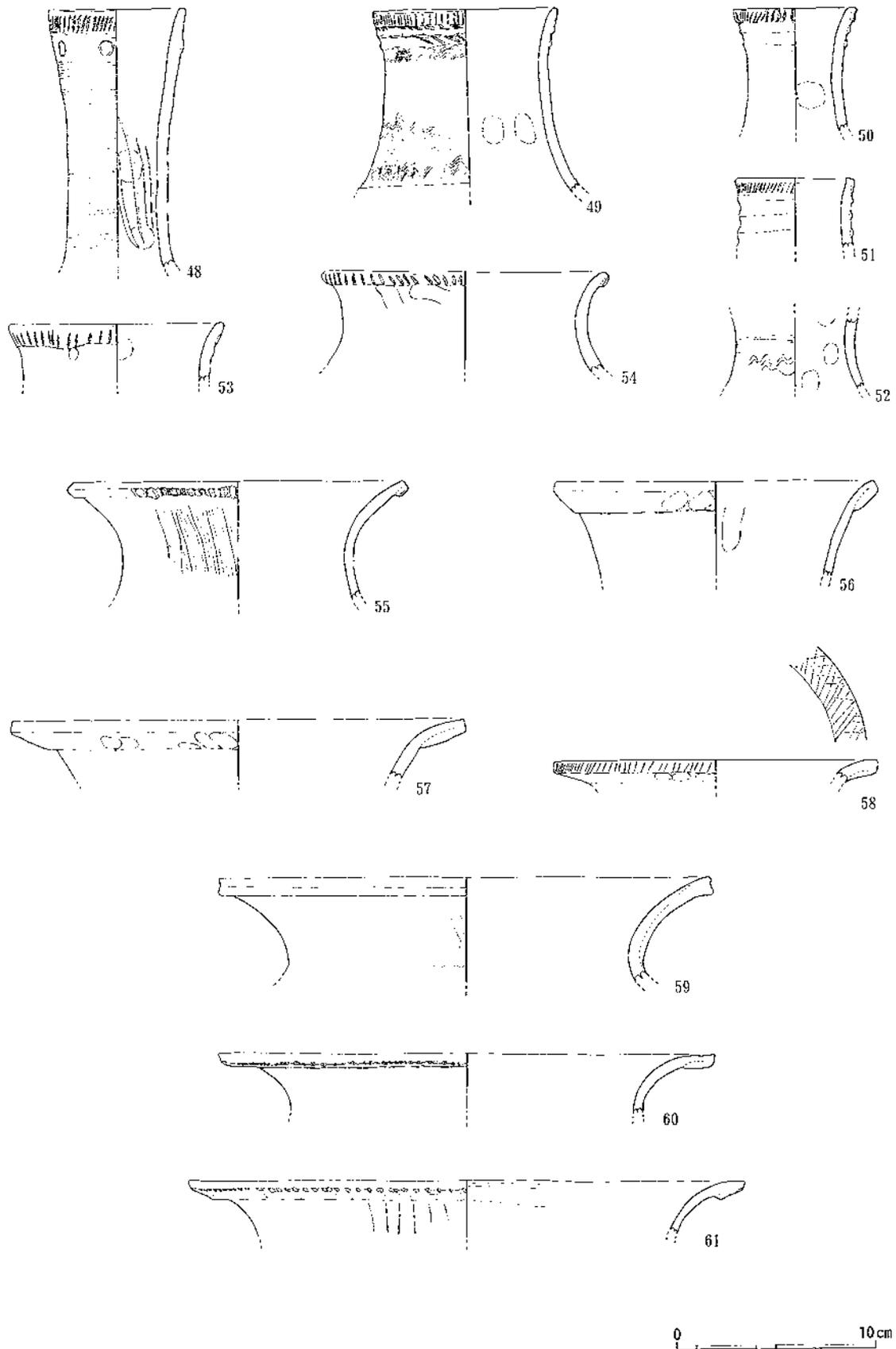


Fig.27 弥生土器实测图 1

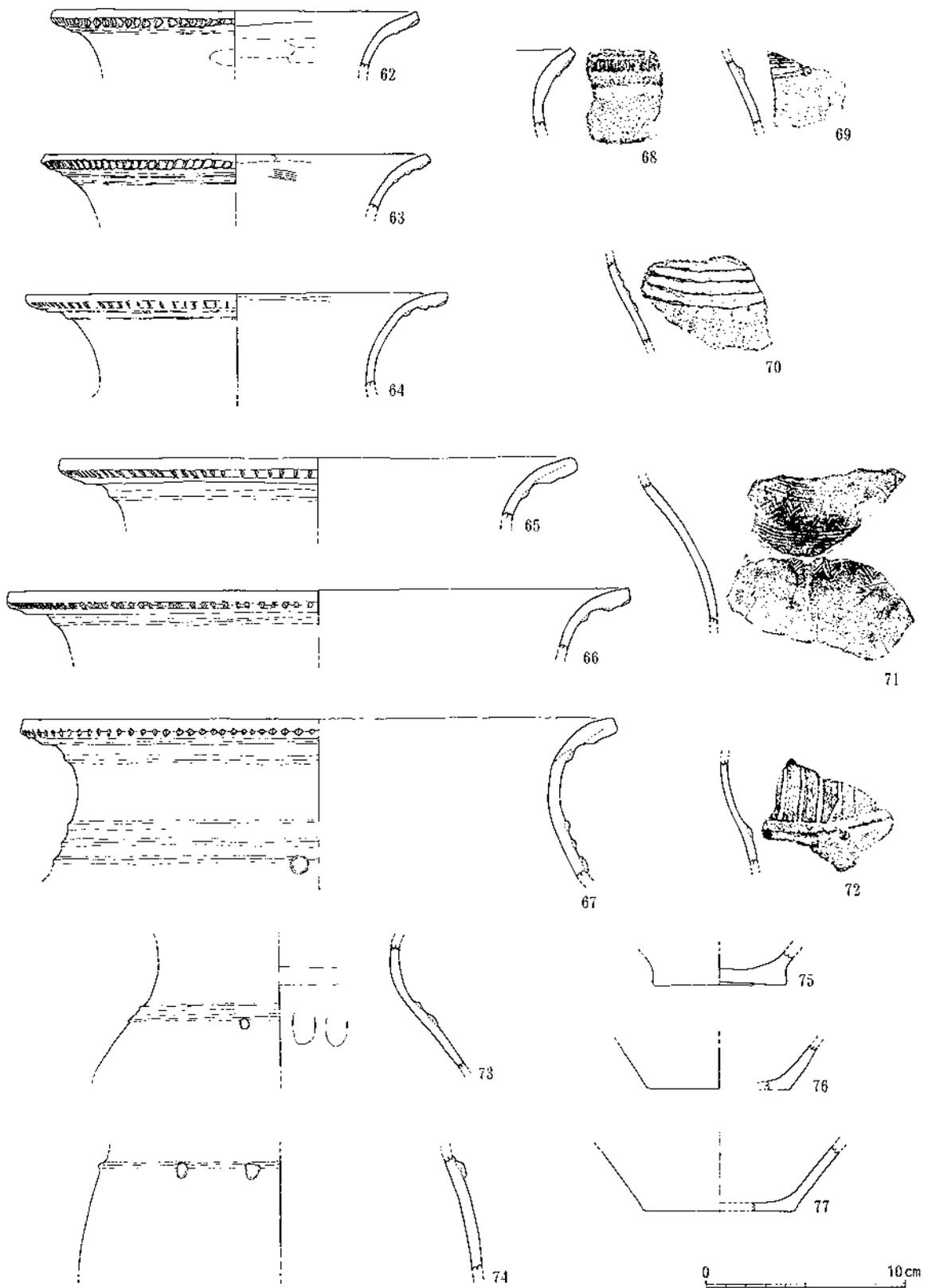


Fig.28 弥生土器実測図 2

横ナデ調整が施される。64は、大きく開く口縁部に、幅9mmの粘土帯が貼付され肥厚させる。口縁端部は丸くおさめ、粘土帯外面に刻目が施される。粘土帯下に微隆起帯を2条貼付する。口縁部内外面横ナデ調整が施される。65は、大きく開く口縁部に、幅2.4cmの粘土帯が貼付され肥厚する。口縁端部は面をなし、粘土帯上端部に刻目と下端部は横ナデが施される。粘土帯下に微隆起帯を1条貼付する。口縁部内外面横ナデ調整が施される。66は、大きく開く口縁部に、幅1.5cmの粘土帯が貼付され肥厚する。断面貼付の痕跡は明瞭ではない。口縁端部は面をなし、端面の下部で粘土帯上端部に刻目と下端部は微隆起帯1条が施される。粘土帯下に微隆起帯を1条貼付する。口縁部内外面横ナデ調整が施される。67は、頸部から大きく外反し口縁部に至る。口縁部は、幅1.8cmの粘土帯を貼付し、口縁端部下端に刻目が施される。粘土帯の下位には、2条の微隆起帯が施される。胴上部外面にも、3条の微隆起帯が施され、下位の微隆起帯に円形浮文が貼付される。内面はナデ調整がなされる。73は、胴上部から頸部にかけての破片である。胴上部に2条の微隆起帯が貼付される。頸部外面はナデ調整が施される。内面には一部指頭圧痕が確認できる。74は、胴部片で、上胴部に微隆起帯を貼付し、その上に円形のやや厚い貼付文が施される。内外面、横や斜め方向にナデ調整が施される。

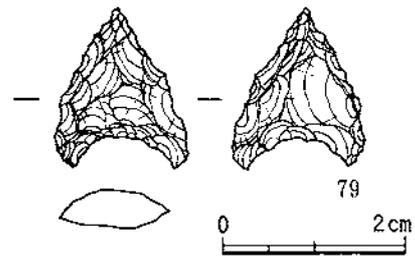


Fig.30 石鏃実測図

68から72は、甕の口縁部から胴部破片である。68は、大きく開く口縁部に、幅1.5cmの粘土帯が貼付され肥厚する。断面貼付の痕跡は明瞭ではない。口縁端部は面をなし、粘土帯外面に刻目が施される。その下方には微隆起帯1条が施される。全体的に摩耗が著しい。69は、胴部片で、上胴部に微隆起帯を貼付し、その上に円形貼付文が施される。内外面、横や斜め方向にナデ調整。70は、胴上部から頸部にかけての破片である。胴上部で頸部の境に4条の微隆起帯が貼付され、その下方の微隆起帯に円形浮文が貼付される。内面にはナデ調整が施される。71は、細頸甕の胴部破片と考えられ、外面には櫛描直線文と波状文を連続して施される。72は、胴上部から頸部にかけての破片である。胴上部で頸部の境に1条の微隆起帯が貼付され、その下位に円形浮文が貼付される。頸部外面には、縦方向の篋描きが施される。内面にはナデ調整が施される。

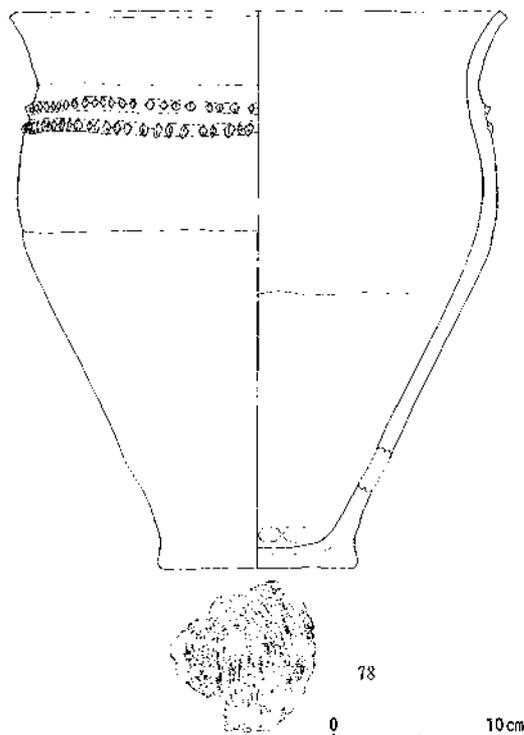


Fig.29 弥生土器実測図 3

75から77は、底部の破片である。75は、やや上げ底の底部で、器壁がやや厚い。76は、平坦な底部で、器壁が薄い。77は、平坦な底部で、器壁が薄い。全体的に摩耗が著しい。

75から77は、底部の破片である。75は、やや上げ底の底部で、器壁がやや厚い。76は、平坦な底部で、器壁が薄い。77は、平坦な底部で、器壁が薄い。全体的に摩耗が著しい。

78は、Ⅸ層出土の弥生前期と考えられる甕である。平らな底部から、外上方に立上がり上脗部で膨らみを持ち頸部はくびれ外弯して口縁部に至る。口縁端部は面取られる。頸部下方に突帯を2条を巡らし甕状原体で大きめの刻目が施される。口縁部内外面はナデ調整で、横位の擦痕が残り内面が特に顕著。外面は脗部下半から口縁部にかけて、内面は脗部下半から底部にかけて煤が厚く付着している。79は門基式の石鏝でチャート製である。長さ1.75cm、下端部幅1.45cmで、重量は0.8gを測る。(松田)

2. 弥生時代後期終末から古墳時代の土器

出土遺物は調査区の南西部に集中する傾向がある。Ⅲ層からⅤ層で出土した遺物で弥生時代後期終末から古墳時代のものであり、時期幅をもつ。煩雑さを避けるため、甕・壺と高杯・鉢など小型のものにわけて平面分布図を示した。I-28区では手捏ね土器が集中して出土した。

80は弥生土器の鉢である。底部から内弯しながら外上方へのび、口縁端部には横ナデを施し平坦面を成す。底部はやや突出気味である。また、底部外面には葉脈痕が残る。外面底部付近には叩き目が残存するがその他は丁寧にハケ調整を施し、叩き目を消す。内面はやや粗いハケ調整である。84は弥生土器の鉢である。不安定な丸底から体部は外上方へのび、口縁部付近で大きく外反する。指頭による成形・ナデ調整を基調とする。85は土師器の椀である。口縁端部を横ナデにより内傾する平坦面を形成する。胎土は直径1cm以下の小角礫を多量に含む。内外面の摩耗が激しく調整は不明である。86は土師器の椀である。口縁端部をナデにより内傾する平坦面を形成する。底部外面には打ち欠いたような痕跡が残る。87は土師器の椀である。外面の上半部は横ハケを施し、下半部はナデ調整を施す。89は土師器の椀である。他の椀に比較して器高が低い。内面口縁部付近にはおこげが付着する。90は土師器の椀である。全体が歪む。口縁端部はナデにより内傾する平坦面を形成し、外反させる。体部内面やや上部におこげが幅約1cmの環状に付着する。91・93は外面に煤が付着する。

94は土師器の高杯である。杯部は椀状を呈し、口縁端部は外反する。脚部は中実であり、裾部は大きくひろがる。95は土師器の高杯である。杯部は椀状を呈する。脚部は中実であり、裾部は緩やかにひろがる。96は土師器の高杯である。脚端部は裾部付近で大きくひろがり、脚部内面にはヘラ削りを施す。97は土師器の高杯である。杯部は底部から口縁部は外上方に直線的にのびる。脚部内面には甕削りを施す。全体に器壁は厚く、比較的深くしっかりとした印象を与える。杯部外面、脚端部に煤が付着する。98は土師器の高杯である。法量は他の高杯に比較してやや小さい。杯底部と口縁部の接合痕跡が比較的明瞭に残る。脚裾部はほぼ水平にのびる。脚部内面には甕削りを施す。100は土師器の高杯である。杯部は平らな杯底部から急角度で直線的に立ち上がる。脚部は「ハ」の字状にひろがる。全体に器壁が厚い。口縁部内外面および脚端部内外面のそれぞれ一部に煤が付着する。101は土師器の高杯である。口縁部は内弯気味に立ち上がり、口縁端部は横ナデにより大きく外反させる。全体に歪む。106の外面は被熱変色する。107の外面には煤が付着する。108は被熱している可能性がある。112は高杯である。脚部に円孔を穿つ。

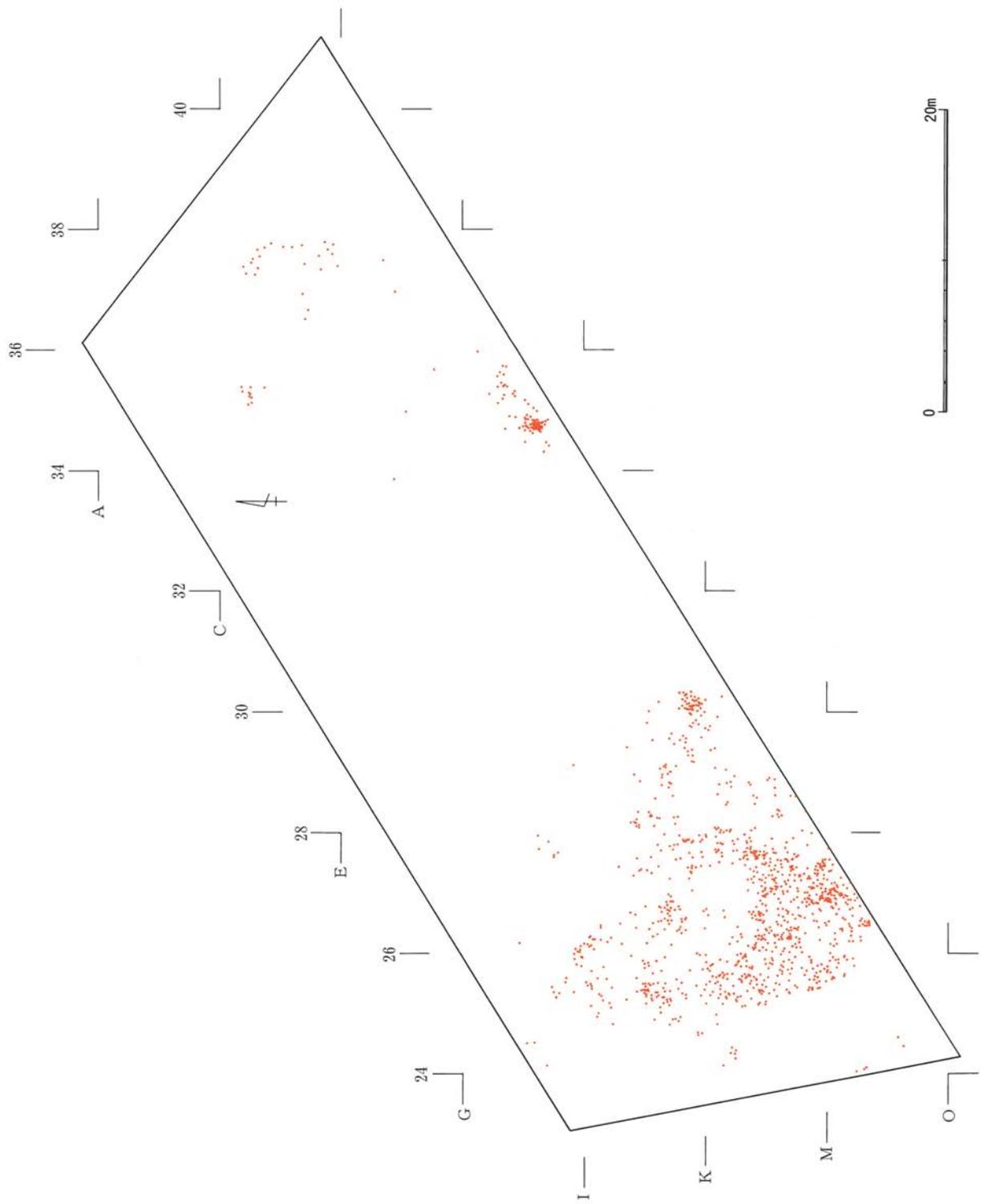
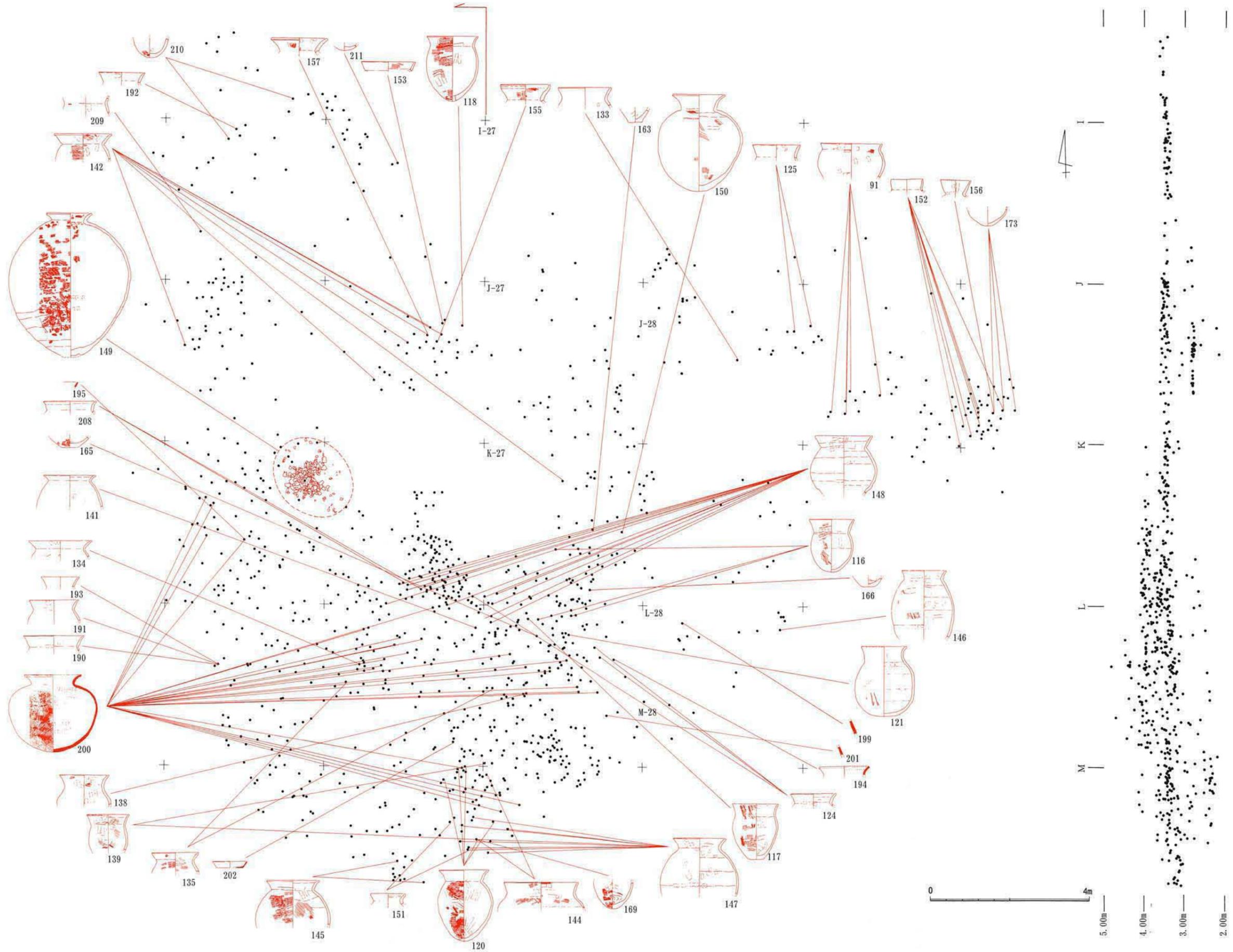


Fig.31 古墳時代遺物分布図



27ラインから西側の垂直分布図

Fig.32 古墳時代出土遺物分布接合図及び垂直分布図1

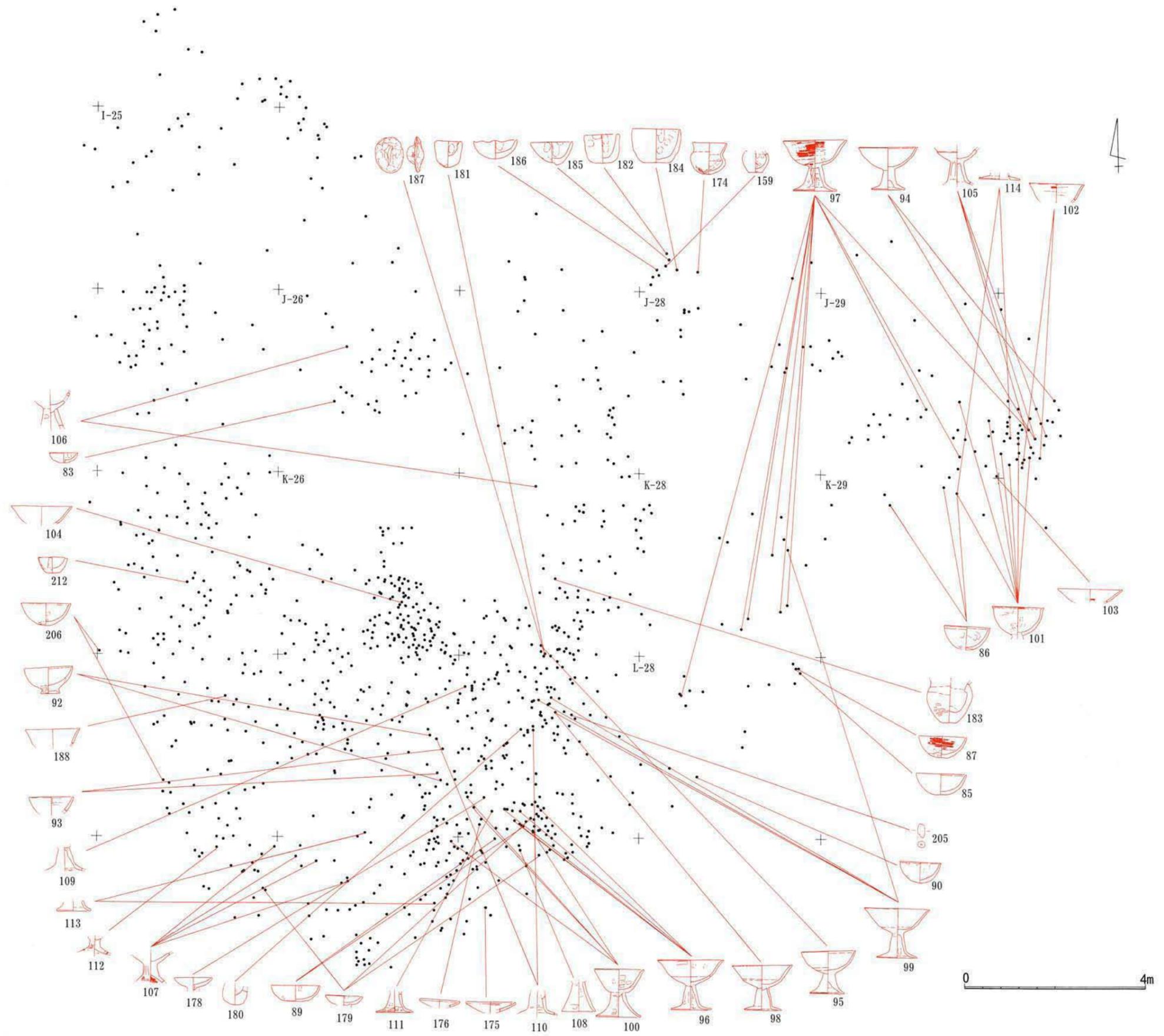


Fig.33 古墳時代出土遺物分布接合図 2

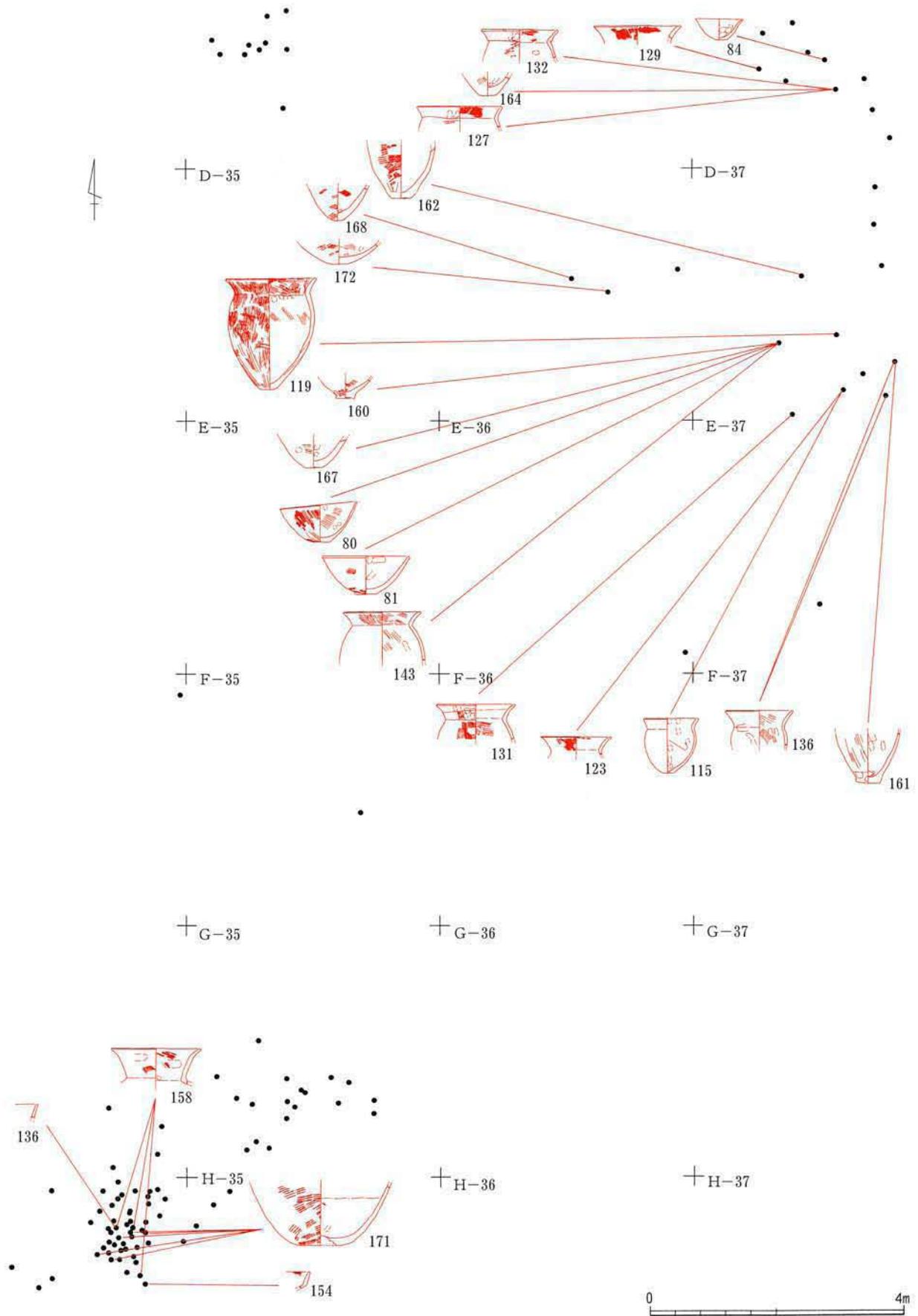


Fig.34 古墳時代出土遺物分布接合図3

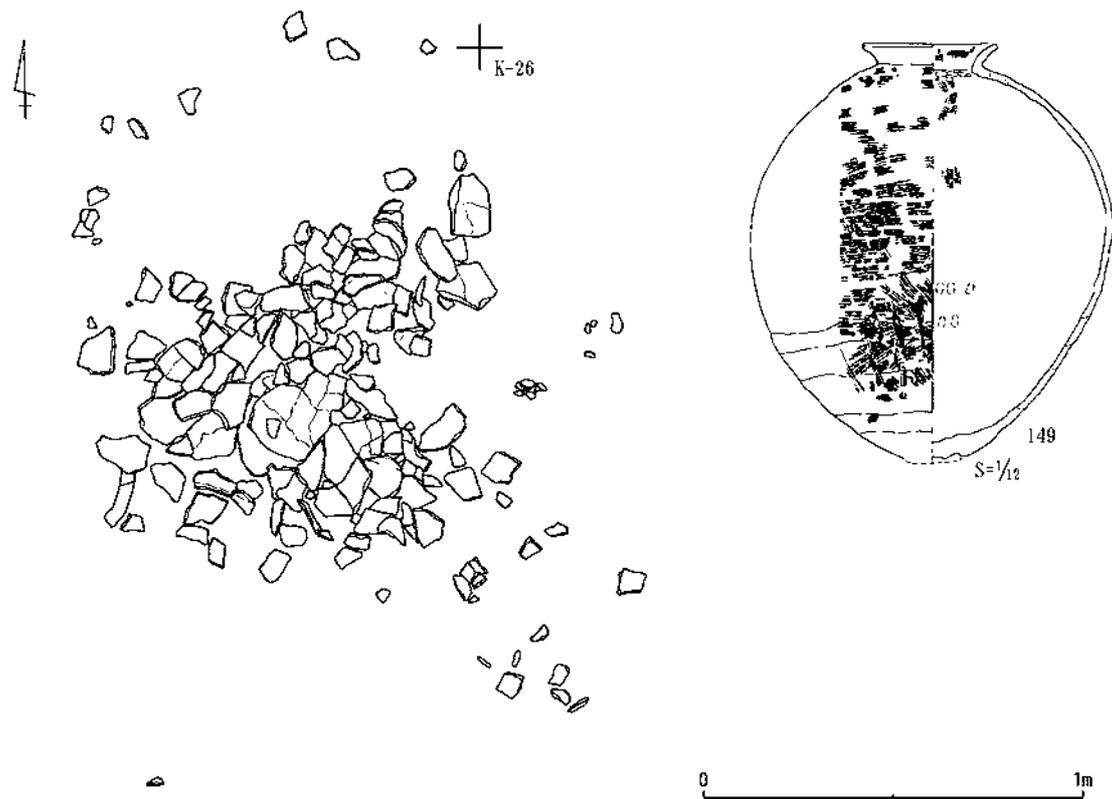


Fig.35 大壺集中出土状況図

115は小型の土師器甕である。口縁部が最大径である。116は土師器の甕である。球形を指向する体部からやや長めの口縁部がつく。体部外面には細かいハケ調整を施す。外面肩部から口縁部には叩き目状のものがうっすらと確認できる。体部外面下半から口縁部まで煤が激しく付着する。また、底部内面にはおこげが見られる。117は弥生土器の甕である。しっかりとした平底から外上方へのび、頸部で緩やかに屈曲し外反する。外面は底面から底部付近は被熱赤変し、胴部下半から口縁部まで煤が激しく付着する。内面底部にはごく僅かであるがおこげが付着する。118は弥生土器の甕である。口縁部は体部から直立気味に立ち上がり、端部は外反させる。底部付近には水平方向の叩き目が、体部には右上がりの叩き目が、頸部から口縁部には水平方向の叩き目が残る。外面体部上半には煤が付着する。叩き目の方向が変化する付近にはナデにより叩き目は消される。内面には口縁部と頸部の境は比較的明瞭な稜が巡る。内面底部付近にはおこげが付着する。119は弥生土器の甕である。体部は叩き成形後、縦ハケ調整を施す。口径と胴部最大径がほぼ等しい。出土遺物のなかではやや古い要素を有している。120は弥生土器の甕である。外面底部付近には右上がりの方向、下半には水平方向の、肩部には右下がりの叩き目が残る。外面は激しく煤ける部分があり、底部内面にはおこげが付着する。121は土師器の甕である。球形を指向した体部に直立気味に口縁部がつく。体部外面最大部付近に帯状に煤が、底部内面付近にはおこげが付着する。123・126・127・129・131・132・134・137～141の外面には煤が付着する。142は弥生土器の甕である。口縁部は「く」の字状に外反する。肩部外面には整然とした右上がりの叩き目が残る。外面には煤が付着する。口縁部内面には斜め方向のハケ調整が施される。145は弥生土器の甕である。球形をした体部から「く」の字状に外反した口縁部がつく。体部外面には右上がりの叩き目が残る。体部内面にはハケ調整を

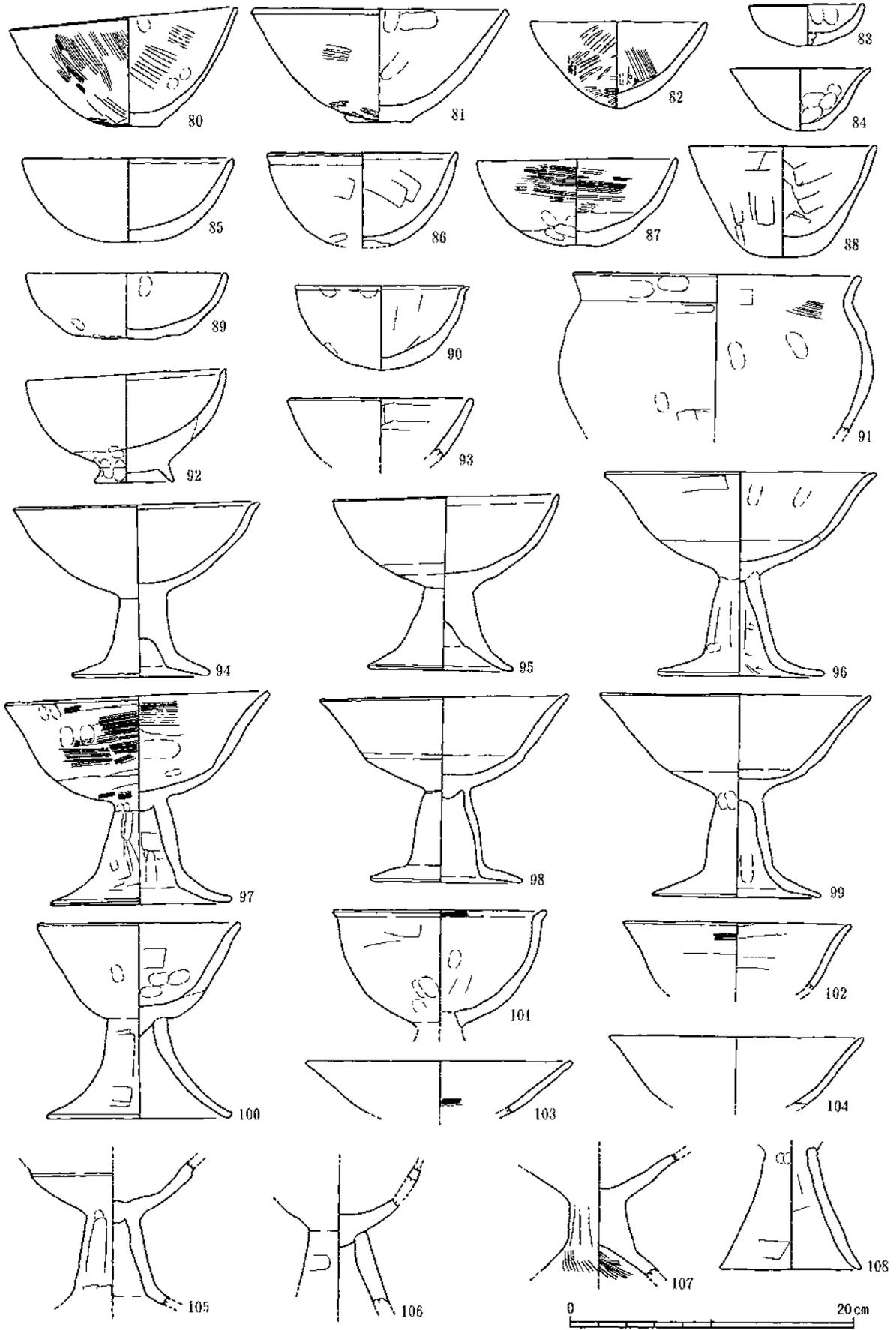


Fig.36 古墳時代遺物実測図1

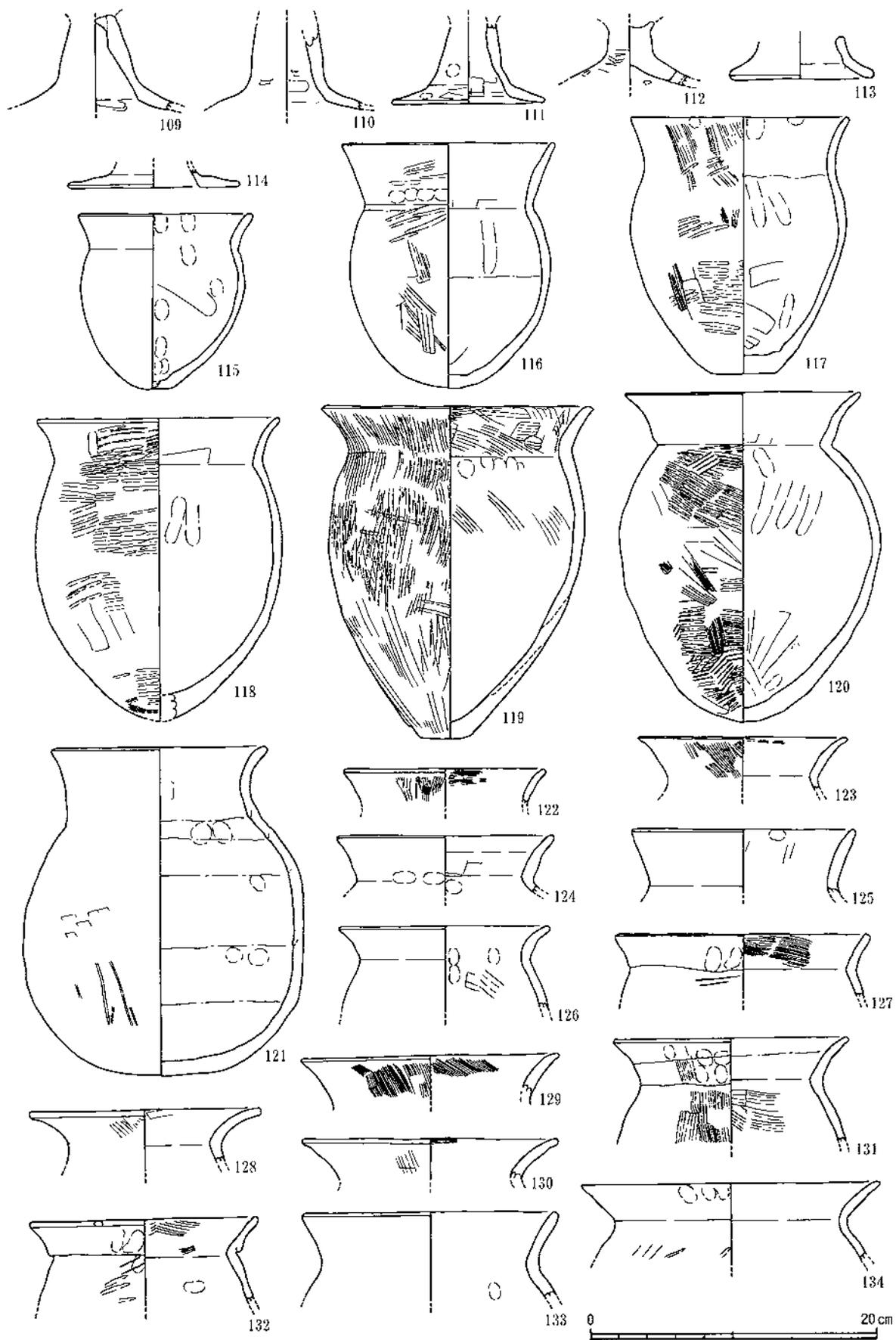


Fig.37 古墳時代遺物実測図 2

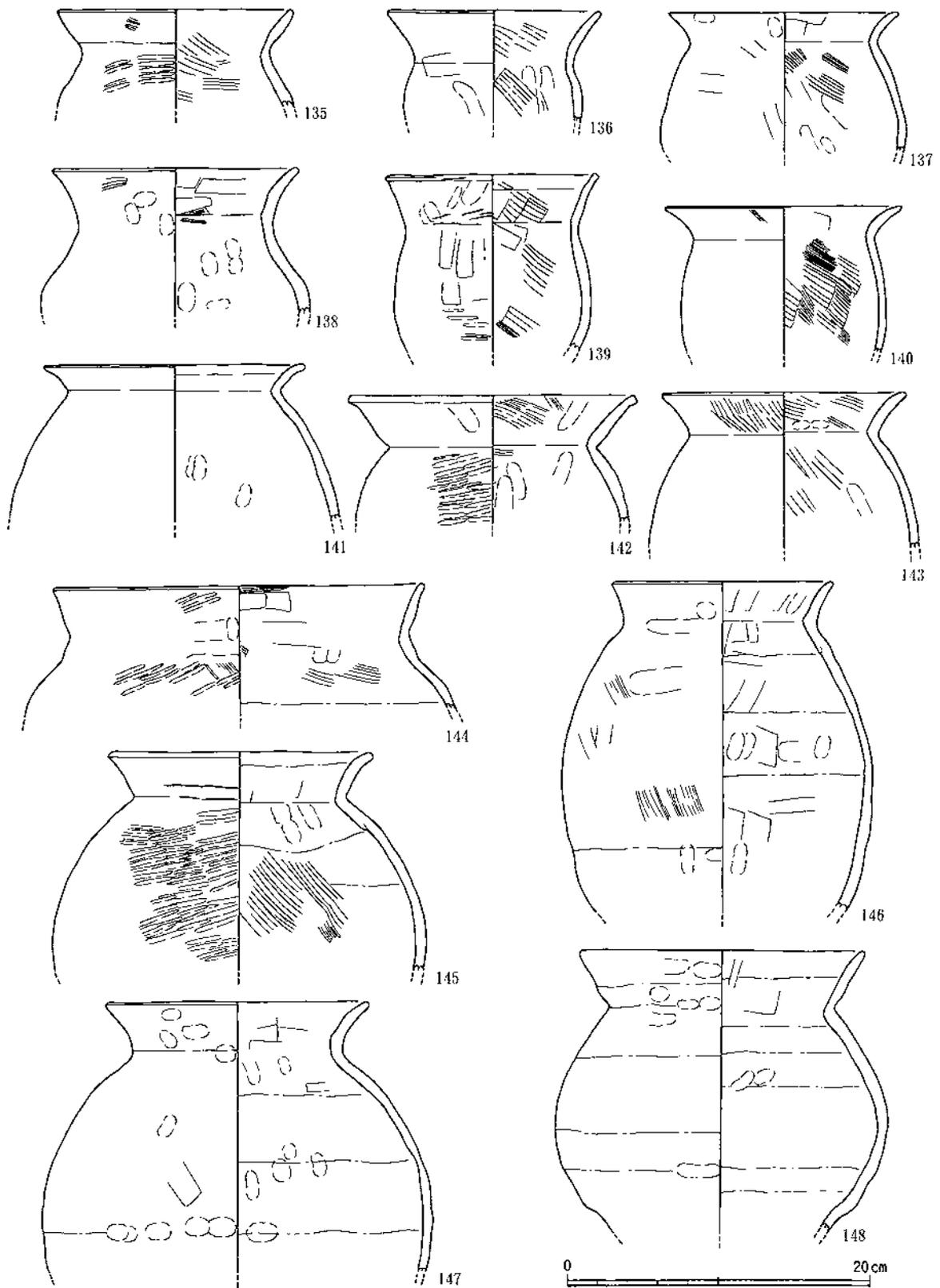


Fig.38 古墳時代遺物実測図3



Fig.39 古墳時代遺物実測図 4

施す。頸部内面には口縁部の接合痕跡が明瞭に残る。体部最大径付近に煤が帯状に付着し、口縁部の一部にも煤が付着する。146は土師器の甕である。長胴形の胴部に短く外反する口縁部がつく。内外面には粘土帯接合痕跡が残る。外面には煤がうっすらと付着する。147は土師器の甕である。体部はやや長胴である。口縁部は体部から緩やかに外反し、端部は丸くおさめる。体部外面には煤

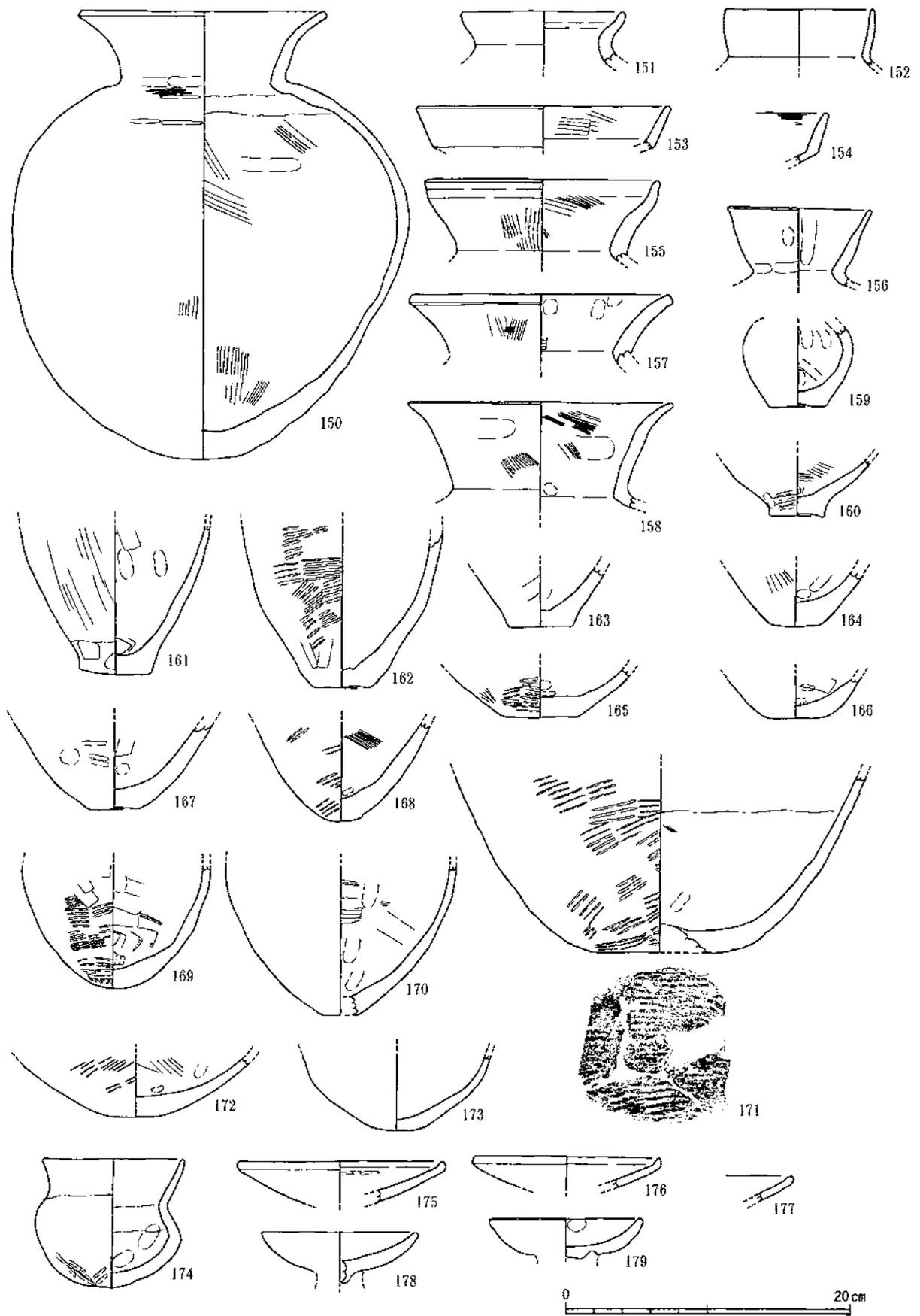


Fig.40 古墳時代遺物実測図 5

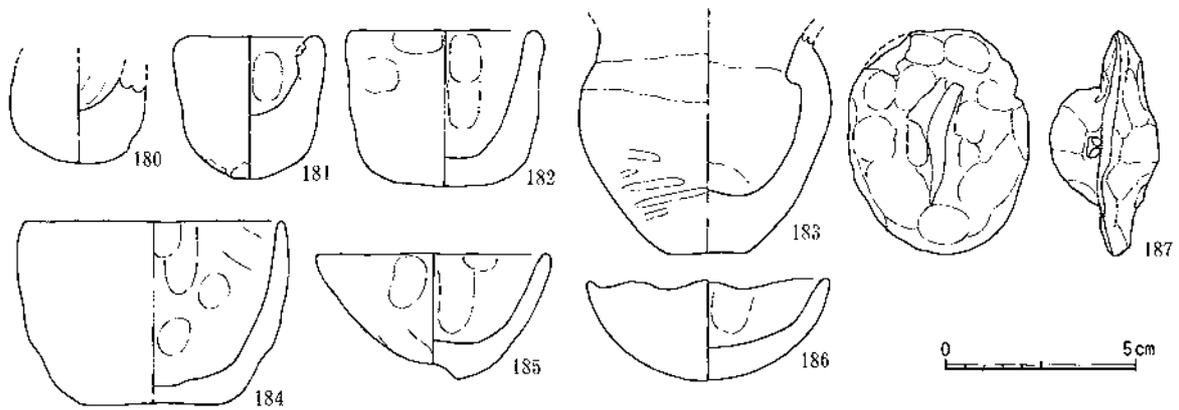


Fig.41 古墳時代遺物実測図6

が付着する。148は土師器の甕である。体部は扁平な球形を呈する。体部下半には底部接合時の接合痕跡が巡る。内外面に粘土帯接合痕跡が巡る。

149は弥生土器の大壺である。一ヶ所で潰れるように出土した。頸部が窄まり、口縁部が短く外反する。体部外面は叩き調整の後、下半には築らであるがハケ調整を施す。150は土師器の壺である。体部は最大径がやや上部にある扁球形を呈する。口縁部は体部から短く外反する。調整は器面の摩耗がはげしく不明瞭ではあるが、体部外面および内面の一部にはハケ目の一部が見られる。外面体部最大径よりやや下方は煤が帯状に付着する。151は外面にうっすらと煤が付着する。160は底部である。小さく突出した底部から大きくひろく。内面にはハケ調整を施す。浅黄橙色からにぶい黄橙色に発色する。161は底部である。安定した平底から内弯気味に直線的に立ち上がる。体部外面の一部にはタテ方向の粗いハケ状の痕跡が認められる。162は弥生土器の甕の底部である。体部外面にはやや細めの叩き目が残存する。外面には底部付近を除き煤が付着する。また、内面にはおこげが付着する。163は外面に煤が付着し内面にはおこげが付着する。164は外面が被熱変色し煤が付着する。167の内面にはおこげが付着する。169は弥生土器の甕の底部である。丸底である。外面には底部付近を除き煤が付着する。叩き目は162同様やや細い。170は土師器の甕の底部である。一円玉程の平底の底部から外上方へひろく。外面は煤が付着しており、底部付近の一部は被熱赤変する。外面はナデ調整、内面はハケ・ナデ調整である。

174は小型丸底壺である。体部は肩部が張る扁球形である。底部外面に黒斑がある。

178は小型器台である。一部に被熱赤変部がみられる。179は小型器台である。一部に被熱赤変部がみられ煤が付着している。

180～182, 184～186は手捏ね土器である。182は平底の底部から直線的に立ち上がる。比較的丁寧な作りである。184は平底の底部をもち体部は内弯気味に立ち上がる。比較的丁寧な作りである。185は底部は尖底で安定性に欠く。186は浅い鉢状を呈する。

187は土製模造鏡である。平面形は楕円形を呈する。鏡面の中央部は周辺部の指押えにより突出する。背面中央部に双孔を穿った紐部を付す。

200は須恵器の壺である。体部外面には平行叩きが施される。その後、カキ目調整が施される。カキ目調整は肩部では体部よりも密に施される。口縁端部には断面三角形の突帯が巡る。

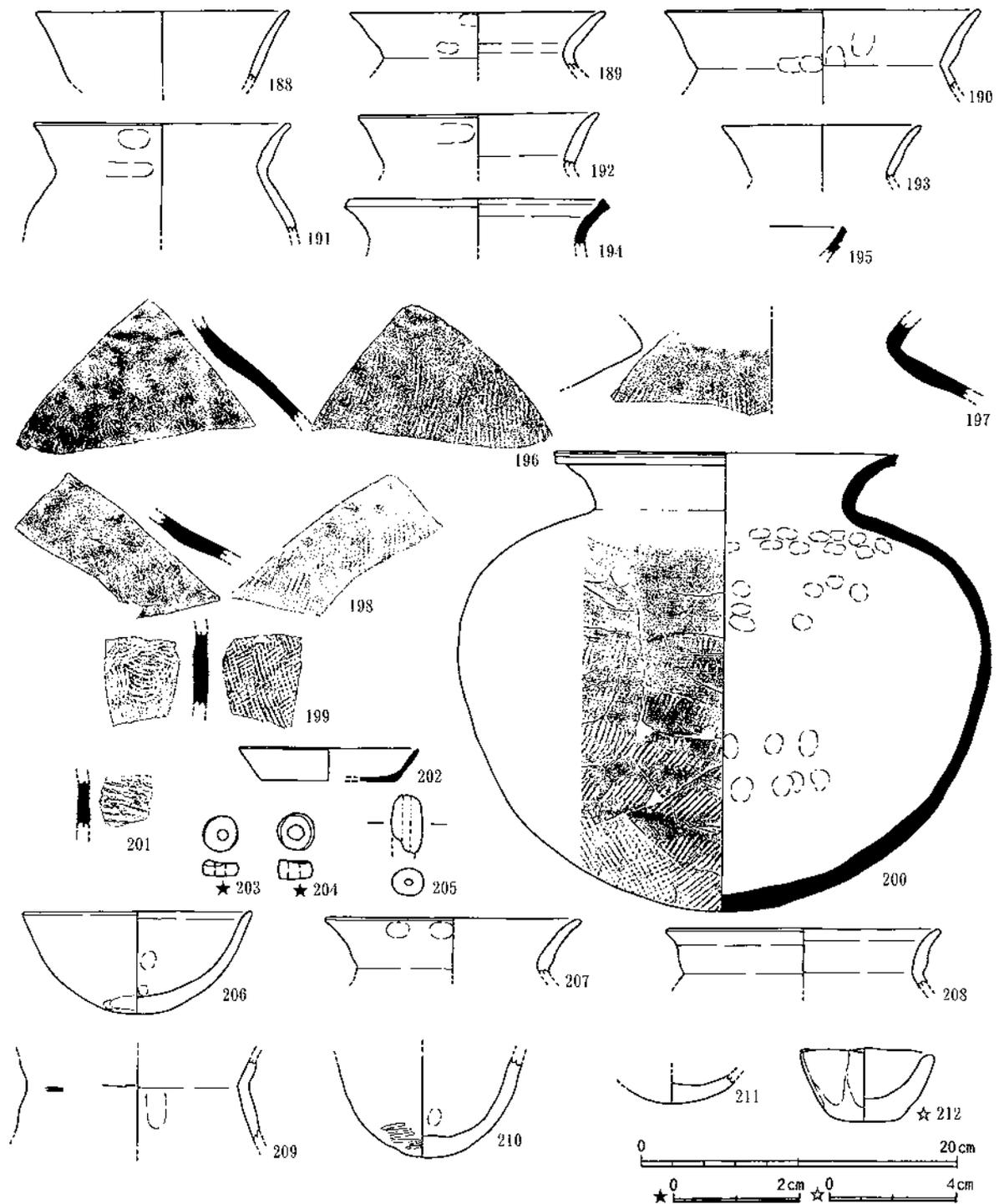


Fig.42 古墳時代遺物実測図7

202は須恵器の杯である。明らかに混入したものである。

206は土師器の鉢である。体部は半球状を呈し、口縁端部は弱く内傾する。

212は手捏ね土器である。指頭でつまみながら体部から口縁部を成形する。体部外面および口縁部内面に黒斑を有する。完形品である。(久家)

通図 番号	出土層位	種 類	器 種	法 量 (cm)				色 調			胎 土	遺物取上げ 番号
				口径	器高	胴径	底径	外 面	内 面	断 面		
1	SR1	土師器	鉢	15.8	7.4	—	—	淡橙色 5YR8/4	にぶい橙色 5YR7/4	にぶい橙色 5YR7/4	5mm大の小礫 を含む。	1294
2	SR1	土師器	鉢	10.8	5.3	—	—	黄灰色 2.5Y6/1	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	珪長岩を含む。 1~2mm大の 砂粒を含む。	1401
3	SR1	土師器	鉢	9.4	4.7	—	—	にぶい橙色 5YR7/4	黄灰色 2.5Y6/1	黄灰色 2.5Y5/1	珪長岩を含む 1mm大の砂粒 を含む。	1287
4	SR1	手捏土器	鉢	7.2	2.7	—	—	灰褐色 7.5YR5/2	灰褐色 7.5YR5/2	灰褐色 7.5YR5/2	珪長岩含む5mm 大の小礫を含む。	1335・1299
5	SR1	土師器	高杯	23.8	(5.9)	—	—	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	1mm大の砂粒 を多く含む。	1224・676・ 740
6	SR1	土師器	高杯	—	(5.5)	—	11.5	にぶい黄褐色 10YR7/2	浅黄褐色 10YR8/3	にぶい黄褐色 10YR7/2	1~2mm大砂粒 を多く含む。	1221
7	SR1	土師器	甕	—	—	—	—	黒色 7.5YR2/1	浅黄褐色 7.5YR8/4	黄灰色 2.5Y6/1	12mm大の砂粒 を多く含む。	1314
8	SR1	土師器	壺	10	(4.8)	—	—	にぶい黄褐色 10YR7/2	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい黄褐色 10YR7/2	5mm大の小礫 を含む。	1299・1332
9	SR1	土師器	壺	11.3	(5.7)	—	—	灰黄褐色 10YR6/2	にぶい黄褐色 10YR7/2	にぶい黄褐色 10YR7/2	1~2mm大の砂 粒を多く含む。	1291
10	SR1	土師器	甕	17.3	25.3	20.0	—	にぶい橙色 7.5YR7/3	褐灰色 7.5YR6/1	にぶい褐色 7.5YR5/4	5mm大の小礫、 1~2mm大の 砂粒を含む。	1293・1332・ 1321・1320・ 1334・1292・ 1326・1330
11	SR2	弥生土器	壺	—	(10.9)	—	—	黄灰色 2.5Y5/1	黄灰色 2.5Y6/1	黄灰色 2.5Y6/1	1mm大の砂粒 を多く含む。	1089・1391
12	SR2	弥生土器	壺	15.0	(3.3)	—	—	明褐色 7.5YR7/6	橙色	褐灰色 10YR5/1	1mm大の砂粒 を多く含む。	1274
13	SR2	弥生土器	壺	15.4	(2.9)	—	—	にぶい褐色 7.5YR5/3	灰褐色 7.5YR4/2	灰褐色 7.5YR4/2	1mm大の砂粒 を多く含む。	1536
14	SR2	弥生土器	壺	—	—	—	—	明褐色 7.5YR7/1	明褐色 7.5YR7/1	灰色 N4/0	1mm大の砂粒 を多く含む。	1554
15	SR2	弥生土器	壺	16.2	(3.6)	—	—	にぶい橙色 7.5YR7/4	黒色 N2/0	黒色 N2/0	1mm大の砂粒 を多く含む。	1369・1396
16	SR2	弥生土器	甕	19.0	(1.5)	—	—	黒褐色 2.5Y3/1	灰白色 10YR8/2	黒褐色 2.5Y3/1	1mm大の砂粒 を多く含む。	1540
17	SR2	弥生土器	甕	19.3	(3.3)	—	—	黒褐色 7.5YR2/4	黒褐色 7.5YR2/4	黒褐色 7.5YR2/4	1mm大の砂粒 を多く含む。	1101・1459・ 1461・1359
18	SR2	弥生土器	壺	16.9	(3.5)	—	—	黒褐色 2.5Y3/1	黒褐色 2.5Y3/1	黒褐色 2.5Y3/1	1mm大の砂粒 を多く含む。	1342・1527
19	SR2	弥生土器	甕	23.0	(3.0)	—	—	にぶい橙色 5YR6/3	灰褐色 5YR6/2	褐灰色 10YR4/1	1mm大の砂粒 を多く含む。	1517
20	SR2	弥生土器	甕	22.0	(14.1)	19.6	—	灰褐色 7.5YR4/2	にぶい褐色 7.5YR6/3	褐灰色 10YR4/1	1mm大の砂粒 を多く含む。	1447・1133・ 1397・1396
21	SR2	弥生土器	甕	—	—	(21.9)	—	灰黄褐色 10YR4/2	灰黄褐色 10YR4/2	褐灰色 10YR4/1	1mm大の砂粒 を多く含む。	1470・1091・ 1359
22	SR2	弥生土器	甕	—	(6.1)	—	—	灰白色 10YR7/1	褐灰色 10YR5/1	褐灰色 10YR5/1	1mm大の砂粒 を多く含む。	1504
23	SR2	弥生土器	甕	—	(8.2)	—	—	明褐色 5YR7/2	にぶい褐色 5YR7/4	褐灰色 10YR5/1	1mm大の砂粒 を多く含む。	1274・1452・ 1460・1567
24	SR2	弥生土器	甕	—	(3.9)	—	—	明褐色 7.5YR7/1	にぶい褐色 5YR7/3	明褐色 7.5YR7/1	1mm大の砂粒 を多く含む。	1110・1465
25	SR2	弥生土器	甕	—	—	—	—	にぶい褐色 5YR6/4	褐灰色 7.5YR6/1	灰色 N4/0	1mm大の砂粒 を多く含む。	1507
26	SR2	弥生土器	甕	—	—	—	—	にぶい赤褐色 5YR4/4	灰褐色 7.5YR5/2	褐灰色 7.5YR5/1	1mm大の砂粒 を多く含む。	1152・1535
27	SR2	弥生土器	甕	—	—	—	—	にぶい黄褐色 10YR7/2	浅黄褐色 10YR8/3	灰色 N4/0	1mm大の砂粒 を多く含む。	1527
28	SR2	弥生土器	甕	—	—	—	—	灰白色 10YR7/1	にぶい褐色 10YR7/3	灰色 N4/0	珪長岩片を含む。 1mm大の砂粒を 多く含む。	1360・1518

Tab.3 遺構出土遺物観察表 1

() は復元・残存値

挿図 番号	出土層位	種 類	器 種	法量 (cm)				色 調			胎 土	遺物取上げ 番号
				口径	器高	胴径	底径	外 面	内 面	断 面		
29	S R 2	弥生土器		—	(3.6)	—	—	灰黄褐色 10YR6/2	灰黄褐色 10YR6/2	灰黄褐色 10YR6/2	1mm大の砂粒 を多く含む。	1445
30	S R 2	弥生土器		—	(2.0)	—	7.6	褐灰色 7.5YR5/1	灰褐色 7.5YR4/2	灰褐色 7.5YR4/2	赤色頁岩を含む。 1mm大の砂粒を 多く含む。	1549
31	S R 2	弥生土器		—	(2.6)	—	6.1	灰白色 10YR7/1	黒色 10YR2/1	褐灰色 7.5YR5/1	1mm大の砂粒 を多く含む。	1477
32	S R 2	弥生土器	壺	—	(2.5)	—	6.1	黄灰色 2.5Y6/1	黄灰色 2.5Y6/1	黄灰色 2.5Y6/1	球長岩片を含み 1mm大の砂粒を 多く含む。	1513・1517
33	S R 2	弥生土器	壺	—	(3.7)	—	6.9	褐灰色 7.5YR4/1	褐灰色 7.5YR4/1	褐灰色 7.5YR4/1	1mm大の砂粒 を多く含む。	1438・1474・ 1521・1555
34	S R 2	弥生土器	甕	11.8	(3.8)	—	—	灰白色 10YR8/1	灰白色 10YR8/1	灰白色 10YR8/1	5mm大の小礫 を含む。	1491
35	S R 2	弥生土器	甕	11.6	(7.0)	—	—	灰白色 10YR8/1	灰白色 10YR8/1	灰白色 10YR8/1	5mm大の小礫 を含む。	1490
36	S R 2	弥生土器	壺	—	(11.8)	—	9.0	赤褐色 10YR8/4	浅黄褐色 10YR8/4	浅黄褐色 10YR8/4	5mm大の小礫 を含む。	1266・1459・ 1465
37	S R 2	縄文土器	深鉢	(24.2)	(4.9)	—	—	暗赤褐色 5YR3/2	黒褐色 5YR2/1	黒褐色 5YR2/1	雲母片を多く 含む。	1395

Tab.4 遺構出土遺物観察表 2

() は復元・残存値

挿図 番号	出土層位	種 類	器 種	法量 (cm)				色 調			胎 土	遺物取上げ 番号
				口径	器高	胴径	底径	外 面	内 面	断 面		
48	V 層	弥生土器	壺	6.3	(13.2)	—	—	灰黄褐色 10YR6/2	褐灰色 10YR4/1	褐灰色 10YR4/1	1mmの砂粒を 多く含む。	1228
49	VI 層	弥生土器	壺	9.4	(8.4)	—	—	褐灰色 10YR6/1	黄灰色 2.5Y6/1	灰色 N4/0	0.1mm以下の 砂粒や長石粒 を含む。	1371
50	V 層	弥生土器	壺	6.2	(6.2)	—	—	にぶい黄褐色 10YR7/2	にぶい黄褐色 10YR7/2	暗灰色 N3/0	0.1mm以下の 砂粒や長石・ 石英粒を含む。	1422
51	VI 層	弥生土器	壺	(5.6)	(3.6)	—	—	黒褐色 10YR3/1	黒褐色 10YR3/1	黒褐色 10YR3/1	1~2mm砂粒・ 石英・長石粒 を多く含む。	1370
52	V 層	弥生土器	壺	—	(3.7)	—	—	にぶい橙色 7.5YR7/4	黄灰色 2.5Y5/1	にぶい橙色 7.5YR7/4	1~2mm砂粒・ 長石粒を多く 含む。	1084
53	VI 層	弥生土器	壺	(10.8)	(3.2)	—	—	にぶい黄褐色 10YR7/2	浅黄褐色 7.5YR8/3	灰色 N4/0	1~2mmの石 英粒や細礫を 含む。	1087
54	VI・VI 層	弥生土器	壺	(14.0)	(5.0)	—	—	にぶい橙色 5YR6/4	にぶい橙色 7.5YR6/4	にぶい橙色 7.5YR6/4	0.2~0.5mmの 砂粒や石英・ 長石粒・雲母 が見られる。	1229・1443
55	V 層	弥生土器	壺	(16.6)	(6.1)	—	—	にぶい黄褐色 10YR7/2	灰黄褐色 10YR6/2	にぶい黄褐色 10YR7/2	1mmの砂粒や 石英・長石粒 を含む。	
56	VI 層	弥生土器	壺	(16.0)	(4.9)	—	—	にぶい褐色 7.5YR6/3	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/3	1~2mmの長 石・石英粒や 細礫を含む。	1402
57	VI 層	弥生土器	壺	(25.0)	(3.0)	—	—	灰褐色 7.5YR6/2	灰褐色 7.5YR6/2	灰褐色 7.5YR6/2	1~2mmの砂 粒や長石・石 英粒を含む。	1068・1067
58	V 層	弥生土器	壺	(16.2)	(1.2)	—	—	褐色 5YR7/6	にぶい黄褐色 10YR7/3	褐色 5YR7/6	1mmの砂粒を 含む。	1097
59	VI 層	弥生土器	壺	(24.6)	(5.3)	—	—	にぶい黄褐色 5YR7/4	にぶい黄褐色 5YR7/4	にぶい黄褐色 5YR7/4	1mmの砂粒や 石英・長石粒 を含む。	1363
60	V 層	弥生土器	壺	(25.0)	(3.0)	—	—	にぶい褐色 7.5YR5/4	褐灰色 7.5YR5/1	褐灰色 7.5YR5/1	1~2mmの長 石粒や細礫を 多く含む。	1455・1424

Tab.5 遺構外出土遺物観察表 1

() は復元・残存値

挿図 番号	出土層位	種類	器種	法量 (cm)				色調			胎土	遺物取上げ 番号
				口径	器高	胴径	底径	外面	内面	断面		
61	V層	弥生土器	甕	(28.0)	(2.9)	—	—	にぶい赤褐色 2.5YR5/3	にぶい橙色 2.5YR6/4	にぶい橙色 2.5YR6/4	1~2mmの石英 粒や細礫を含む。	1374
62	VI層	弥生土器	甕	(18.0)	(2.9)	—	—	褐灰色 10YR5/1	黒褐色 10YR3/2	黒褐色 10YR3/2	1~2mmの石英 粒や細礫を含む。	1424
63	VI層	弥生土器	甕	(19.0)	(2.9)	—	—	淡赤橙色 2.5YR7/3	明赤灰色 2.5YR7/1	灰色 N4/0	1~2mmの石英 粒や細礫を含む。	1422・1158
64	V層	弥生土器	壺	(21.0)	(4.8)	—	—	明赤灰色 2.5YR7/2	淡赤橙色 2.5YR7/4	明赤灰色 2.5YR7/2	1~2mmの砂粒 を多く含み、石 英・長石・赤色 風化礫を含む。	1368・1364・ 1459・1156
65	V層	弥生土器	甕	(25.6)	(3.2)	—	—	褐灰色 10YR6/1	にぶい黄褐色 10YR7/2	にぶい黄褐色 10YR7/2	1~3mmの長石・ 石英粒、細礫を 多く含む。	1099・1002・ 1066
66	VI層	弥生土器	甕	(31.0)	(3.2)	—	—	にぶい橙色 5YR7/4	褐灰色 5YR6/1	褐灰色 5YR6/1	1~2mmの長 石・石英粒や 細礫を含む。	1171
67	VI・V層	弥生土器	甕	(29.4)	(8.1)	—	—	黄灰色 2.5Y6/1	黄灰色 2.5Y6/1	灰色 N5/0	0.5~1mmの 砂粒や長石・ 石英粒を含む。	1092・1432
68	VI層	弥生土器	甕	—	(3.3)	—	—	灰黄褐色 10YR6/2	明褐灰色 7.5YR7/1	灰白色 2.5Y7/1	1~2mmの石英 粒や細礫を含む。	1146
69	VI層	弥生土器	壺	—	(3.6)	—	—	褐灰色 7.5YR6/1	黒色 7.5YR2/1	黒色 7.5YR2/1	1~2mm砂粒を 多く含む。	1094
70	V層	弥生土器	甕	—	(4.6)	—	—	にぶい黄色 10YR7/3	にぶい黄色 10YR7/2	灰色 N4/0	1mmの砂粒や 細礫を含む。	1148
71	VI層	弥生土器	壺	—	(7.8)	—	—	灰黄褐色 10YR5/2	褐灰色 10YR4/1	褐灰色 10YR4/1	1~2mm砂粒・ 長石粒を多く 含む。	1071・1069
72	VI層	弥生土器	甕	—	(5.5)	—	—	灰色 2.5YR8/2	黄灰色 2.5Y5/1	灰色 N4/C	1~2mmの石英 粒や細礫を含む。	1258
73	VI層	弥生土器	壺	—	(6.5)	—	—	明褐灰色 7.5YR7/1	にぶい橙色 5YR7/4	灰色 N4/0	1~2mmの石英 粒や細礫を含む。	1369
74	VI層	弥生土器	壺	—	(5.8)	(20.2)	—	灰黄褐色 10YR6/2	橙色 7.5YR7/6	灰黄褐色 10YR6/2	1~2mmの長 石粒や砂粒を 多く含む。	1420
75	VI層	弥生土器	底部	—	(1.8)	—	6.7	橙色 5YR6/6	橙色 5YR7/6	橙色 5YR7/6	1~2mmの長 石・石英粒や 砂粒を含む。	1232
76	V層	弥生土器	底部	—	(2.3)	—	(7.0)	にぶい橙色 7.5YR6/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	1mm程度の長 石・石英粒や細 礫を多く含む。	1163
77	VI層	弥生土器	底部	—	(3.4)	—	(7.6)	褐灰色 7.5YR5/1	灰褐色 7.5YR4/2	灰褐色 7.5YR4/2	1~3mmの長石・ 石英粒や細礫を 多く含む。	1422
78	IX層	弥生土器	甕	(28.4)	(32.7)	(28.1)	11.8	黒褐色 7.5YR3/3	黒褐色 7.5YR3/3	同左で 底部 のみ内外面 にぶい褐色 7.5YR5/3	1mmの砂粒や 石英・長石・ 雲母粒を含む。	—
80	V層	弥生土器	鉢	15.5	8.3	—	—	浅黄褐色 7.5YR8/3	浅黄褐色 10YR8/3	—	直径8mm以下の 砂粒を多く含む。	1572
81	V層	弥生土器	鉢	17.8	7.9	—	4.6	灰白色 2.5Y8/1	灰白色 2.5Y8/1	灰色 N6/0	直径8mm以下の 砂粒を多く含む。	1572
82	V層	弥生土器	鉢	(12.3)	6.1	—	—	にぶい黄褐色 10YR7/2	黄灰色 2.5Y6/1	灰色 N4/0	直径4mm以下の 砂粒を多く含む。	548
83	V層 (焼上跡)	土師器	鉢	(8.0)	2.0	—	—	橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	直径4mm以下の 砂粒を多く含む。	916
84	V層	土師器	鉢	(9.9)	4.3	—	—	灰白色 5Y8/2	灰白色 5Y8/2	灰色 5Y5/1	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	1591
85	V層	弥生土器	鉢	(14.8)	5.9	—	—	にぶい赤褐色 5YR5/4	にぶい赤褐色 5YR4/4	にぶい赤褐色 5YR5/4	直径10mm以下 の砂粒を多量 に含む。	726
86	V層	土師器	碗	(13.4)	(6.4)	—	—	にぶい橙色 5YR7/3	淡褐色 5YR8/4	—	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	571・561・ 572

Tab.6 遺構外出土遺物観察表2

() は復元・残存値

挿図 番号	出土層位	種 類	器 種	法量 (cm)				色 調			胎 土	遺物取上げ 番号
				口径	器高	胴径	底径	外 面	内 面	新 面		
87	V層	弥生土器	鉢	14.0	6.2	—	—	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	灰白色 N7/0	直径9mm以下の 砂粒を多量に 含む。	550
88	V層	土師器	碗	(13.0)	7.9	—	5.0	褐灰色 5YR6/1	にぶい橙色 5YR7/4	—	直径3mm以下の 砂粒を多く含む。	891・892・ 1308
89	V層	弥生土器	鉢	(14.0)	4.7	—	7.6	黄灰色 2.5Y5/1	黄灰色 2.5Y4/1	灰色 N6/0	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	764・771
90	V層	土師器	碗	12.2	5.9	—	—	にぶい黄褐色 10YR7/4	にぶい黄褐色 10YR7/3	灰色 N5/0	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	877
91	V層	土師器	甕	(19.8)	—	(22.1)	—	浅黄褐色 7.5YR8/4	淡褐色 5YR8/4	灰白色 5Y7/1	直径7mm以下の 砂粒を多く 含む。	554・797・ 553・556・ 555
92	V層	土師器	脚付き碗	13.9	8.0	—	5.6	にぶい橙色 7.5YR7/4	明褐灰色 7.5YR7/2	灰白色 10Y7/1	直径7mm以下の 砂粒を多く含む。	335・365
93	V層	弥生土器	鉢	(12.4)	—	—	—	褐灰色 7.5YR5/1	黒色 7.5YR2/1	灰色 5Y6/1	直径3mm以下の 砂粒を多く含む。	334・337
94	V層	土師器	高杯	(17.0)	12.1	—	9.3	にぶい橙色 7.5YR7/3	にぶい橙色 5YR7/3	黄灰色 2.5Y6/1	直径6mm以下の 砂粒を多く含む。	611・604
95	V層	土師器	高杯	15.9	12.5	—	10.4	浅黄褐色 7.5YR8/4	浅黄褐色 7.5YR8/3	浅黄褐色 7.5YR8/3	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	722
96	V層	土師器	高杯	(19.0)	19.4	—	11.5	明褐灰色 7.5YR7/2	にぶい黄褐色 10YR7/2	灰色 N5/0	直径10mm以下の 砂粒を多く含む。	969・765・ 770・763・ 762
97	V層	土師器	高杯	18.4	14.9	—	12.6	橙色 5YR7/6	淡褐色 5YR8/4	黄灰色 2.5Y6/1	直径6mm以下の 砂粒を多く 含む。	576・609・ 790・549・ 364・911・ 699・698・ 909・792
98	V層	土師器	高杯	17.3	13.3	—	10.9	橙色 5YR7/6	橙色 5YR7/6	灰色 7.5Y5/1	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	903
99	V層	土師器	高杯	19.0	14.3	—	12.0	橙色 7.5YR7/6	にぶい橙色 7.5YR7/4	橙色 7.5YR7/6	直径6mm以下の 砂粒を多く含む。	185・784・ 785・903
100	V層	土師器	高杯	(14.0)	13.8	—	12.8	淡褐色 5YR8/3	明褐灰色 7.5YR7/2	灰黄褐色 10YR6/2	直径10mm以下の 砂粒を多く含む。	345・358・ 347・919
101	V層	土師器	高杯	(14.8)	—	—	—	橙色 5YR7/6	褐色 5YR7/6	灰色 N6/0	直径3mm以下の 砂粒を多く 含む。	601・592・ 590・567・ 802・800・ 572・579・ 580
102	V層	土師器	高杯	(16.0)	—	—	—	にぶい橙色 5YR7/3	淡褐色 5YR8/4	暗灰色 N3/0	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	594・614
103	V層	土師器	高杯	(18.5)	—	—	—	橙色 2.5YR6/6	にぶい橙色 7.5YR7/4	灰色 N4/0	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	579
104	V層	土師器	高杯	(17.9)	—	—	—	にぶい橙色 7.5YR7/4	浅黄褐色 7.5YR8/4	灰色 10Y5/1	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	443
105	V層	土師器	高杯	—	—	—	—	褐色 5YR7/6	褐色 5YR7/6	黄灰色 2.5Y6/1	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	601・604
106	V層	土師器	高杯	—	—	—	—	淡赤褐色 2.5Y7/3	淡赤褐色 2.5Y7/3	灰色 10Y5/1	直径7mm以下の 砂粒を多く含む。	284・684
107	V層	土師器	高杯	—	—	—	—	褐色 5YR7/6	褐色 5YR7/6	褐色 5YR7/6	直径4mm以下の 砂粒を多く含む。	381・752・ 320・321
108	V層	土師器	高杯	—	—	(10.0)	—	明褐灰色 7.5YR7/2	灰白色 7.5YR8/2	灰色 5Y6/1	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	766
109	V層	土師器	高杯	—	—	—	—	にぶい黄褐色 10YR7/2	にぶい黄褐色 10YR7/2	褐灰色 7.5YR6/1	直径4mm以下の 砂粒を多く含む。	652
110	V層	土師器	高杯	—	—	—	—	灰黄褐色 10YR4/2	にぶい褐色 5YR6/4	灰色 7.5Y6/1	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	717・336・ 688
111	V層	土師器	高杯	—	—	(10.8)	—	にぶい橙色 5YR7/3	にぶい褐色 7.5YR6/3	黄灰色 2.5Y6/1	直径7mm以下の 砂粒を多く含む。	695
112	V層	土師器	高杯	—	—	—	—	褐色 2.5YR7/6	にぶい褐色 5YR6/3	にぶい褐色 7.5YR7/4	直径2mm以下の 砂粒を多く含む。	389

Tab.7 遺構外出土遺物観察表3

() は復元・残存物

揮文 番号	出土層位	種類	器種	法量 (cm)				色調			胎土	遺物取上げ 番号
				口径	器高	胴径	底径	外面	内面	断面		
113	V層	土師器	高杯	—	—	—	(9.5)	淡棕色 5YR8/4	明褐色 5YR7/2	黄灰色 2.5Y6/1	直径5cm以下の 砂粒を多く含む。	365・327
114	V層	土師器	高杯	—	—	—	(11.5)	淡棕色 5YR8/3	淡棕色 5YR8/3	淡棕色 5YR8/3	直径5cm以下の 砂粒を多く含む。	572・803
115	V層	土師器	甕	(12.0)	12.2	11.5	3.2	明褐色 7.5YR7/2	明褐色 7.5YR7/2	灰色 10Y5/1	直径4cm以下の 砂粒を多く含む。	1577・1573
116	V層	弥生土器	甕	15.0	17.1	14.1	—	橙色 5YR7/6	橙色 5YR7/6	灰黄色 2.5Y6/2	直径6cm以下の 砂粒を多く含む。	998・965・ 1060
117	V層	弥生土器	甕	(15.2)	18.9	15.2	—	にぶい橙色 7.5YR7/3	にぶい橙色 7.5YR7/3	黄灰色 2.5Y4/1	直径7mm以下の 砂粒を多く含む。	997
118	V層 (焼土跡)	土師器	甕	(16.8)	21.0	17.2	—	にぶい橙色 5YR7/4	にぶい橙色 5YR7/4	黄灰色 2.5Y6/1	直径5cm以下の 砂粒を多く含む。	937
119	V層	弥生土器	甕	18.3	23.5	17.8	3.1	褐色 7.5YR7/6	にぶい橙色 7.5YR7/3	灰黄色 2.5Y7/2	直径10mm以下の 砂粒を多く含む。	1579
120	V層	土師器	甕	(16.4)	23.0	18.3	—	にぶい橙色 5YR7/4	にぶい黄褐色 10YR7/3	灰黄色 2.5Y7/2	直径5cm以下の 砂粒を多く含む。	977・972・ 980・973・ 741
121	V層	土師器	甕	14.7	23.0	19.5	—	にぶい黄褐色 10YR7/3	灰黄色 2.5Y7/2	にぶい黄褐色 10YR7/3	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	783
122	V層	土師器	甕	(14.0)	—	—	—	にぶい橙色 5YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/2	にぶい黄褐色 10YR7/2	直径1cm以下の 砂粒を多く含む。	
123	V層	土師器	甕	(14.6)	—	—	—	にぶい橙色 7.5YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/2	にぶい褐色 7.5YR7/3	直径3cm以下の 砂粒を多く含む。	1573
124	V層	土師器	甕	(15.0)	—	—	—	浅黄褐色 7.5YR8/3	黄灰色 2.5Y6/1	灰色 5Y6/1	直径8mm以下の 砂粒を多く含む。	428・1026・ 1025
125	V層	土師器	甕	(15.4)	—	—	—	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい黄褐色 10YR7/2	黄灰色 2.5Y6/1	直径3mm以下の 砂粒を多く含む。	843・837
126	V層	土師器	甕	(14.6)	—	—	—	浅黄褐色 7.5YR8/3	浅黄褐色 7.5YR8/3	浅黄褐色 7.5YR8/3	直径3mm以下の 砂粒を多く含む。	
127	V層	土師器	甕	(17.0)	—	—	—	浅黄褐色 7.5YR8/4	浅黄褐色 7.5YR8/4	浅黄褐色 7.5YR8/4	直径5cm以下の 砂粒を多く含む。	1590
128	V層	土師器	甕	(16.2)	—	—	—	灰白色 5Y8/1	灰白色 5Y8/1	灰白色 5Y8/1	直径3cm以下の 砂粒を多く含む。	1572
129	V層	土師器	甕	(17.8)	—	—	—	褐色 7.5YR6/1	にぶい褐色 7.5YR7/3	灰白色 5Y7/1	直径3cm以下の 砂粒を多く含む。	1576
130	V層	土師器	甕	(17.9)	—	—	—	灰白色 5Y8/1	灰白色 5Y8/1	灰白色 5Y8/1	直径4mm以下の 砂粒を多く含む。	1581
131	V層	土師器	甕	(16.3)	—	—	—	にぶい褐色 7.5YR6/3	灰黄褐色 10YR5/2	灰白色 5Y7/1	直径4mm以下の 砂粒を多く含む。 雲母片を少量含む。	1581
132	V層	土師器	甕	(15.8)	—	—	—	にぶい褐色 7.5YR7/4	浅黄褐色 7.5YR8/4	浅黄褐色 7.5YR8/4	直径4mm以下の 砂粒を多く含む。	1590
133	V層	土師器	甕	(17.4)	—	—	—	褐色 7.5YR7/6	淡黄色 2.5Y8/3	淡黄色 2.5Y8/3	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	849
134	V層 (焼土跡)	土師器	甕	(20.8)	—	—	—	にぶい褐色 7.5YR6/3	灰褐色 7.5YR5/2	灰白色 5Y4/1	直径3mm以下の 砂粒を多く含む。	626
135	V層	弥生土器	甕	(15.4)	—	—	—	褐色 5YR7/6	褐色 7.5YR7/6	褐色 7.5YR7/6	直径4cm以下の 砂粒を多く含む。	618・1040
136	V層	土師器	甕	(14.0)	—	11.9	—	明褐色 5YR7/2	にぶい褐色 5YR7/4	にぶい褐色 5YR6/3	直径3cm以下の 砂粒を多く含む。	1577・1574
137	V層	土師器	甕	(15.0)	—	16.3	—	にぶい褐色 7.5YR7/4	浅黄褐色 7.5YR8/4	灰黄色 2.5Y7/2	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	
138	V層	土師器	甕	(15.6)	—	17.7	—	灰黄色 2.5Y7/2	黄灰色 2.5Y6/1	浅黄色 2.5Y7/3	直径7mm以下の 砂粒を多く含む。	669
139	V層	弥生土器	甕	(13.6)	—	12.4	—	にぶい褐色 5YR7/4	にぶい褐色 5YR6/4	灰黄色 2.5Y6/2	直径4mm以下の 砂粒を多く含む。	977・1030
140	V層	土師器	甕	(15.6)	—	13.5	—	褐色 7.5YR6/1	浅黄褐色 7.5YR8/4	にぶい黄褐色 10YR7/3	直径6cm以下の 砂粒を多く含む。	

Tab.8 遺構外出土遺物観察表4

()は復元・残存値

図号 番号	出土層位	種類	器種	法量 (cm)				色調			胎土	遺物取上げ 番号
				口径	器高	胴径	底径	外面	内面	断面		
141	V層	土師器	甕	(17.3)	—	—	—	橙色 5YR6/6	にぶい橙色 7.5YR6/4	にぶい橙色 7.5YR6/4	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	651
142	V層 (焼土跡)	土師器	甕	(18.7)	—	—	—	にぶい橙色 5YR6/4	にぶい橙色 7.5YR6/3	にぶい橙色 7.5YR6/3	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	928・1000・ 963・925・ 25・916
143	V層	土師器	甕	(16.0)	—	—	—	灰白色 2.5Y8/2	浅黄褐色 7.5YR8/4	灰白色 2.5Y8/2	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	1572
144	V層	土師器	甕	(24.4)	—	—	—	にぶい褐色 7.5YR6/3	灰褐色 7.5YR6/2	にぶい褐色 7.5YR6/3	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	1036・977
145	V層	弥生土器	甕	17.0	—	24.5	—	橙色 5YR7/6	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	直径8mm以下の 砂粒を多く含む。	756・760
146	V層	土師器	甕	14.4	—	20.6	—	橙色 5YR7/6	にぶい橙色 7.5YR7/4	黄灰色 2.5Y5/1	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	723
147	V層	土師器	甕	17.0	—	25.8	—	橙色 5YR7/6	橙色 5YR7/6	黄灰色 2.5Y6/1	直径6mm以下の 砂粒を多く含む。	738・367・ 749・533・ 366・365・ 363
148	V層	土師器	甕	18.7	—	23.0	—	にぶい橙色 5YR7/4	にぶい橙色 5YR6/4	黄灰色 2.5Y4/1	直径11mm以下の 砂粒を多く含む。	451・430・ 436・449・ 450・654・ 661・656・ 448・439・ 455・659・ 657
149	V層	弥生土器	大壺	20.8	67.8	57.8	(6.0)	浅黄褐色 7.5YR8/4	浅黄褐色 7.5YR8/4	灰黄色 2.5Y6/2	直径7mm以下の 砂粒を多く含む。	513
150	V層	弥生土器	壺	(17.0)	31.6	27.9	—	にぶい褐色 5YR6/3	にぶい褐色 5YR6/3	—	直径6mm以下の 砂粒を多く含む。	724
151	V層	土師器	甕	(11.4)	—	—	—	黄灰色 2.5Y6/1	にぶい褐色 5YR6/4	灰黄色 2.5Y7/2	直径2mm以下の 砂粒を多く含む。	364・367
152	V層	土師器	壺	10.3	—	—	—	浅黄褐色 7.5YR8/3	浅黄褐色 7.5YR8/4	浅黄褐色 7.5YR8/4	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	592・580・ 591・581・ 579・604
153	V層 (焼土跡)	土師器	壺	(17.4)	—	—	—	にぶい褐色 7.5YR7/4	褐灰色 10YR4/1	灰色 5Y4/1	直径2mm以下の 砂粒を多く含む。	933
154	V層	土師器	壺	—	—	—	—	にぶい褐色 7.5YR7/4	にぶい褐色 5YR7/3	灰色 5Y6/1	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	1240
155	V層 (焼土跡)	土師器	壺	(16.2)	—	—	—	にぶい褐色 7.5YR7/4	にぶい褐色 7.5YR7/4	にぶい褐色 7.5YR7/4	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	932
156	V層	土師器	壺	10.1	—	—	—	褐色 5YR7/6	浅黄褐色 7.5YR8/4	浅黄褐色 7.5YR8/4	直径6mm以下の 砂粒を多く含む。	602
157	V層 (焼土跡)	土師器	壺	(18.0)	—	—	—	にぶい褐色 5YR7/4	にぶい褐色 5YR7/4	にぶい褐色 5YR7/4	直径3mm以下の 砂粒を多く含む。	928
158	V層	土師器	壺	(18.4)	—	—	—	にぶい褐色 5YR7/4	淡褐色 5YR8/4	灰色 5Y6/1	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	1203・1192・ 1209
159	V層	土師器	小型壺	—	—	—	4.2	浅黄褐色 10YR8/3	にぶい黄褐色 10YR7/3	灰オリブ色 5Y5/2	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	730
160	V層	弥生土器	底部	—	—	—	3.8	灰白色 10YR8/2	浅黄褐色 10YR8/3	浅黄褐色 10YR8/3	直径3mm以下の 砂粒を多く含む。	1572
161	V層	弥生土器	底部	—	—	—	5.0	にぶい黄褐色 10YR7/2	浅黄褐色 10YR8/3	にぶい黄褐色 10YR7/2	直径3mm以下の 砂粒を多く含む。	1574
162	V層	弥生土器	甕	—	—	—	4.0	にぶい褐色 7.5YR7/3	にぶい褐色 5YR7/4	灰黄褐色 10YR6/2	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	1578
163	V層	弥生土器	底部	—	—	—	(4.4)	灰褐色 7.5YR6/2	灰褐色 7.5YR5/2	灰色 5Y5/1	直径8mm以下の 砂粒を多く含む。	1002
164	V層	弥生土器	底部	—	—	—	(3.6)	にぶい褐色 5YR7/4	浅黄褐色 7.5YR8/3	灰黄色 2.5Y7/2	直径7mm以下の 砂粒を多く含む。	1590
165	V層	弥生土器	底部	—	—	—	5.0	にぶい褐色 5YR7/4	褐色 2.5YR7/6	黄灰色 2.5Y5/1	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	716
166	V層	弥生土器	底部	—	—	—	4.6	にぶい褐色 5YR7/4	にぶい褐色 5YR7/4	にぶい褐色 5YR7/4	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	887

Tab.9 遺構外出土遺物観察表5

() は復元・残存値

挿図 番号	出土層位	種類	器種	法量 (cm)				色調			胎土	遺物取上げ 番号
				口径	器高	胴径	底径	外面	内面	極面		
167	V層	弥生土器	底部	4.1	—	—	3.4	灰白色 2.5Y7/1	灰白色 5Y7/1	灰白色 2.5Y7/1	直径4mm以下の 砂粒を多く含む。	1572
168	V層	弥生土器	底部	4.8	—	—	3.0	橙色 5YR6/6	にぶい褐色 7.5YR5/3	にぶい黄褐色 10YR5/3	直径3mm以下の 砂粒を多く含む。	1575
169	V層	弥生土器	底部	2.7	—	—	—	にぶい褐色 7.5YR6/3	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/2	直径3mm以下の 砂粒を多く含む。 含み、雲母片を 少量含む。	977
170	V層	弥生土器	底部	—	—	—	(2.6)	灰黄褐色 10YR6/2	灰白色 10YR8/2	灰白色 10YR8/2	直径2mm以下の 砂粒を多く含む。	—
171	V層	弥生土器	底部	—	—	—	(11.0)	橙色 5YR7/6	にぶい褐色 5YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/2	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	1255・1132・ 1239・1204・ 1045・1214・ 1186・1191
172	V層	弥生土器	底部	—	—	—	5.0	灰白色 2.5Y8/1	褐灰色 10YR4/1	灰白色 2.5Y8/1	直径3mm以下の 砂粒を多く含む。	1583
173	V層	弥生土器	底部	—	—	—	4.4	灰黄褐色 10YR6/2	にぶい黄褐色 10YR7/2	灰色 5Y5/1	直径4mm以下の 砂粒を多く含む。	602・604・ 605
174	V層		小型丸底壺	—	9.1	10.3	—	灰白色 5Y7/1	灰白色 5Y8/1	浅黄色 2.5Y7/4	直径10mm以下の 砂粒を多く含む。	732
175	V層		小型器台	(14.2)	—	—	—	にぶい褐色 7.5YR7/4	にぶい褐色 7.5YR7/4	にぶい褐色 7.5YR7/4	直径2mm以下の 砂粒を多く含む。	738
176	V層		小型器台	13.2	—	—	—	にぶい褐色 7.5YR7/4	にぶい褐色 7.5YR7/4	にぶい褐色 7.5YR7/4	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	348
177	V層		小型器台	2.1	—	—	—	にぶい褐色 7.5YR6/3	にぶい褐色 7.5YR6/4	にぶい褐色 7.5YR6/4	直径3mm以下の 砂粒を多く含む。	—
178	V層		小型器台	10.9	—	—	—	淡赤褐色 2.5YR7/3	淡赤褐色 2.5YR7/3	灰色 5Y6/1	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	671
179	V層		小型器台	10.5	—	—	—	明褐色 7.5YR7/2	にぶい褐色 5YR7/4	灰色 5Y6/1	直径6mm以下の 砂粒を多く含む。	372・985・ 897
180	V層	手捏土器		—	—	—	—	灰色 5Y6/1	灰色 N6/0	灰白色 5Y7/1	直径11mm以下の 砂粒を多く含む。	667
181	V層	手捏土器		3.8	—	—	—	灰白色 10Y8/1	灰白色 10Y7/1	灰色 5Y6/1	直径2mm以下の 砂粒を多く含む。	725
182	V層	手捏土器		(4.8)	4.1	—	(3.8)	明褐色 5YR7/2	にぶい褐色 5YR7/4	灰黄色 2.5Y6/2	直径6mm以下の 砂粒を多く含む。	832
183	V層		小型壺	—	—	6.6	2.1	にぶい褐色 7.5YR7/4	褐灰色 10YR4/1	黄灰色 2.5Y6/3	直径4mm以下の 砂粒を多く含む。	965
184	V層	手捏土器		(6.8)	4.8	—	4.0	灰黄色 2.5Y7/2	にぶい黄褐色 10YR7/2	—	直径2mm以下の 砂粒を多く含む。	731
185	V層	手捏土器		(6.2)	3.3	—	—	灰白色 2.5Y8/2	灰白色 2.5Y8/2	—	直径3mm以下の 砂粒を多く含む。	832
186	V層	手捏土器		(6.4)	2.7	—	—	灰白色 10YR8/2	灰白色 10YR8/2	灰白色 10YR8/2	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	729
187	V層	土製模造鏡		全長 4.7	全幅 5.9	全厚 2.8	—	灰白色 10YR8/1	灰白色 2.5Y8/1	灰白色 2.5Y7/1	直径4mm以下の 砂粒を多く含む。	725
188	Ⅱ層	土師器	高杯	(16.0)	—	—	—	褐色 7.5YR7/6	褐色 7.5YR7/6	褐色 7.5YR7/6	直径6mm以下の 砂粒を多く含む。	243
189	Ⅱ層	土師器	壺	(16.2)	—	—	—	灰黄色 2.5YR7/2	褐色 7.5YR7/6	灰黄色 2.5YR7/2	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	110
190	Ⅱ層	土師器	甕	(19.8)	—	—	—	にぶい褐色 5YR7/4	褐色 5YR6/6	黄灰色 2.5Y6/1	直径6mm以下の 砂粒を多く含む。	159
191	Ⅱ層	土師器	甕	(16.0)	—	—	—	にぶい褐色 5YR7/4	にぶい褐色 5YR7/4	にぶい褐色 5YR7/4	直径6mm以下の 砂粒を多く含む。	159
192	Ⅱ層	土師器	甕	(15.0)	—	—	—	褐色 5YR7/6	褐色 5YR7/6	褐色 5YR6/6	直径7mm以下の 砂粒を多く含む。	150
193	Ⅱ層	土師器	壺	(12.8)	—	—	—	にぶい褐色 5YR6/4	にぶい褐色 5YR6/4	褐色 5YR6/6	直径7mm以下の 砂粒を多く含む。	159
194	Ⅱ層	須恵器	壺	(16.0)	—	—	—	灰色 5Y4/1	灰白色 N7/0	褐灰色 7.5YR5/1	ほとんど砂粒を 含まない精選さ れた胎土である。	193

Tab.10 遺構外出土遺物観察表6

() は復元・残存値

挿図 番号	出土層位	種 類	器 種	法 量 (cm)				色 調			胎 土	遺物取上げ 番号
				口径	器高	胴径	底径	外 面	内 面	断 面		
195	Ⅲ層	須志器		—	—	—	—	暗灰色 N3/0	灰色 N5/0	褐灰色 5YR4/1	直径3mm以下の 砂粒を含む。	263
196	Ⅰ層	須志器	体部	—	—	—	—	青灰色 5PB5/1	青灰色 5PB5/1	褐灰色 5YR5/1	直径2mm以下の 砂粒を含む。	1
197	Ⅰ層	須志器	体部	—	—	—	—	浅黄色 2.5Y7/4	青灰色 5PB6/1	褐灰色 5YR5/1	直径2mm以下の 砂粒を含む。	3
198	Ⅰ層	須志器	体部	—	—	—	—	灰白色 7.5Y8/1	青灰色 5PB5/1	褐灰色 5YR5/1	直径2mm以下の 砂粒を含む。	2
199	Ⅱ層	須志器	体部	—	—	—	—	灰色 N8/0	灰色 N8/0	灰褐色 7.5YR5/2	ほとんど砂粒を 含まない精選さ れた胎土である。	190
200	S X I Ⅲ・Ⅳ Ⅴ層	須志器	壺	21.4	29.1	33.5	—	黄灰色 2.5Y6/1	黄灰色 2.5Y6/1	灰白色 2.5Y7/1	直径2mm以下の 砂粒を含む。	263・267・ 270・362・ 417・418・ 420・421・ 424・1028・ 1029・904・ 740・767・ 341・666・ 166・362・ 718・1225
201	Ⅲ層	須志器	体部	—	—	—	—	オリーブ黒色 10YR3/1	灰白色 N7/0	褐灰色 10YR5/1	直径1cm以下の 砂粒を多く含む。	238
202	Ⅲ層	須志器	杯	(11.3)	2.1	—	8.4	灰白色 2.5Y8/1	灰白色 2.5Y8/1	灰白色 2.5Y8/1	直径2cm以下の 砂粒を多く含む。	224
203	Ⅴ層		白玉	全長 6.0mm	全厚 2.5mm	—	—	—	—	—	—	—
204			白玉	全長 5.5mm	全厚 3.0mm	—	—	—	—	—	—	—
205	Ⅲ層		土鏝	—	最大幅 1.9cm	—	—	浅黄褐色 7.5YR8/4	橙色 7.5YR6/6	橙色 7.5YR6/6	ほとんど砂粒 は含まない。	194
206	Ⅴ層	弥生土器	鉢	(14.3)	6.5	—	—	浅黄褐色 7.5YR8/6	浅黄褐色 7.5YR8/4	浅黄色 2.5YR7/4	直径6mm以下の 砂粒を多く含む。	161
207		土師器	甕	(16.0)	—	—	—	にぶい黄褐色 10YR7/3	橙色 7.5YR7/6	灰色 5Y5/1	直径4mm以下の 砂粒を多く含む。	—
208	Ⅴ層	土師器	甕	(17.2)	—	—	—	にぶい黄褐色 10YR7/3	浅黄褐色 10YR8/4	灰オリーブ色 5Y6/2	直径4mm以下の 砂粒を多く含む。	448・440
209	Ⅴ層	土師器	甕	—	—	—	—	にぶい橙色 5YR7/4	灰黄褐色 10YR6/2	灰色 5Y5/1	直径5mm以下の 砂粒を多く含む。	57
210	Ⅳ層	弥生土器	甕	—	—	—	—	橙色 2.5Y7/6	橙色 2.5Y7/8	浅黄色 2.5YR7/3	直径5mm以下の 砂粒を多く 含む、雲母片 を少量含む。	60・72
211	Ⅳ層	土師器	底部	—	—	—	—	にぶい橙色 7.5YR7/3	橙色 5YR7/6	黄灰色 2.5Y5/1	直径9mm以下の 砂粒を多く含む。	138
212	Ⅳ層		手握土器	3.9	2.3	—	1.7	にぶい黄褐色 10YR7/3	灰黄色 2.5Y7/2	—	直径1mm以下の 砂粒を多く含む、 雲母片をごく少 量含む。	11

Tab.11 遺構外出土遺物観察表7

() は復元・残存後

挿入番号	出土層位	法量(cm)			特 徴	材質
		全 長	全幅	全 厚		
38	Ⅹ層	49.4	6.2	3.0	全体に板状を呈する。	ヒノキ科ヒノキ
39	Ⅹ層	52.1	5.6	1.5	片方の先端に向かって厚みは薄く、先端は丸い。断面は扁平な方形状を呈している。	ヒノキ科ヒノキ
40	Ⅹ層	55.7	4.4	3.2	棒状を呈し、断面は扁平な方形状を呈している。所々炭化。	ヒノキ科ヒノキ
41	Ⅹ層	52.6	6.5	2.7	断面は扁平な台形状を呈している。所々炭化箇所がみられる。	ヒノキ科ヒノキ
42	Ⅹ層	54.7	4.8	2.0	断面は扁平な方形状を呈している。片先端にかけては三角形状を呈し、片面は凹凸がなく平坦である。	ヒノキ科ヒノキ
43	Ⅹ層	46.5	5.0	2.1	断面は扁平な方形状を呈している。薄い板状で所々炭化している。	ヒノキ科ヒノキ
44	Ⅹ層	55.8	7.2	2.8	断面は方形状を呈し先端に行くほど幅は狭くなる。所々炭化している。	ヒノキ科ヒノキ
45	Ⅹ層	55.3	4.85	2.4	断面は方形状を呈しており、先端に行くほど薄い作りになっている。所々炭化している。	ヒノキ科ヒノキ
46	Ⅹ層	39.7	4.9	1.4	断面は扁平な方形状を呈し、全体に薄い作りである。片面は凹凸があるが、もう一方は平坦面をなす。	ヒノキ科ヒノキ

Tab.12 S X 1 木杭観察表

挿図番号	遺物取り上げ番号	X 軸	Y 軸	標高(m)	種類	器種
1	1294	-2972.730	-54866.032	1.880	土師器	鉢
2	1401	-2976.623	-54866.493	1.309	土師器	鉢
3	1287	-2971.864	-54865.787	2.227	土師器	鉢
4	1299	-2973.334	-54866.201	1.786	手捏土器	鉢
4	1335	-2975.476	-54866.255	1.519	手捏土器	鉢
7	1314	-2975.770	-54865.323	1.593	土師器	甕
8	1332	-2974.829	-54866.272	1.500	土師器	壺
9	1291	-2972.512	-54865.526	2.081	土師器	壺
10	1292	-2972.427	-54866.183	1.977	土師器	甕
10	1293	-2972.776	-54866.262	1.886	土師器	甕
10	1320	-2976.004	-54865.942	1.399	土師器	甕
10	1321	-2975.841	-54866.027	1.412	土師器	甕
10	1326	-2974.348	-54866.577	1.535	土師器	甕
10	1330	-2973.270	-54866.185	1.718	土師器	甕
10	1334	-2975.208	-54866.291	1.533	土師器	甕
11	1391	-2970.468	-54869.317	1.983	弥生土器	壺
13	1536	-2974.319	-54867.240	0.888	弥生土器	壺
14	1554	-2971.405	-54869.154	1.657	弥生土器	壺
16	1540	-2973.827	-54867.360	0.863	弥生土器	甕
17	1461	-2969.744	-54869.737	1.853	弥生土器	甕
20	1397	-2971.225	-54868.652	1.927	弥生土器	甕
20	1447	-2971.231	-54868.625	1.884	弥生土器	甕
21	1470	-2971.549	-54868.767	1.781	弥生土器	甕
22	1504	-2970.265	-54869.526	1.756	弥生土器	甕
23	1460	-2970.297	-54869.799	1.832	弥生土器	甕
23	1561	-2971.892	-54868.707	1.592	弥生土器	甕
25	1507	-2970.730	-54869.116	1.705	弥生土器	甕
26	1535	-2974.477	-54867.252	0.864	弥生土器	甕
28	1518	-2971.686	-54868.644	1.640	弥生土器	甕
30	1549	-2970.946	-54869.355	1.717	弥生土器	?
31	1477	-2972.288	-54868.279	1.288	弥生土器	?
32	1513	-2971.228	-54868.636	1.658	弥生土器	壺
33	1474	-2971.784	-54868.613	1.616	弥生土器	壺
33	1521	-2971.411	-54868.976	1.685	弥生土器	壺
33	1555	-2971.386	-54869.032	1.685	弥生土器	壺

Tab.13 出土遺物取り上げデータ表 1

挿図番号	遺物取り上げ番号	X 軸	Y 軸	標高(m)	種類	器種
34	1491	-2973.347	-54866.163	1.099	弥生土器	甕
35	1490	-2973.172	-54866.372	1.169	弥生土器	甕
37	1395	-2970.872	-54868.938	2.029	縄文土器	深鉢
12・23	1274	-2971.320	-54869.585	1.965	弥生土器	壺・甕
15・20	1396	-2971.043	-54868.901	1.947	弥生土器	壺・甕
18・27	1527	-2971.613	-54869.169	1.705	弥生土器	壺・?
19・32	1517	-2971.582	-54868.590	1.650	弥生土器	壺・甕
24・36	1465	-2970.535	-54869.323	1.779	弥生土器	壺・甕
48	1228	-2969.416	-54867.461	2.084	弥生土器	壺
49	1371	-2967.759	-54871.361	1.896	弥生土器	壺
51	1370	-2967.711	-54871.861	1.937	弥生土器	壺
52	1084	-2970.946	-54868.478	1.950	弥生土器	壺
53	1087	-2970.727	-54868.657	2.039	弥生土器	壺
54	1229	-2969.497	-54867.397	2.081	弥生土器	壺
54	1443	-2970.234	-54867.241	1.992	弥生土器	壺
56	1402	-2966.545	-54871.871	1.879	弥生土器	壺
57	1067	-2969.693	-54871.353	2.276	弥生土器	壺
57	1068	-2966.836	-54868.901	2.204	弥生土器	壺
58	1097	-2967.527	-54870.240	1.921	弥生土器	壺
59	1363	-2967.901	-54870.940	1.902	弥生土器	壺
60	1455	-2970.064	-54870.246	1.914	弥生土器	甕
61	1374	-2966.904	-54871.340	1.928	弥生土器	甕
63	1158	-2969.221	-54869.760	1.722	弥生土器	甕
64	1364	-2967.976	-54871.326	1.949	弥生土器	壺
64	1368	-2967.849	-54871.677	1.976	弥生土器	壺
64	1459	-2970.045	-54870.035	1.862	弥生土器	壺
65	1066	-2966.450	-54868.855	2.191	弥生土器	甕
65	1099	-2967.597	-54870.319	1.925	弥生土器	甕
66	1171	-2967.327	-54870.745	1.834	弥生土器	甕
67	1092	-2969.112	-54869.856	1.940	弥生土器	甕
67	1432	-2967.806	-54869.610	1.927	弥生土器	甕
68	1146	-2969.699	-54869.114	1.729	弥生土器	甕
69	1094	-2968.900	-54869.579	1.870	弥生土器	壺
70	1148	-2969.510	-54868.840	1.798	弥生土器	甕
71	1069	-2965.815	-54867.831	2.190	弥生土器	壺

Tab.14 出土遺物取り上げデータ表2

挿図番号	遺物取り上げ番号	X 軸	Y 軸	標高(m)	種類	器種
71	1071	-2968.013	-54869.180	2.212	弥生土器	壺
72	1258	-2968.597	-54868.877	2.072	弥生土器	甕
73	1369	-2967.874	-54871.562	1.955	弥生土器	壺
74	1420	-2969.344	-54870.585	1.906	弥生土器	壺
75	1232	-2970.251	-54867.289	2.090	弥生土器	底部
76	1103	-2966.687	-54871.205	1.999	弥生土器	底部
50・63・77	1422	-2969.178	-54870.421	1.831	弥生土器	壺・甕
60・62	1424	-2969.136	-54870.280	1.904	弥生土器	甕
82	548	-2959.334	-54859.583	3.173	弥生土器	鉢
84	1591	-2938.269	-54825.904	2.568	土師器	鉢
85	726	-2972.251	-54860.557	3.185	土師器	鉢
86	561	-2968.643	-54858.471	3.334	土師器	椀
87	550	-2972.246	-54860.491	3.249	弥生土器	鉢
88	891	-2972.743	-54862.903	2.723	土師器	椀
88	892	-2972.829	-54863.108	2.714	土師器	椀
89	764	-2975.812	-54866.912	2.967	弥生土器	鉢
89	771	-2975.748	-54866.547	2.794	弥生土器	鉢
90	877	-2974.641	-54862.736	2.767	土師器	椀
91	553	-2967.166	-54859.324	3.363	土師器	甕
91	554	-2967.213	-54858.961	3.310	土師器	甕
91	555	-2966.901	-54858.946	3.296	土師器	甕
91	797	-2966.743	-54858.082	3.216	土師器	甕
92	335	-2974.739	-54868.412	3.405	土師器	脚付椀
93	334	-2974.585	-54868.477	3.416	弥生土器	鉢
93	337	-2974.057	-54868.366	3.418	弥生土器	鉢
94	611	-2966.335	-54854.821	3.408	土師器	高杯
95	722	-2971.779	-54866.176	3.113	土師器	高杯
96	765	-2975.419	-54866.617	2.791	土師器	高杯
96	770	-2975.698	-54866.633	2.775	土師器	高杯
96	969	-2975.300	-54866.232	2.585	土師器	高杯
97	564	-2966.539	-54857.671	3.284	土師器	高杯
97	576	-2967.575	-54856.914	3.349	土師器	高杯
97	609	-2966.989	-54855.381	3.361	土師器	高杯
97	700	-2969.977	-54860.321	3.292	土師器	高杯
97	792	-2971.169	-54861.608	2.961	土師器	高杯

Tab.15 出土遺物取り上げデータ表3

挿図番号	遺物取り上げ番号	X 軸	Y 軸	標高(m)	種類	器種
97	909	-2972.854	-54863.089	2.580	土師器	高杯
97	911	-2971.400	-54861.769	2.648	土師器	高杯
99	185	-2969.415	-54860.808	3.306	土師器	高杯
99	784	-2973.007	-54866.217	2.910	土師器	高杯
99	785	-2972.956	-54865.950	2.879	土師器	高杯
100	345	-2975.113	-54867.797	3.347	土師器	高杯
100	347	-2975.341	-54867.654	3.366	土師器	高杯
100	358	-2976.090	-54868.169	3.428	土師器	高杯
100	919	-2975.877	-54866.330	2.629	土師器	高杯
101	567	-2966.370	-54856.922	3.364	土師器	高杯
101	590	-2967.174	-54855.619	3.327	土師器	高杯
101	802	-2967.056	-54855.873	3.102	土師器	高杯
102	594	-2967.816	-54855.533	3.356	土師器	高杯
102	614	-2967.602	-54855.144	3.417	土師器	高杯
104	443	-2970.836	-54869.282	3.500	土師器	高杯
106	284	-2965.296	-54870.504	3.406	土師器	高杯
106	684	-2968.291	-54866.290	3.406	土師器	高杯
107	320	-2976.429	-54871.608	3.285	土師器	高杯
107	321	-2976.541	-54871.161	3.310	土師器	高杯
107	381	-2976.212	-54872.084	3.356	土師器	高杯
107	752	-2976.980	-54870.456	3.141	土師器	高杯
108	766	-2976.168	-54866.648	2.764	土師器	高杯
109	652	-2972.680	-54867.852	3.340	土師器	高杯
110	336	-2973.836	-54868.504	3.455	土師器	高杯
110	688	-2957.990	-54865.688	3.283	土師器	高杯
110	717	-2973.662	-54866.342	2.901	土師器	高杯
111	695	-2975.415	-54867.232	3.107	土師器	高杯
112	389	-2976.231	-54873.362	3.424	土師器	高杯
113	327	-2975.901	-54870.091	3.638	土師器	高杯
114	803	-2967.174	-54855.783	3.270	土師器	高杯
116	966	-2970.624	-54866.205	2.604	弥生土器	甕
116	998	-2972.387	-54866.641	2.575	弥生土器	甕
116	1060	-2972.291	-54865.817	2.409	弥生土器	甕
117	997	-2972.389	-54866.897	2.413	弥生土器	甕
118	937	-2970.146	-54870.315	3.314	土師器	甕

Tab.16 出土遺物取り上げデータ表4

挿図番号	遺物取り上げ番号	X 軸	Y 軸	標高(m)	種類	器種
119	1579	-2942.642	-54825.727	2.617	弥生土器	甕
120	741	-2976.057	-54868.654	2.908	土師器	甕
120	972	-2976.573	-54868.776	2.492	土師器	甕
120	973	-2976.001	-54868.477	2.480	土師器	甕
120	980	-2977.36	-54867.759	2.319	土師器	甕
121	783	-2972.768	-54865.878	2.918	土師器	甕
124	428	-2971.793	-54868.281	3.443	土師器	甕
124	1026	-2973.291	-54865.076	2.497	土師器	甕
125	837	-2965.032	-54859.825	3.234	土師器	甕
125	843	-2965.175	-54860.246	3.257	土師器	甕
129	1576	-2938.408	-54826.936	2.729	土師器	甕
133	849	-2965.888	-54861.662	3.179	土師器	甕
134	626	-2973.468	-54871.129	3.276	土師器	甕
135	618	-2973.918	-54871.461	3.219	弥生土器	甕
135	1040	-2974.065	-54867.769	2.364	弥生土器	甕
138	669	-2974.220	-54867.003	3.166	土師器	甕
139	1030	-2975.910	-54867.987	2.310	弥生土器	甕
141	651	-2972.562	-54868.201	3.388	土師器	甕
142	925	-2965.518	-54869.934	2.754	土師器	甕
142	963	-2968.926	-54866.034	2.864	土師器	甕
142	1000	-2965.299	-54869.069	2.735	土師器	甕
144	1036	-2976.200	-54867.914	2.291	土師器	甕
145	756	-2978.347	-54870.157	3.072	弥生土器	甕
145	760	-2978.870	-54869.494	3.070	弥生土器	甕
147	363	-2977.240	-54868.259	3.366	土師器	甕
147	366	-2977.849	-54868.586	3.391	土師器	甕
147	533	-2977.997	-54868.374	3.322	土師器	甕
147	749	-2978.125	-54867.888	3.151	土師器	甕
148	430	-2971.989	-54868.914	3.484	土師器	甕
148	451	-2971.487	-54870.121	3.578	土師器	甕
148	654	-2972.416	-54867.814	3.346	土師器	甕
148	656	-2972.334	-54867.989	3.369	土師器	甕
148	657	-2971.962	-54867.785	3.395	土師器	甕
148	659	-2971.785	-54867.987	3.405	土師器	甕
148	661	-2971.707	-54867.668	3.339	土師器	甕

Tab.17 出土遺物取り上げデータ表5

挿図番号	遺物取り上げ番号	X 軸	Y 軸	標高(m)	種類	器種
149	513	-2968.944	-54872.502	3.431	弥生土器	大壺
150	724	-2970.179	-54864.519	2.897	弥生土器	壺
151	364	-2977.367	-54868.848	3.398	土師器	壺
152	581	-2967.510	-54855.998	3.352	土師器	壺
152	591	-2967.288	-54855.613	3.364	土師器	壺
153	933	-2965.031	-54869.058	2.758	土師器	壺
154	1240	-2957.689	-54836.655	3.285	土師器	壺
155	932	-2965.476	-54869.205	2.718	土師器	壺
158	1192	-2956.805	-54836.853	3.206	土師器	壺
158	1203	-2956.796	-54837.126	3.222	土師器	壺
158	1209	-2957.556	-54836.733	3.346	土師器	壺
159	730	-2963.413	-54863.436	3.316	土師器	小型壺
162	1578	-2941.695	-54826.270	2.635	弥生土器	甕
165	716	-2972.801	-54866.675	2.600	弥生土器	?
166	887	-2971.615	-54865.348	2.708	弥生土器	?
168	1575	-2941.732	-54829.897	2.582	弥生土器	?
171	1045	-2957.221	-54837.394	3.374	弥生土器	?
171	1132	-2956.668	-54837.140	3.243	弥生土器	?
171	1186	-2956.411	-54836.601	3.261	弥生土器	?
171	1191	-2956.887	-54836.882	3.321	弥生土器	?
171	1204	-2956.956	-54837.081	3.292	弥生土器	?
171	1214	-2957.303	-54837.203	3.234	弥生土器	?
171	1239	-2956.940	-54836.874	3.124	弥生土器	?
171	1255	-2956.691	-54836.888	3.109	弥生土器	?
172	1583	-2941.591	-54828.228	2.617	弥生土器	?
173	605	-2967.126	-54854.689	3.402	弥生土器	?
174	732	-2963.548	-54862.731	3.365	土師器	小型丸底壺
176	348	-2975.712	-54867.516	3.464	土師器	小型器台
178	671	-2975.128	-54867.421	3.196	土師器	小型器台
179	372	-2977.175	-54872.278	3.677	土師器	小型器台
179	897	-2975.564	-54866.382	2.701	土師器	小型器台
179	985	-2976.382	-54866.213	2.398	土師器	小型器台
180	667	-2973.650	-54866.612	3.124	手捏土器	
183	965	-2970.305	-54865.856	2.702	弥生土器	小型壺
184	731	-2963.502	-54863.186	3.308	手捏土器	

Tab.18 出土遺物取り上げデータ表6

挿図番号	遺物取り上げ番号	X 軸	Y 軸	標高(m)	種類	器種
186	729	-2963.504	-54863.627	3.309	手捏土器	
200	166	-2973.187	-54869.908	4.473	須恵器	壺
200	341	-2973.245	-54867.342	3.228	須恵器	壺
200	362	-2976.822	-54868.183	3.310	須恵器	壺
200	666	-2973.570	-54866.943	3.175	須恵器	壺
200	718	-2973.506	-54866.056	2.773	須恵器	壺
200	740	-2976.704	-54867.560	3.141	須恵器	壺
200	767	-2976.943	-54867.100	2.851	須恵器	壺
200	904	-2973.400	-54865.931	2.767	須恵器	壺
200	1028	-2974.032	-54865.656	2.523	須恵器	壺
200	1029	-2974.143	-54865.617	2.413	須恵器	壺
101・105	601	-2967.378	-54855.340	3.368	土師器	高杯
101・152	592	-2967.493	-54855.598	3.385	土師器	高杯・壺
103・101・152	579	-2967.991	-54856.096	3.349	土師器	高杯・壺
113・147・92	365	-2977.447	-54868.537	3.342	土師器	高杯・脚付碗・甕
115・136	1577	-2943.604	-54824.959	2.608	土師器	甕
123・115	1573	-2943.508	-54825.614	2.631	土師器	甕
127・132・164	1590	-2938.737	-54825.740	2.567	弥生土器	甕・?
130・131	1581	-2943.903	-54826.424	2.541	土師器	甕
136・161	1574	-2943.064	-54824.799	2.626	弥生土器	甕・?
139・144・120・169	977	-2977.797	-54868.179	2.396	弥生土器	甕・?
147・175	738	-2977.542	-54867.388	3.094	土師器	甕・小型器台
151・147	367	-2978.046	-54868.395	3.339	土師器	甕・壺
152・101	580	-2967.750	-54855.823	3.363	土師器	高杯・甕
156・173	602	-2967.181	-54855.245	3.364	弥生土器	壺・?
181・187	725	-2971.958	-54866.099	3.101	土師器	土製模造鏡
182・185	832	-2963.280	-54863.363	3.272	手捏土器	
65・163	1002	-2970.115	-54865.276	2.418	弥生土器	甕・?
80・81・128・160・143・167	1572	-2942.767	-54826.628	2.692	弥生土器	鉢・甕・?
82	548	-2959.334	-54859.583	3.173	弥生土器	鉢
83・142	916	-2966.445	-54870.757	2.800	土師器	甕・鉢
86・101・114	572	-2968.382	-54856.977	3.378	土師器	碗・高杯
94・105・173・152	604	-2967.112	-54855.003	3.395	弥生土器	高杯・壺・?
98・99	903	-2973.271	-54865.858	2.749	土師器	高杯
142	25	-2965.609	-54875.517	3.553	土師器	甕

Tab.19 出土遺物取り上げデータ表7

挿図番号	遺物取り上げ番号	X 軸	Y 軸	標高(m)	種類	器種
148	449	-2971.505	-54869.928	3.665	土師器	甕
148	450	-2971.632	-54869.932	3.602	土師器	甕
148	455	-2971.970	-54870.460	3.621	土師器	甕
188	243	-2972.902	-54873.187	3.946	土師器	高杯
189	110	-2978.587	-54879.669	4.027	土師器	甕
192	150	-2960.250	-54874.241	3.333	土師器	甕
194	193	-2973.341	-54864.726	4.057	須恵器	壺
196	1	-2957.498	-54879.558	4.242	須恵器	体部
197	3	-2956.181	-54878.046	4.306	須恵器	体部
198	2	-2956.707	-54878.000	4.066	須恵器	体部
199	190	-2972.424	-54863.017	4.046	須恵器	体部
200	267	-2970.311	-54874.950	4.009	須恵器	壺
200	270	-2969.507	-54874.784	3.969	須恵器	壺
201	238	-2974.727	-54864.908	4.029	須恵器	体部
202	224	-2975.387	-54868.771	4.064	須恵器	杯
205	194	-2973.406	-54865.420	4.101	土師器	土錘
209	57	-2962.797	-54875.122	3.493	土師器	甕
210	60	-2960.493	-54874.438	3.484	弥生土器	甕
210	72	-2959.482	-54872.832	3.480	弥生土器	甕
211	138	-2961.105	-54870.205	3.411	土師器	?
212	11	-2968.777	-54876.807	3.540	手握土器	
148・208	448	-2971.346	-54869.886	3.621	土師器	甕
190・191・193	159	-2973.490	-54874.682	4.820	土師器	甕・壺
195・200	263	-2970.417	-54874.011	3.953	須恵器	壺・?

Tab.20 出土遺物取り上げデータ表 8

第5章 まとめ

1. 調査成果から

具同中山遺跡群は、縄文時代から中世にかけて中村市では最も広範囲に認められる遺跡群である。中筋川改修による昭和61年度から調査が開始され、特に古墳時代の祭祀跡や鎌倉時代を中心とした集落跡を検出している。さらに中村宿毛道路関連では、既に報告されている具同中山遺跡群Ⅰとした西端部にあたる調査地点で小規模な古墳時代の祭祀跡や弥生時代から鎌倉時代までの自然流路を検出している。

今回の調査区は、遺跡群の中でもほぼ中央域に位置しており、昭和61年度から平成3年度にかけて調査した地点に近く同じ中筋川の自然堤防上に立地している。調査地点の標高も6～7m前後と周辺地域からすると比較的高い位置である。検出遺構は、古墳時代以降で時期不明の柵列や土坑3基、弥生時代から古墳時代にかけての自然流路跡、弥生時代の柵列跡等を検出している。出土遺物では、主に包含層のⅥ層、Ⅵ'層からまとめて弥生時代中期後半から後期にかけての土器が出土しており、四国西南部の弥生期を把握する上で貴重な資料を提供できた。

古墳時代では、包含層のⅣ層、Ⅴ層から4～5世紀を中心とした遺物が出土している。中でも調査区中央部から出土した土師器の甕は、同時期の県内出土のものとは比べて大型で周辺の遺物も含め祭祀関連に使用されたとも推定できる。また古墳時代の祭祀跡は、本流である中筋川に沿って祭祀行為の規模が大きく、支流では小規模ながら頻繁に行われていたという傾向が認められ、常に水に冠るような地点で祭祀が認められる。洪水や農耕の五穀豊穡を目的とした水の祭りとも考えられるが、もう一つの視点として流通に関わる湊での祭祀行為も考えられる。中筋川上流域には、高岡山古墳をはじめ平田首我山古墳が造営されており、これら古墳を生み出した集落と下流域の祭祀遺跡群は有機的な関係が考えられており、今後これら祭祀行為の背景にある政治的関係や自然崇拜等、あらゆる視点で中筋川下流域の祭祀跡を考えていく必要があると考えられる。

2. 具同中山遺跡群出土の弥生中期の土器について

今回の調査区で、弥生時代中期の土器が包含層ではあるが破片数900点程の資料がまとめて出土した。主にⅥ層からⅥ'層の出土であるが、高知県西部では出土量が少なく貴重な資料である。これまで具同中山遺跡群で調査された当該期の遺物や、周辺遺跡の紹介と高知県弥生中期土器の研究史を振り返り若干の考察をしていきたい。

中村地域でも中期後半になると遺跡数が増える傾向が認められる。四万十川左岸に、吹越遺跡、久山遺跡、岩崎山遺跡等が所在しており、中村市を一望できる中世の中村城跡の一部で古城山遺跡が確認されている。古城山遺跡では、神西式土器と共に太形蛤刃石斧と石鎌が出土している。これら遺跡は、山上に立地しているところが多く古城山遺跡をのぞき集団経営が行われるほどの面積を有していない。これら山上に点在する小集落と有機的な関連性を持つ拠点集落は平野部の沖積層の下に埋没されている可能性が指摘されている。具同中山遺跡群からは、岡本健児氏が石丸出土と

されている神西式土器を掲載され、その後昭和61年度の調査で包含層から100点近い中期後葉を中心とした土器が出土している。昭和61年度調査の図示し得たものから見ると、中期中葉の甕が1点とその他は後葉の口縁部粘土帯が貼付される壺や長頸壺などが出土している。さらに平成6年度調査でも、包含層のⅥ層～Ⅷ層から弥生中期末から後期の土器が出土している。その中で中期土器の特徴とされる口縁部粘土帯貼付手法を持つものは、神西式土器の胎土を持つものとされている。いずれも量的には少ない遺物ではあるが、この地域で沖積地からの初めての出土であり今回の資料を含め、拠点集落が周辺に存在している可能性も想定できる。

具同中山遺跡群から出土した中期土器の特徴は、口縁部粘土帯貼付に口縁端部から粘土帯外面に刻目を有し微隆起帯や円形浮文を持つものである。これらの特徴を有する土器群が出土した遺跡として、窪川町の神西遺跡⁴¹⁶や葉山村の永野遺跡⁴¹⁷が挙げられる。県西部の中期の土器についてはこの2遺跡の資料でその様相が語られていた。上佐における弥生土器の編年は岡本健児氏の研究により確立され始め、その後出原恵三氏によって上佐の弥生中期土器研究でさらに編年研究が進んだ⁴¹⁸。さらに平成6年に「弥生時代中期の土器と集落」の内容で開かれた古代学協会四国支部の第8回大会で高知県の最新の中期土器編年が提がされた⁴¹⁹。これらの研究成果をうけて、平成7年度本調査の既調査概報⁴¹¹では、永野遺跡や神西遺跡の土器群や田村遺跡群の遺構一括資料と比較して、本資料は中期Ⅱ（畿内第Ⅲ様式並行）に比定され永野Ⅱと神西式土器を繋ぐ中期中葉の一括資料として報告している。

その後高知県では、伊野町のバーガ森遺跡⁴¹²や土佐市の北高田遺跡が調査され神西式土器を含め弥生中期の検討資料が増加し始めた。その中で出原氏が提唱した土佐型甕⁴¹³の系譜を引く特徴を有していることなど、地域色豊かな土器群としてその位置づけの再検討がされ始めている。伊予側では、岡本健児氏によって宇和町岩木岩陰出土の土器は神西式土器と認識されている⁴¹⁴。最近では宇和町の岩木赤坂遺跡で、中期中葉の土器群が出土しており今次資料と類似した特徴を持つ土器群を四国西南土器として位置付けている。その定義として挙げられている形態の特徴や、口縁部外面の粘土帯を貼付し刻目が施される点、胴部に突帯や浮文を有する点など本資料にも認められ伊予側での資料の諸特徴を包括し得るものである。岡崎壯一氏の西南四国型甕の研究によれば、口縁部粘土帯と刻目の変遷から、南予地方の西南四国型甕は前期末に出現し始め中期を通して展開し中期末頃まで存続したとされている。

本資料も、西南四国という地域の中で愛媛県南予と高知県中央部の中で、その土器に認められる個々の属性の比較検討が望まれる所である。本資料における現段階での時間的位置づけを行うにあたり、再度永野遺跡資料と神西遺跡の資料との属性の比較検討が必要と考える。永野遺跡で岡本健児氏は、中期2式土器は畿内Ⅲ様式（古）並行でその仮称を永野Ⅲ式土器とし、中期3式土器を神西式土器そのものとしている。この神西式土器については、前述したごとく岡本健児氏が昭和25年に発掘した神西遺跡出土の弥生土器の特徴をもってその標識としているが資料的に少なく今後の研究課題となる点である。その後伊野町バーガ森北斜面遺跡出土土器の検討をされ、凹線文土器と伴って神西式土器が出土しており、その出土状況から高知県西部にゆくに従いその判出例が少なくなる指摘をされ神西式土器が純粋な形で分布するのは高知県西部地域であるとされている。

本資料は包含層出土ではあるが、ある程度まとまりをもって出土しており永野Ⅲ式から神西式土器の時間幅で捉えられる資料である。61から72までの土器は、口縁部粘土帯に刻目をもちその下部に微隆起帯をもち楕円浮文をもつものなども存在し同時期に考えてもよさそうである。しかし48・49などの壺類は、連続直線文や波状と直線文が交互に施されており、時期的に古く（中期中葉頃）存在してもよい資料である。また56・57などはⅣ段階新で、59などはⅣ段階末と考えられる資料である。本資料でも凹線文の発達した資料は認められず、岡本健児氏が指摘されたとおりの出土状況である。ここで出土している土器群は、明確に時期を決めることができないが、59を除き中期中葉から中期後葉（中期末も含む）の範囲に含まれるものと理解しておきたい。（松田）

註

- 1) 高知県教育委員会「具同中山遺跡群・古津賀遺跡Ⅰ〔後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ〕 1988年
- 2) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター「具同中山遺跡群Ⅰ」〔中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ〕 1997年
- 3) 高知県教育委員会「高高山古墳群発掘調査報告書」 1985年
- 4) 山本哲也「四万十川流域における前期古墳の成立とその背景」『海史史学』第35号 1997年
- 5) 岡本健児「入門講座弥生土器―四国4―」考古学ジャーナル92 ニューサイエンス社 1974年
- 6) 詳細は確認できないが、岡本健児氏により「上佐神西遺跡調査概報」〔上代文化第20輯〕1951年に報告がされている。
- 7) 葉山村教育委員会「高知県葉山村埋蔵文化財発掘調査報告書―姫野々上町・新上居宇津ヶ藪・永野遺跡―」1984年
- 8) 岡本健児「四国の弥生土器の編年と年代」『高地性集落と倭国大乱』雄山閣 1984年
- 9) 出原恵三「南四国における弥生中期土器の展開―編年と地域間交流―」〔遺跡〕第31号 1988年
- 10) 松村信博「弥生時代中期の土器と集落―高知県―」〔古代学協会四国支部第8回大会資料―弥生時代中期の土器と集落―〕1994年
- 11) 山崎正明「弥生時代」〔中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ〕(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996年
- 12) 伊野町教育委員会「バ・ガ森北斜面遺跡」1999年
- 13) 出原恵三「く土佐型」壺の提唱とその意義」〔遺跡〕第32号 1990年
- 14) 岡本健児「神西式土器文化の再検討」〔高知女子大学紀要〕第20巻 1971年
- 15) 岡崎社一「南予地方における西南四国型壺の一考察」〔岩城赤坂遺跡〕愛媛大学法文学部考古学研究室 1999年

3. 具同中山遺跡群出土土師器高杯に関する覚え書き

(1) はじめに

幡多地域では河川改修及び道路建設等に伴う発掘調査が継続的に実施され、具同中山遺跡群を中心に4世紀から6世紀にかけての祭祀跡が数多く検出されており年々資料が蓄積されてはいるが、祭祀跡出土のものが大部分を占めているため編年を構築する障壁となっている。そのなかでも、土師器とともに祭祀跡から出土している須恵器については精力的に研究が進められ精緻な編年が確立されており各祭祀跡の年代観は須恵器を中心に語られてきた。²¹ その一方で、土師器については2,3の論稿を除いてあまり触れられることがなかった。²²

ここでは土師器の高杯について若干の検討を加えていこうと思う。具同中山遺跡群で現在までに報告されている高杯は100点あまりある。そのうち杯底部と杯口縁部の接合時の段を残し、口縁部が大きく外反する高杯について述べる。

(2) 土師器高杯の分類

ここでは杯底部と杯口縁部の接合部が段状に残存し、口縁部が大きく外反する高杯を取りあげる。このタイプの高杯は具同中山遺跡群では主体を占めるもので脚端部および杯部と脚部の接合方法を基準に分類をおこなう。²³

① 脚部形態

- 1類：脚部は中空で脚端部にむかい緩やかにひろがり脚端部付近で大きくひろくもの。
- 2類：脚部は中空で脚端部にむかい緩やかにひろがり脚端部でほぼ水平にひろがるもの。

② 杯部と脚部の接合方法

- a手法：杯部と脚部を別々につくり、粘土塊を杯底部内面から押しつけ接合する。結果として杯底部が半球状・棒状に突出する。
- b手法：a手法と同様に製作されたと考えられるが、杯底部の突出部を脚部内面から指頭により2,3回押さえあるいはなでつけたものであり、結果として突出することはなく平坦である。

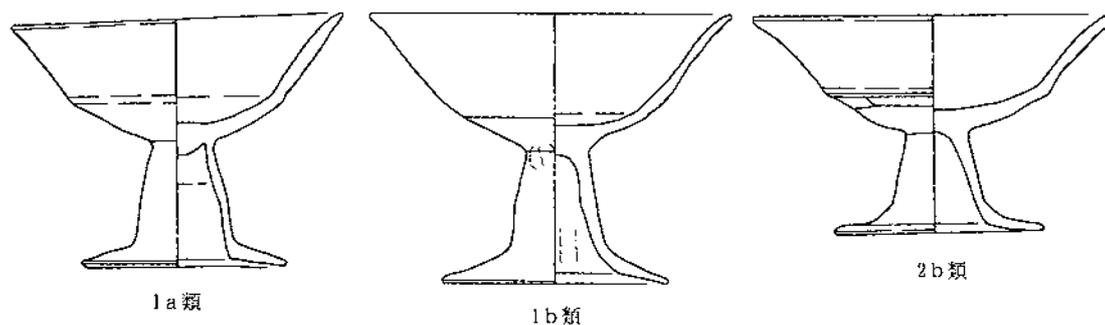


Fig.43 高杯分類図

(3) 高杯の法量分布

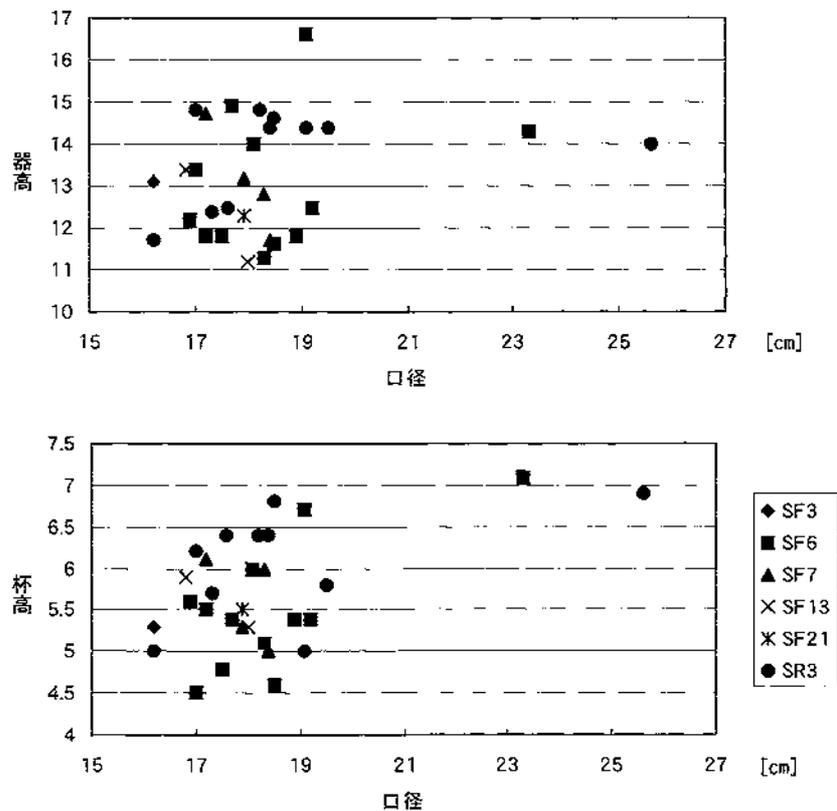
今回対象とする高杯の法量分布^{if4}（口径と器高、口径と杯高）について各SF別にすべての種類のグラフ化を試みた。

口径20cm以上の大型のものを除くと、器高は11.0～17.0cmの範囲に、杯高は4.5～7.0cmの範囲にそれぞれ収まる。このうち、出土数の多いSF6とSR3に注目してみると、器高が高い一群と低い一群、および杯高が深い一群と浅い一群とにグルーピングが可能である。杯高が深い一群ではSR3出土資料が圧倒的に多いが、逆に浅い一群ではSF6出土資料が圧倒的に多い。また、器高についても高い一群はSR3出土資料に多く、低い一群はSF6に多い。SF6とSR3のあいだには時期差が存在すると考えられる。

SF6とSR3出土の高杯を比較した結果、類型には関係なく杯高・器高に明瞭に時期差があらわれることが明らかとなった。

また、時期変遷についてはSF6とSR3の先後関係が明らかとなれば変遷も自ずと明らかとなる。しかし、両者の出土遺物のなかで時期が把握しやすい須恵器杯類を検討してみると両者とも概ね5世紀後半～末のものであり先後関係を明らかにすることができない。他の器種においても同様である。

そこで、層位的に先後関係が把握されているSF4とSF5出土の土師器高杯を検討してみる。SF5はSF4より下層で検出されている^{if5}。SF4では土師器高杯が2点、SF5では2点出土し



ており、両者の杯高を比較すると明らかにSF4のほうが浅い^{註9}。したがって、杯高は深いものから浅いものへと変遷するものと考えられる。

(4) 1b類高杯の動向

SR3出土の高杯には1a類と1b類の2種類が存在し、1b類は胎土・色調においても1a類とは比較的明確に分離することができる。1b類は1点を除くとすべてのものはぶい橙色に発色しており、胎土は直径5mm大以下の砂粒を多く含むものである。つまり、少なくとも1b類は1点を除くとすべて同一地域で制作され、かつ1a類の製作地とは異なると考えられる。

次のSF6の段階になると1b類の中でのぶい橙色を呈するものは1点のみであり、胎土・色調も多種類のものが認められるようになる。

(5) まとめ

土師器高杯について大まかに検討を加えてきた。

杯部と脚部との接合方法を中心にタイプ分類を試み、各タイプの関係について若干の検討を加えた。脚部形態、杯部と脚部の接合方法について3タイプに分類することが可能である。時期変遷については脚端部形態、杯部と脚部の接合方法とはあまり関係がなくむしろ杯高の差にあらわれている。すなわち時期が新しくなるにつれ杯部が浅くなる傾向があることが明らかとなった。

また、各類型の土師器高杯の動向を検討するにあたり1b類を取上げ、検討した結果、SR3段階での1b類は胎土・色調が類似しており1a類とは異なった製作地を推定することができる。その後、SF6段階では各類型とも統一的な胎土・色調は持たなくなる。祭祀行為の主体を検討するのに示唆的な結果を得ることができた。(久家)

註

- 1) 高知県の主な須恵器研究は以下のものがある。
廣田典夫『土佐の須恵器』四国考古学叢書2 1991年
廣田佳久『須恵器』『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』高知県教育委員会 1988年
廣田佳久『須恵器』『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』高知県教育委員会 1992年
廣田佳久『南四国の須恵器—周辺地域における須恵器の変遷—』『王朝の考古学』雄山閣 1995年
- 2) 出原恵三『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』第V章 総括 古津賀遺跡 1988年
松田直則『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』第V章 総括 具同中山遺跡群 1988年
- 3) 杯部と脚部との接合方法については3タイプ以上に分類が行われているが、すでに土器片の接合及び補填等が行われており詳細に分類することができなかった。接合及び補填がおこなわれたものでも脚端部を観察すると比較的簡単に識別できるものみの分類となってしまった。
- 4) 数値化については各報告書の観察表の数値を使用した。しかし、観察表に記載がなかった杯高については各報告書の実測図で計測した。また、口径・杯高・器高・底径・脚部高とはFig.45の凡例のとおりである。
- 5) 土師器高杯は1a類・1b類・2b類の3タイプを確認することができた。本文(3)以下で行う法量分布による特徴を類型別の3タイプでも同様に行った。その結果、1a類・1b類はほぼ同様の分布範囲を示し、広範囲に分布することが明らかとなった。一方、2b類については狭い範囲に分布する傾向がある。特に口径と杯高の関係については顕著である。
- 6) 出原恵三・廣田佳久・松田直則『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』高知県教育委員会 1988年
- 7) 松田直則・伊藤強・山崎正明『具同中山遺跡群Ⅰ』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター 1997年
- 8) 前掲書註6)
- 9) 本小論でとりあげたタイプの高杯の杯高はSF4 (4.7・5.1cm)、SF5 (6.5・6.6cm)である。

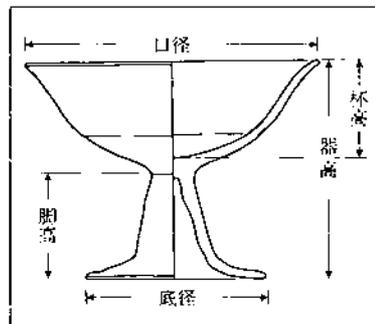


Fig.45 高杯計測部位凡例

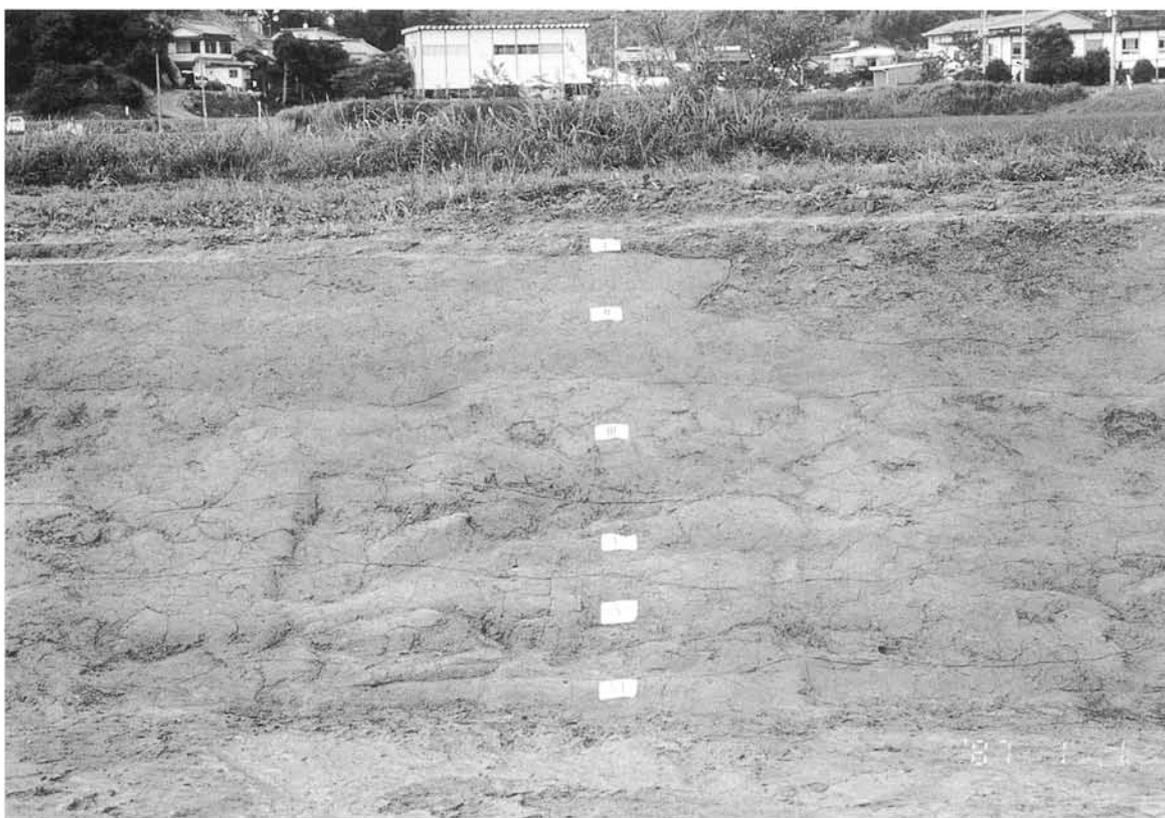
写真図版



調査前全景



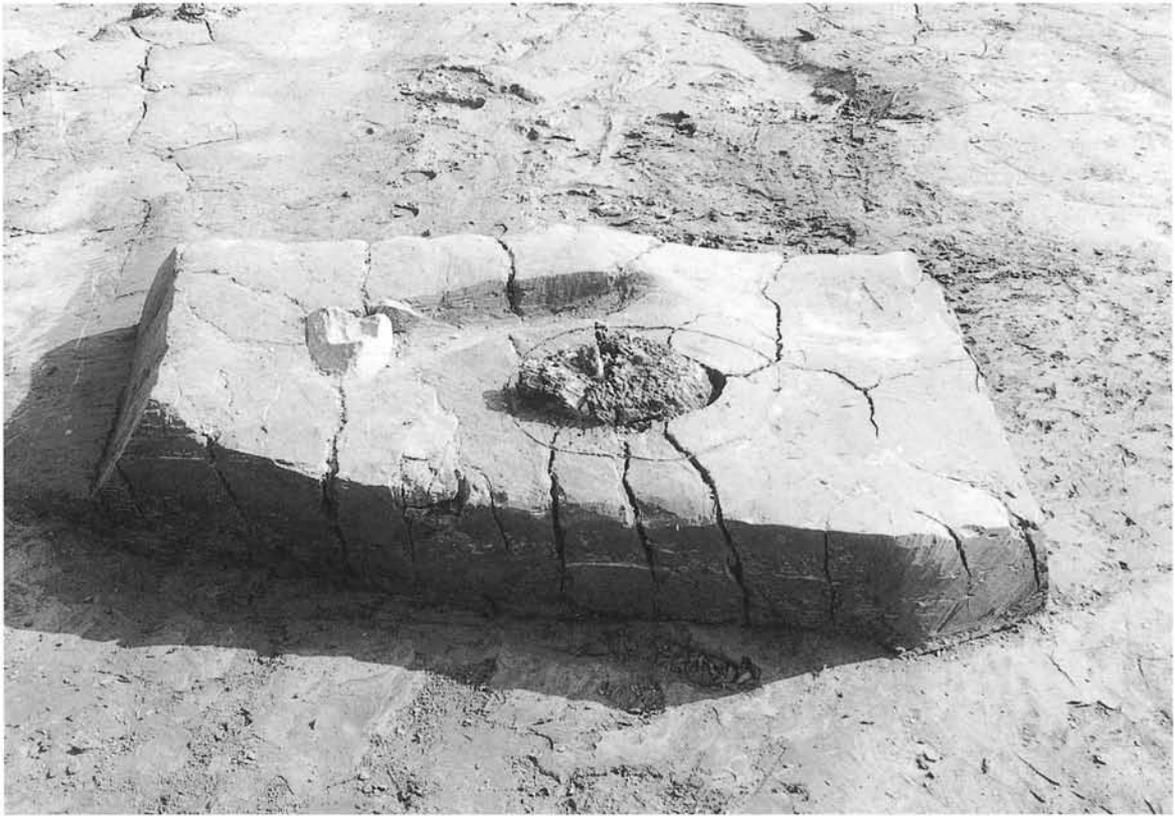
調査区 表土層掘削状況



調査区 北壁セクション



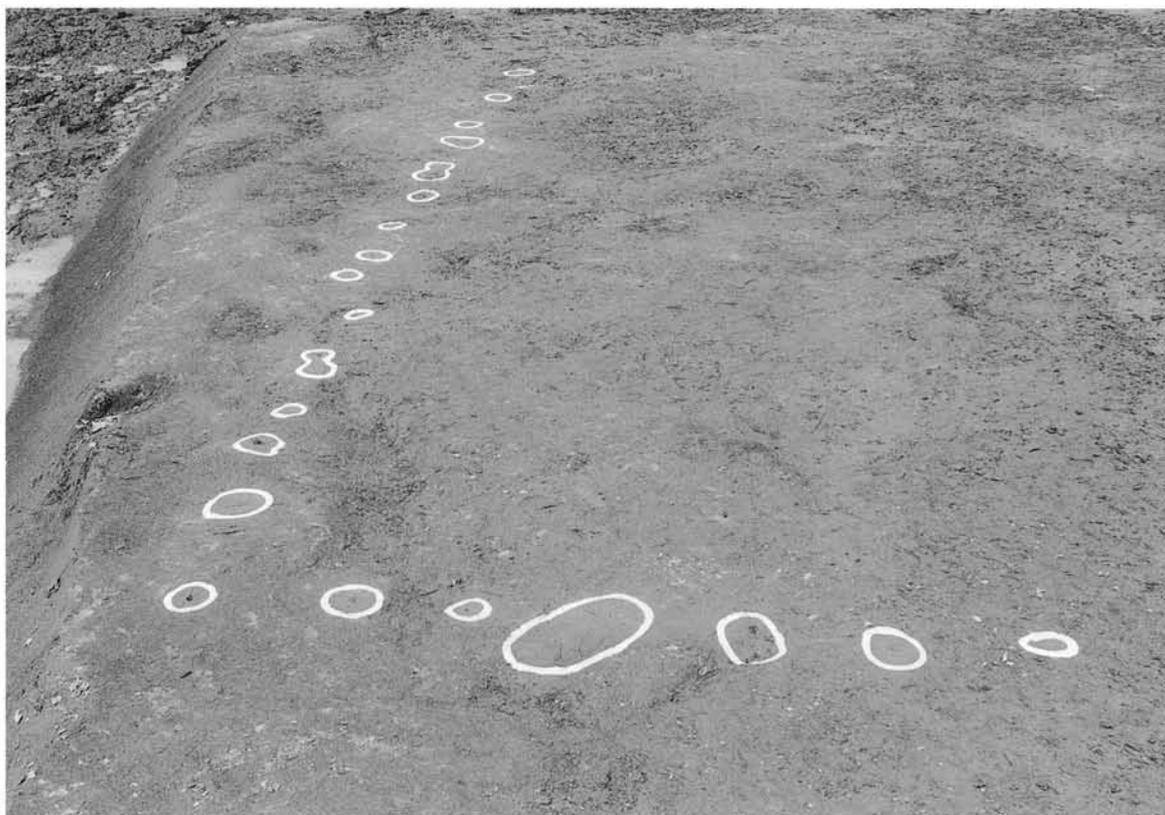
調査区 中央バンクセクション



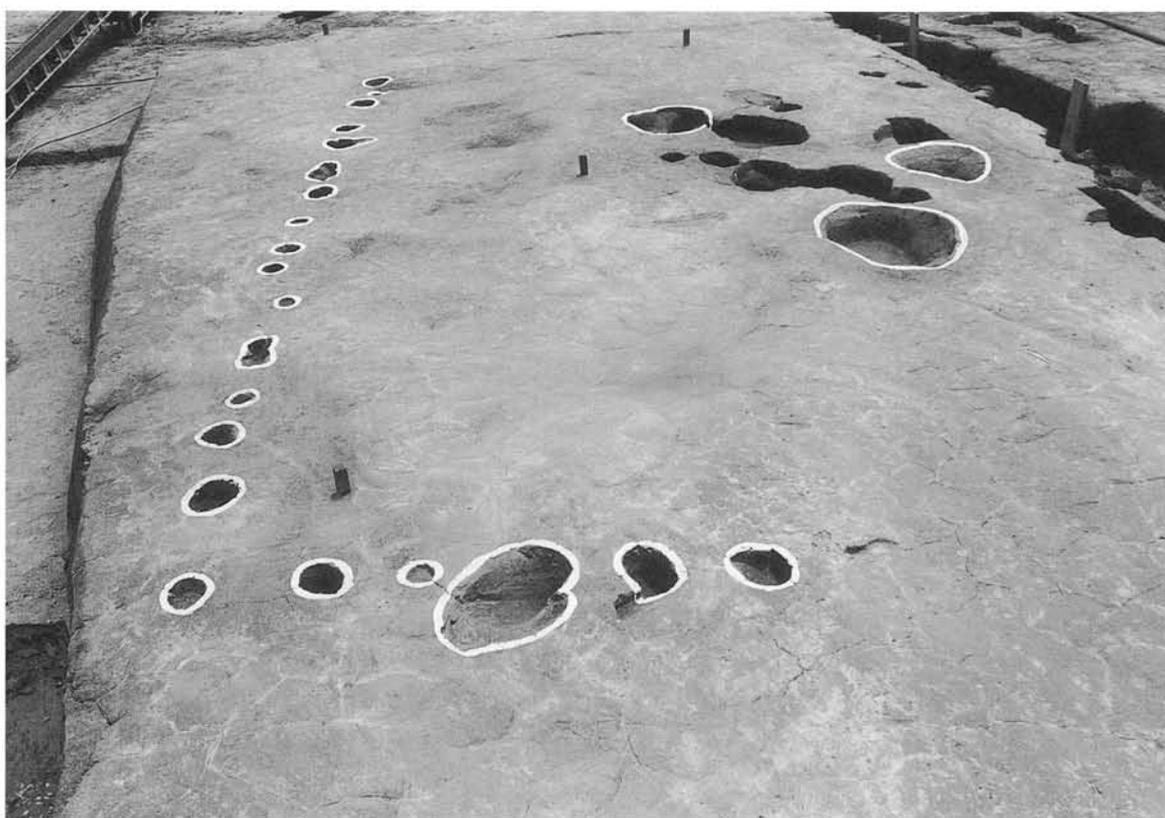
第IV層 P 1 検出状況



第IV層 P 2 検出状況



第Ⅲ層 SA検出状況（西方向から）



SA・SK完掘状況（西方向から）



S R2 セクション (北方向から)



同上 (北西方向から)



S R2 完掘状況（西方向から）



同上（北方向から）



第IX層 SA検出状況（西方向から）



同上（南方向から）



第Ⅸ層 SA半截狀況



同上



第IX層 SA半截状況



調査区 完掘状況



第Ⅳ層 烧土・遺物出土状況



同上



S R 1 遺物出土状況



S R 1 土師器出土状況



S R 1 土師器出土状況



S R 2 遺物出土状況



S R 2 遺物出土状況



同上



S R 2 木製品出土状況



第Ⅸ層 遺物出土状況



第Ⅸ層 遺物出土狀況



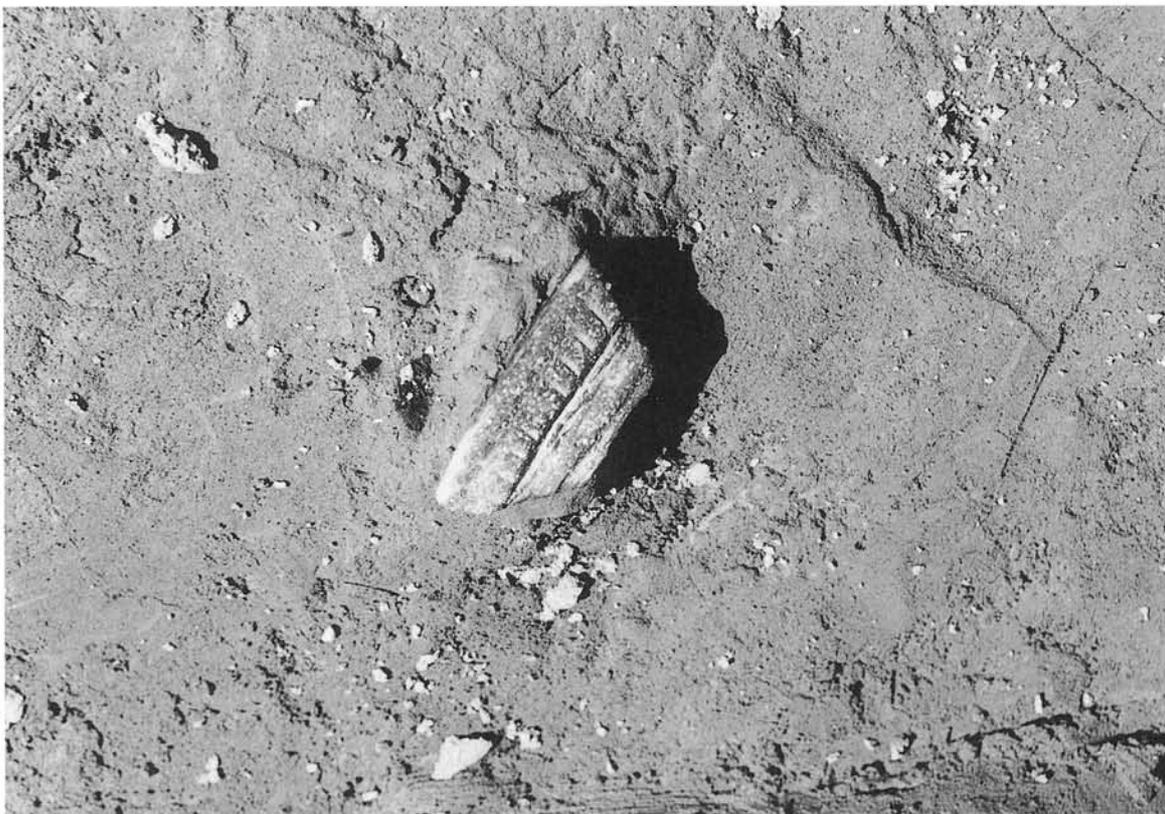
第Ⅸ層 石鏃出土狀況



第VI層 遺物出土状況



同上



第Ⅵ層 遺物出土状況



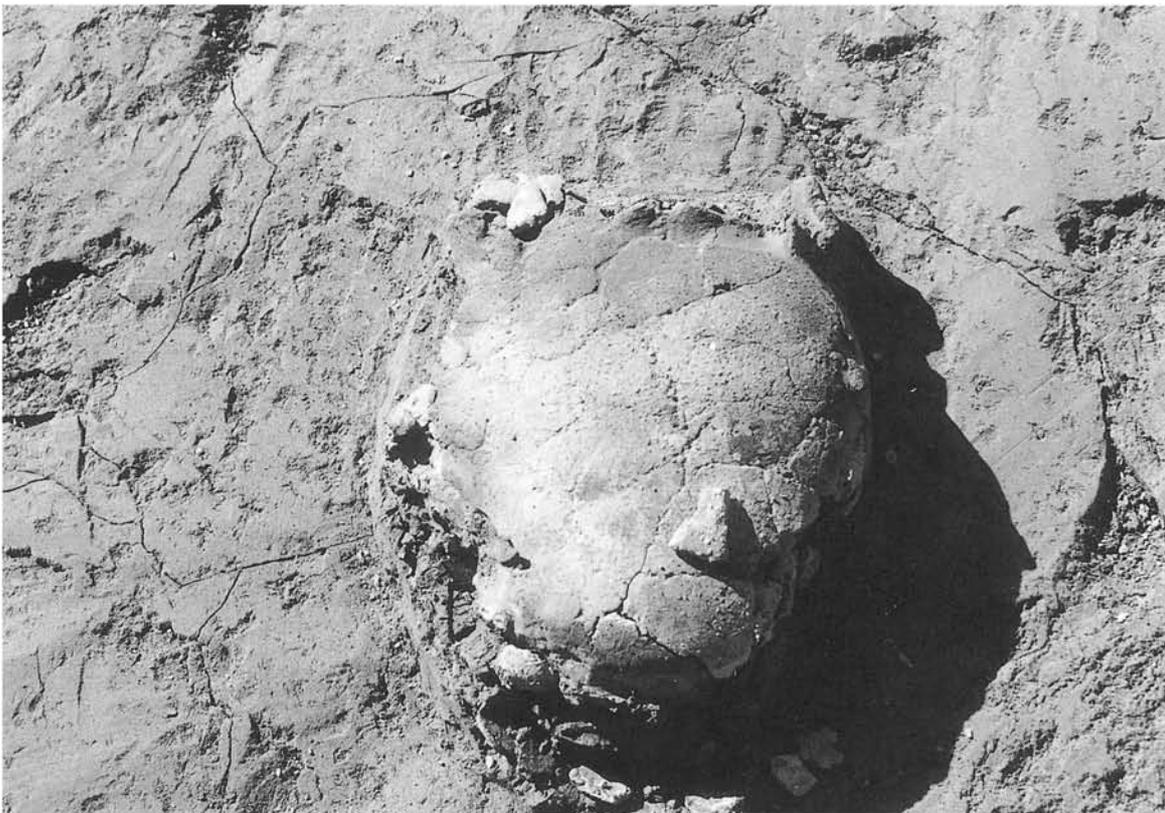
同上



弥生土器大壺出土狀況



第V層 遺物出土狀況



土師器甕出土狀況



土製模造鏡・土師器高杯出土狀況



第V層 土師器出土状況



同上



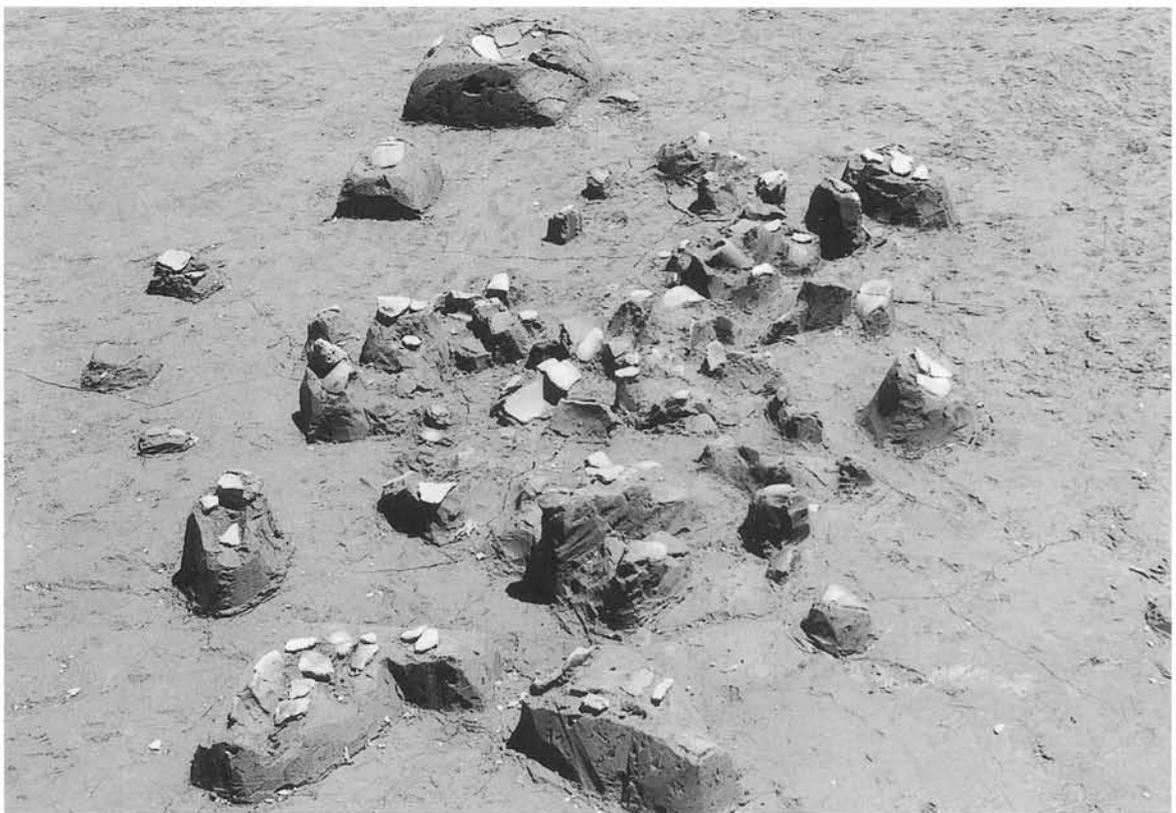
第V層 遺物出土状況



同上



第V層 遺物出土状況



同上



第V層 土師器出土状況



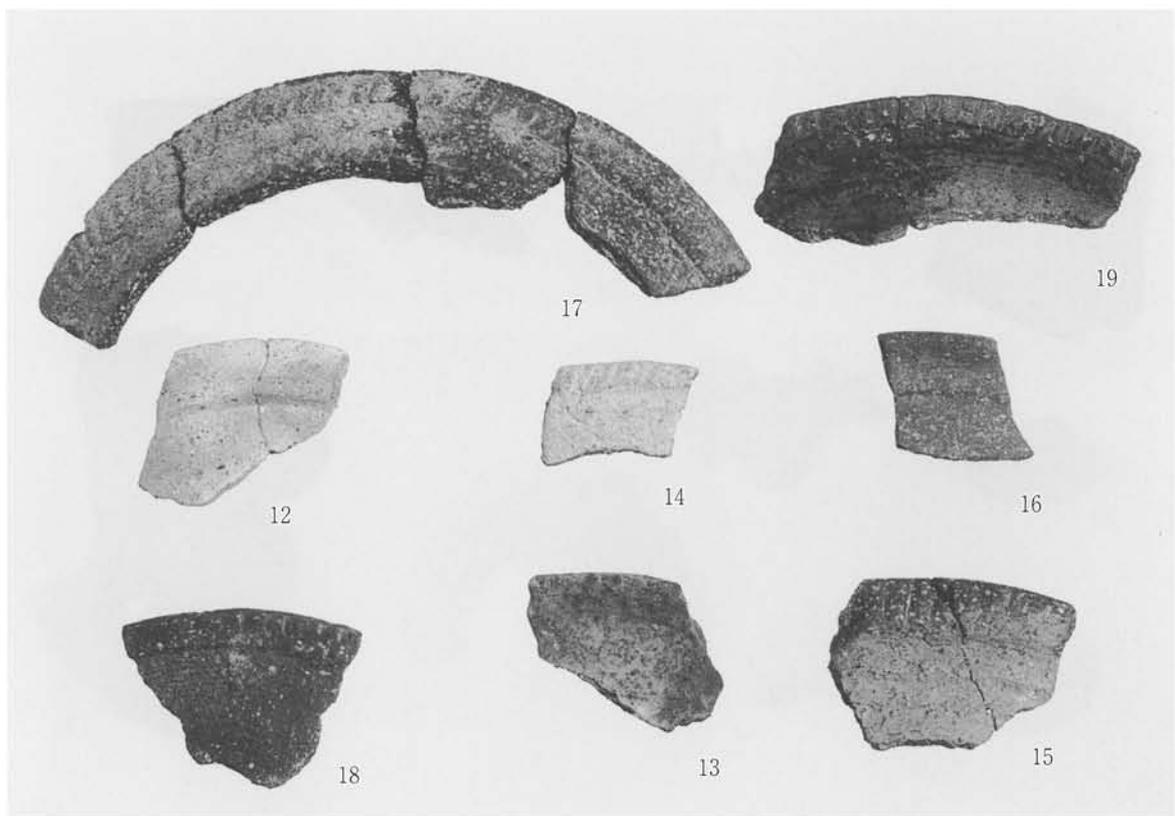
同上



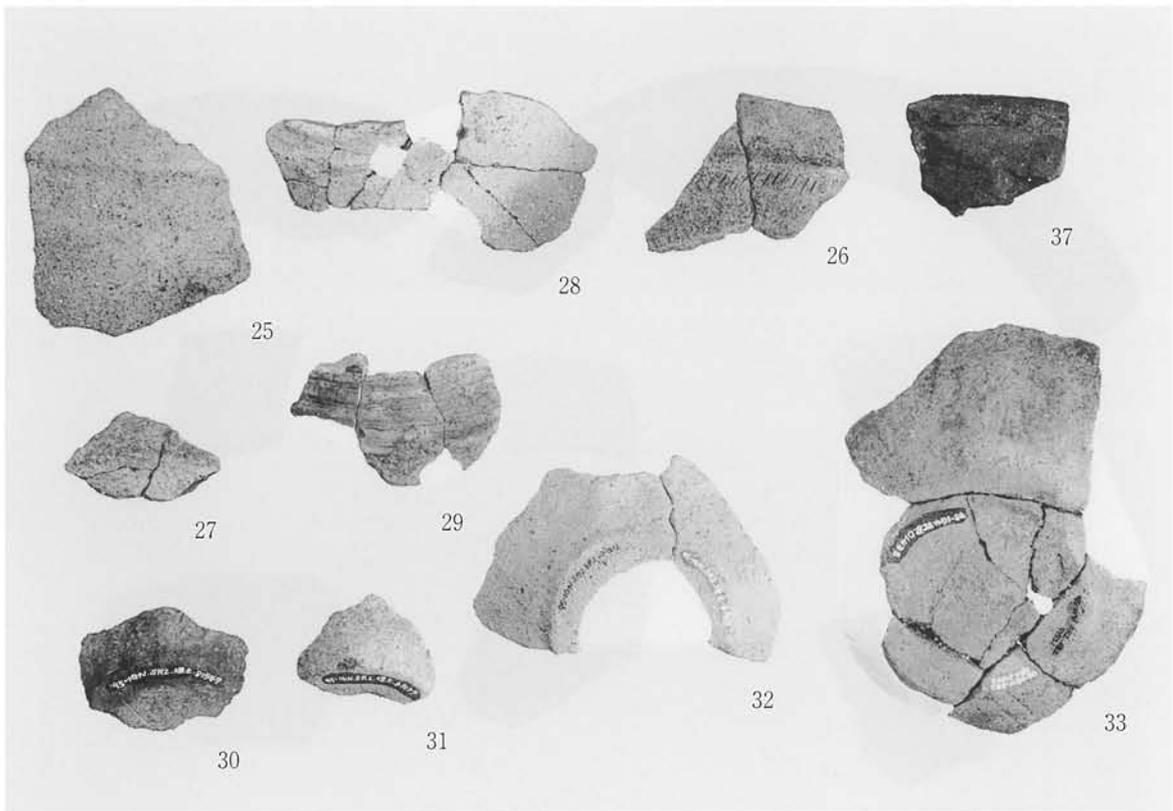
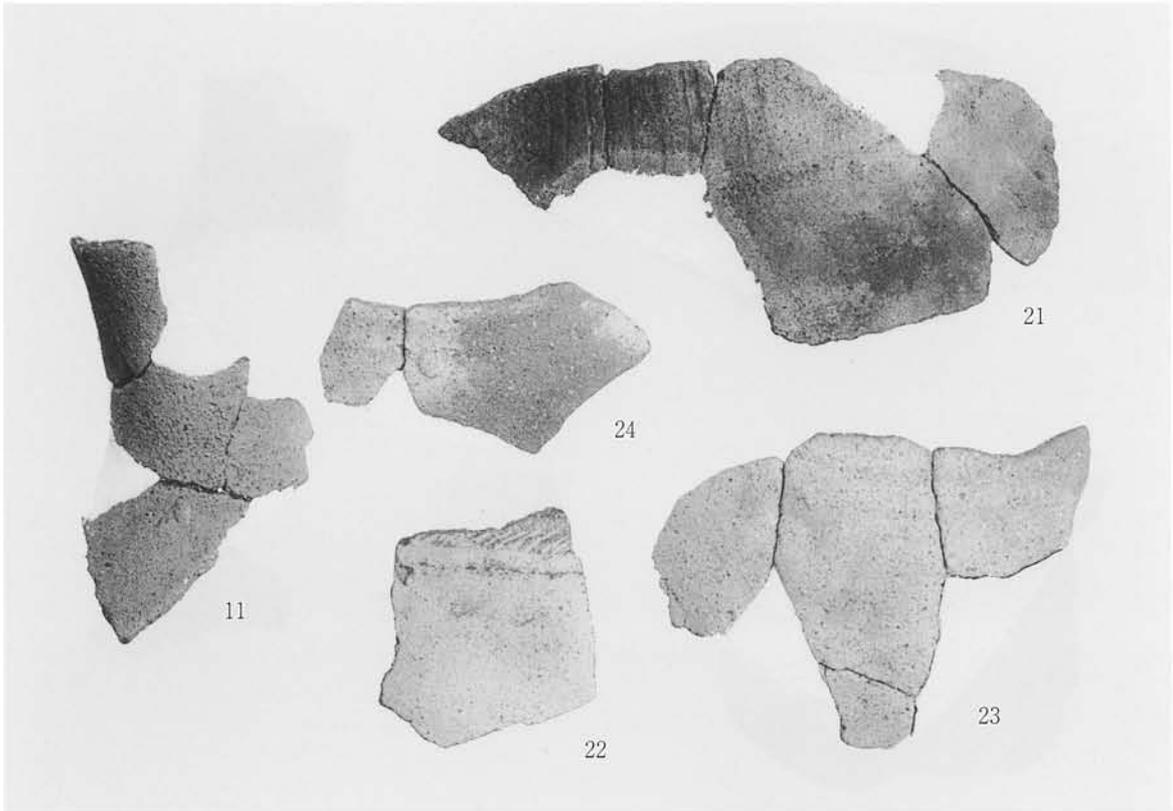
発掘作業風景



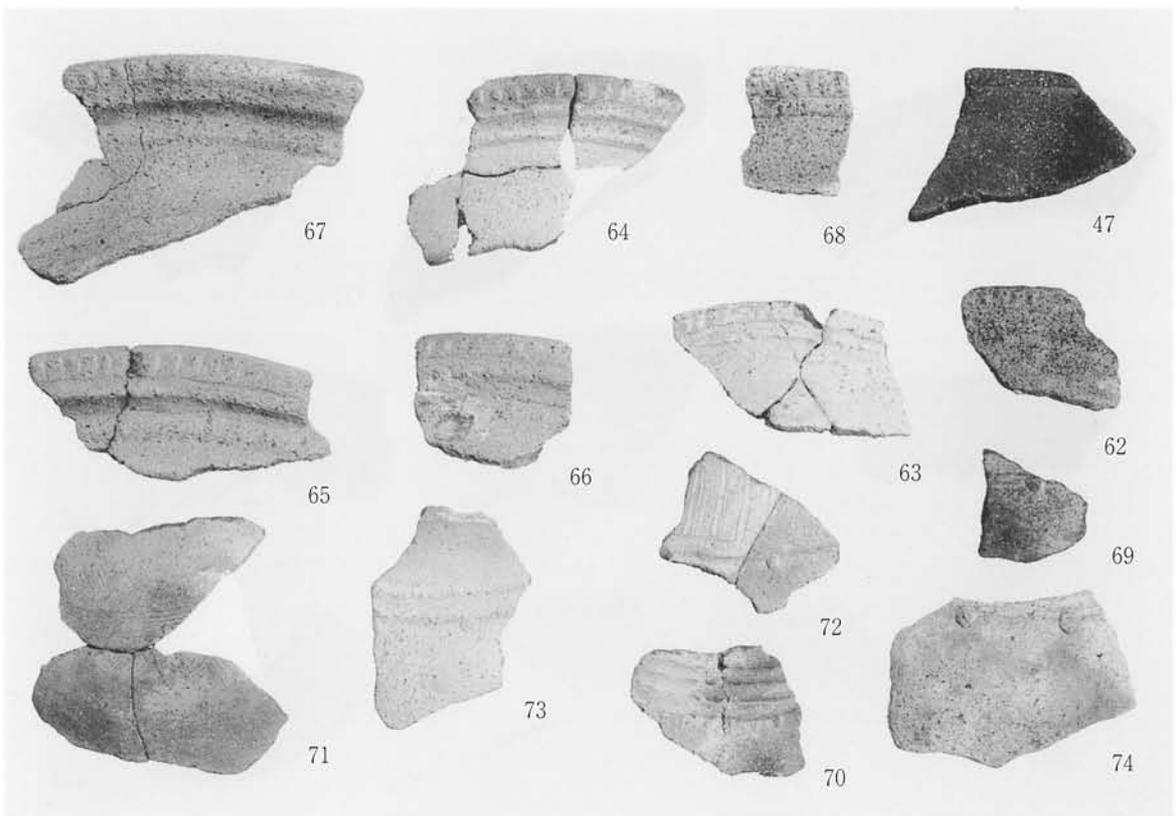
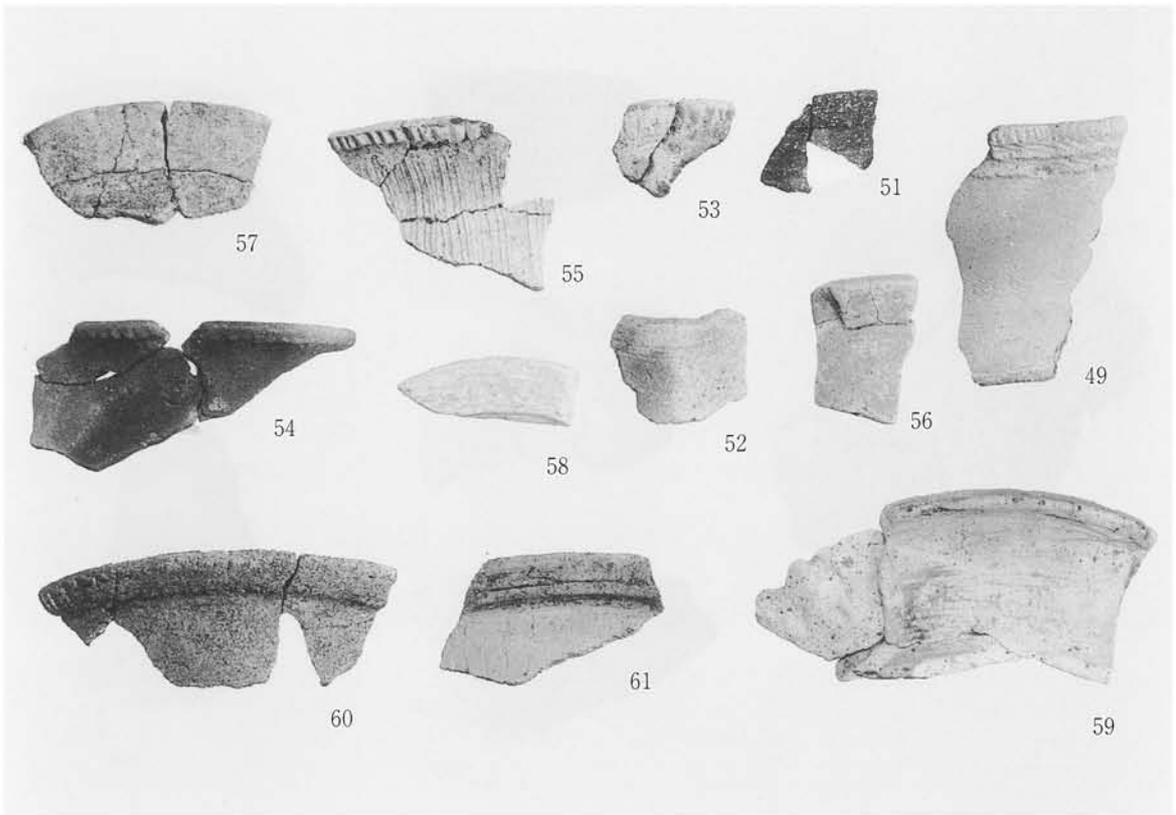
同上



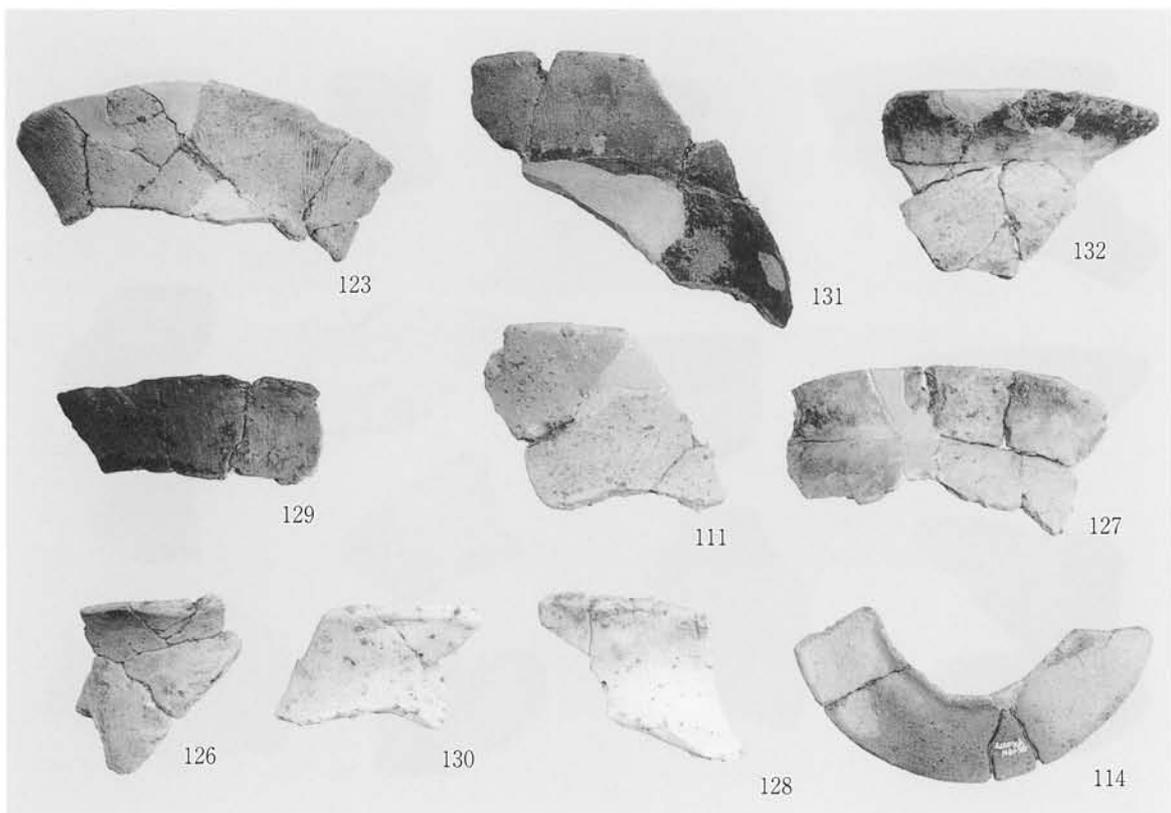
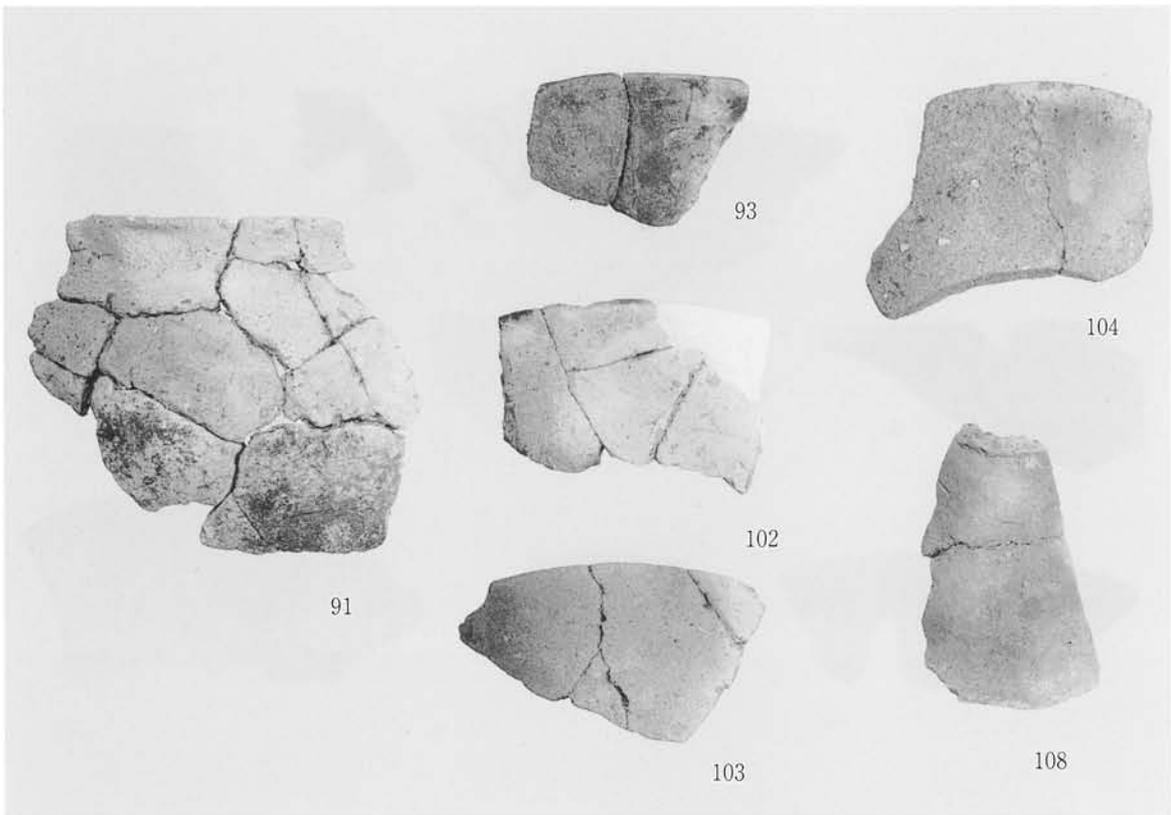
出土遺物 1



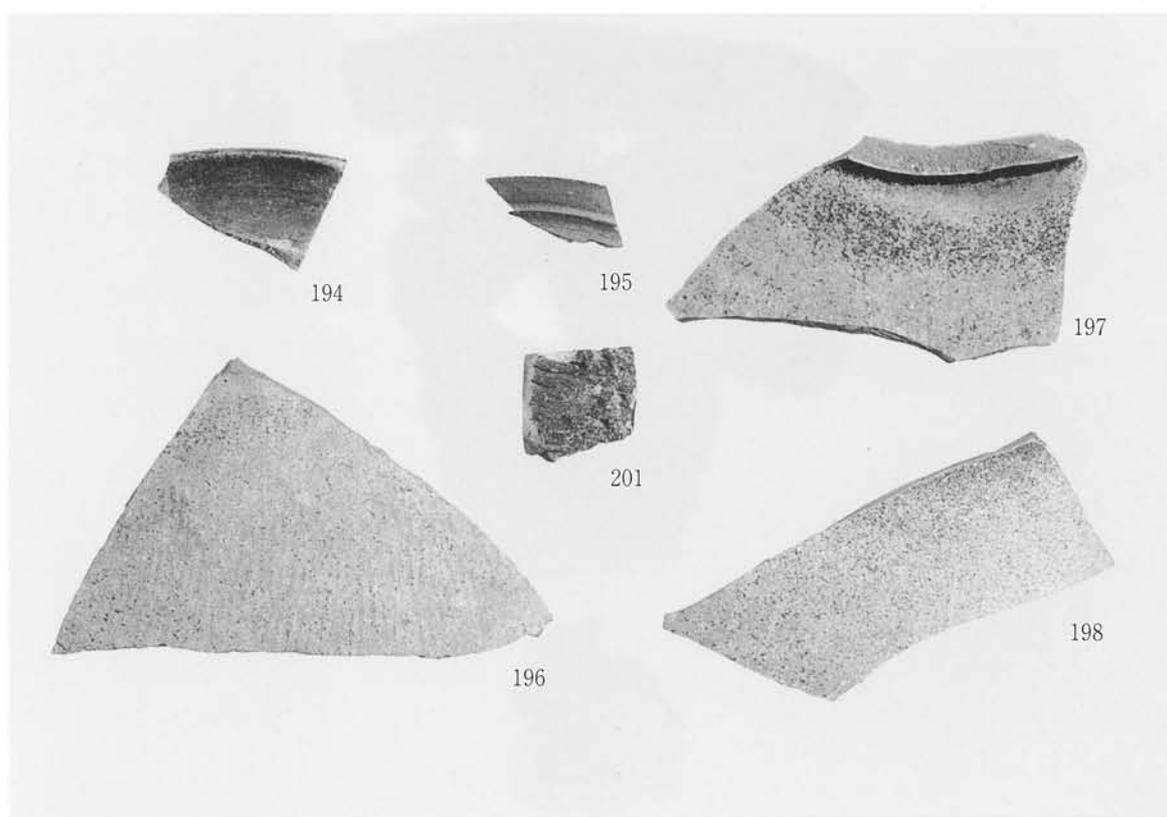
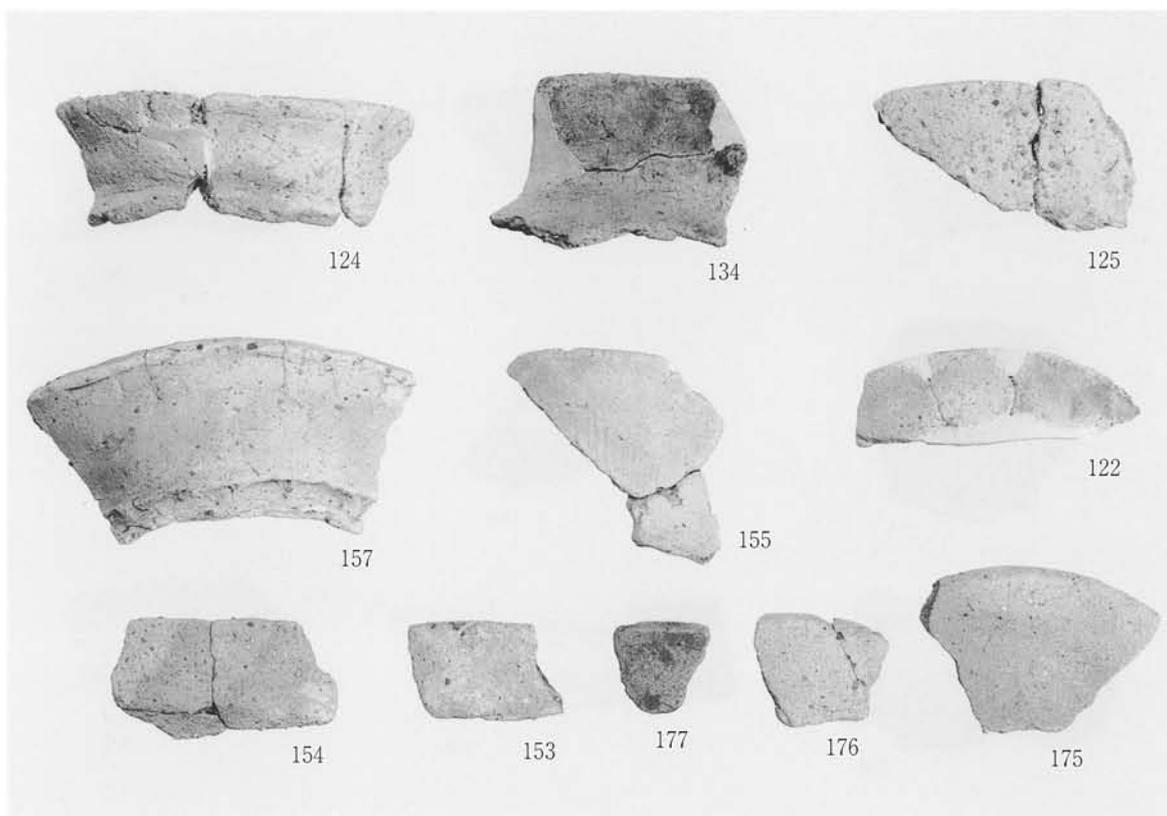
出土遺物 2



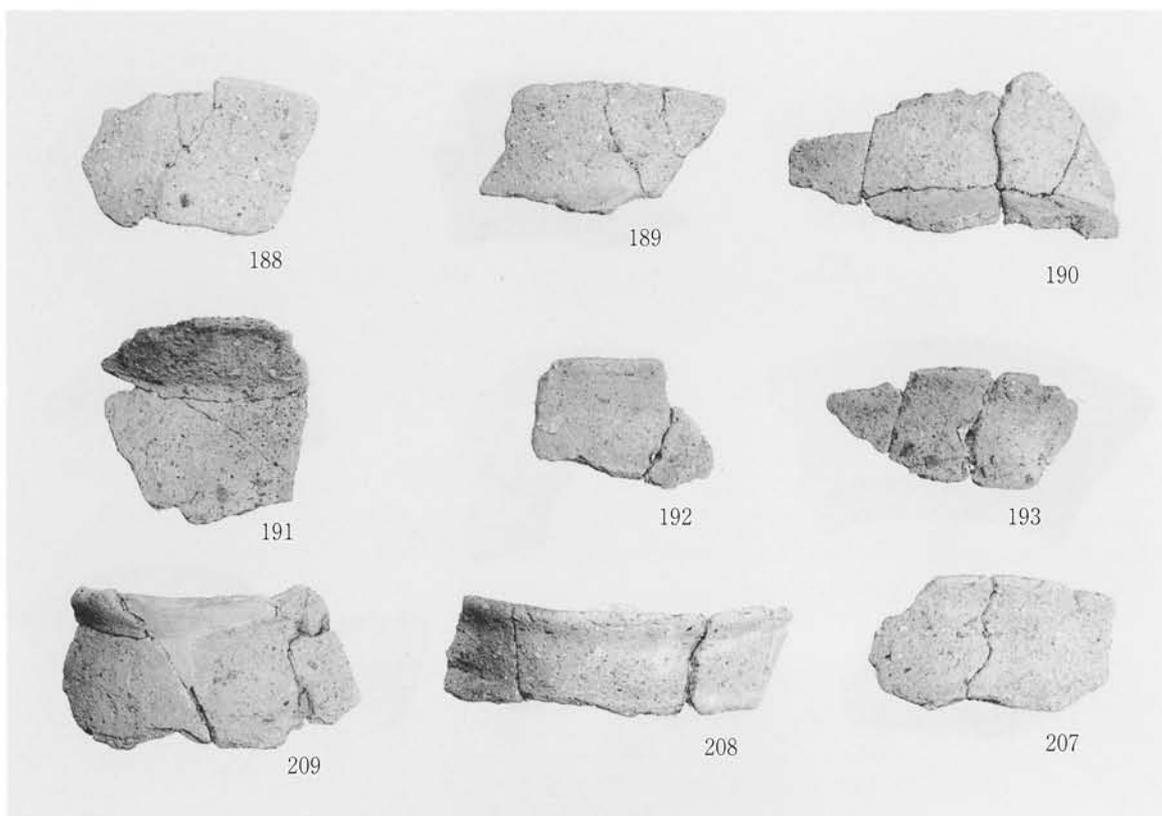
出土遺物 3



出土遺物 4



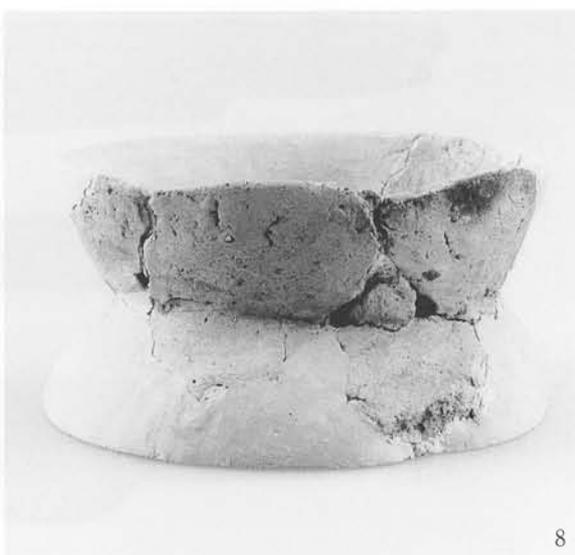
出土遺物 5

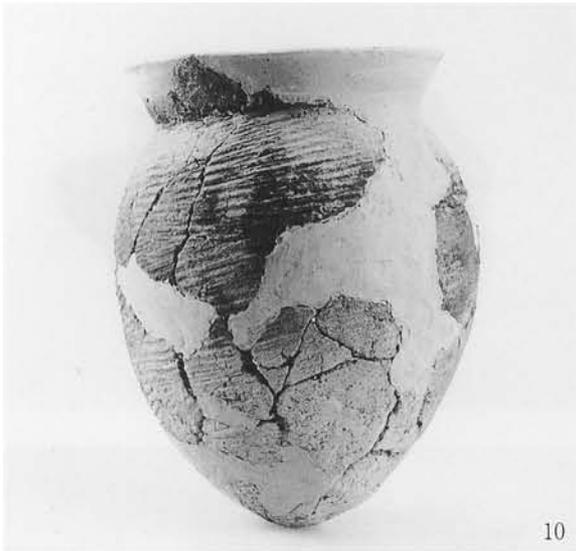


出土遺物 6



出土遺物 7







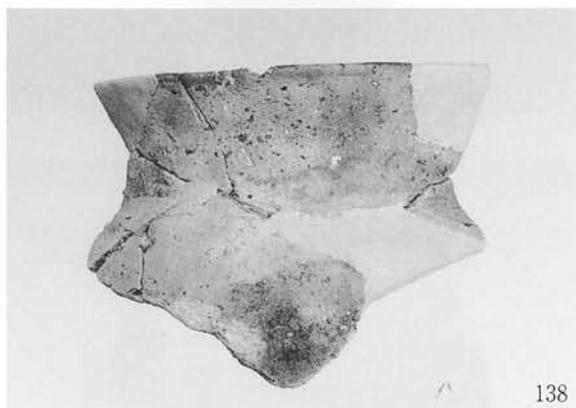
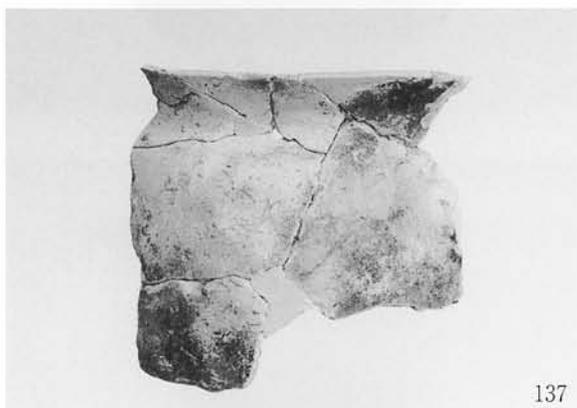
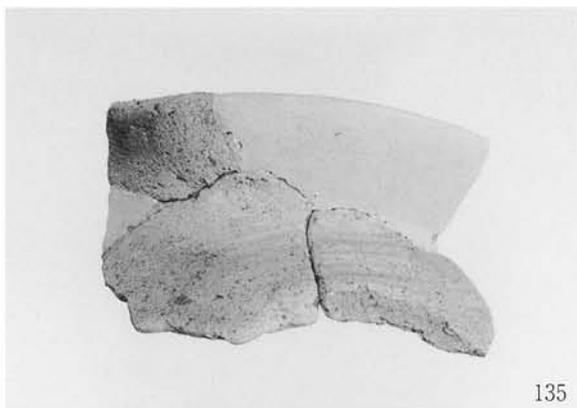












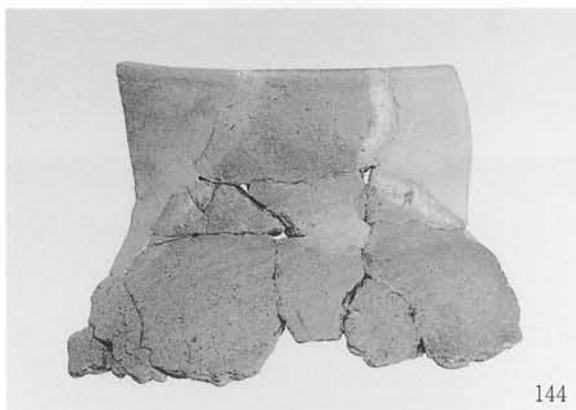




151



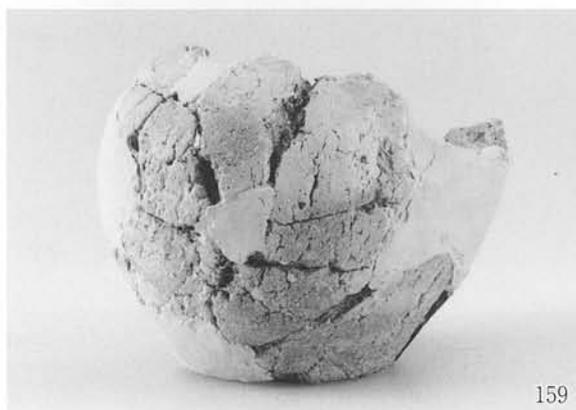
152



144



156



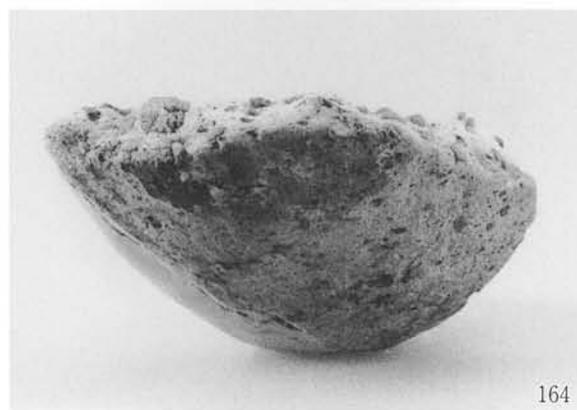
159



160



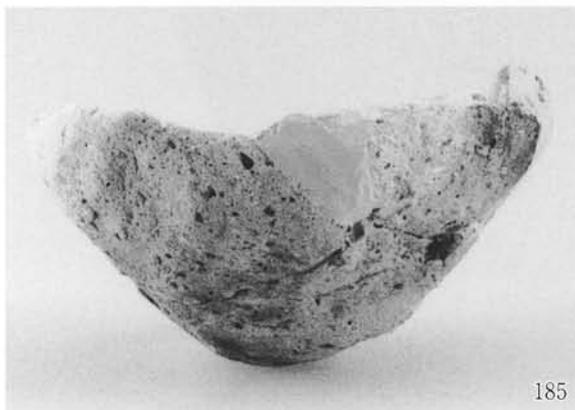
163

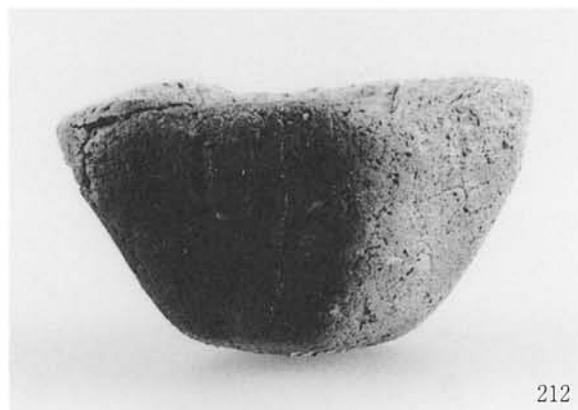


164

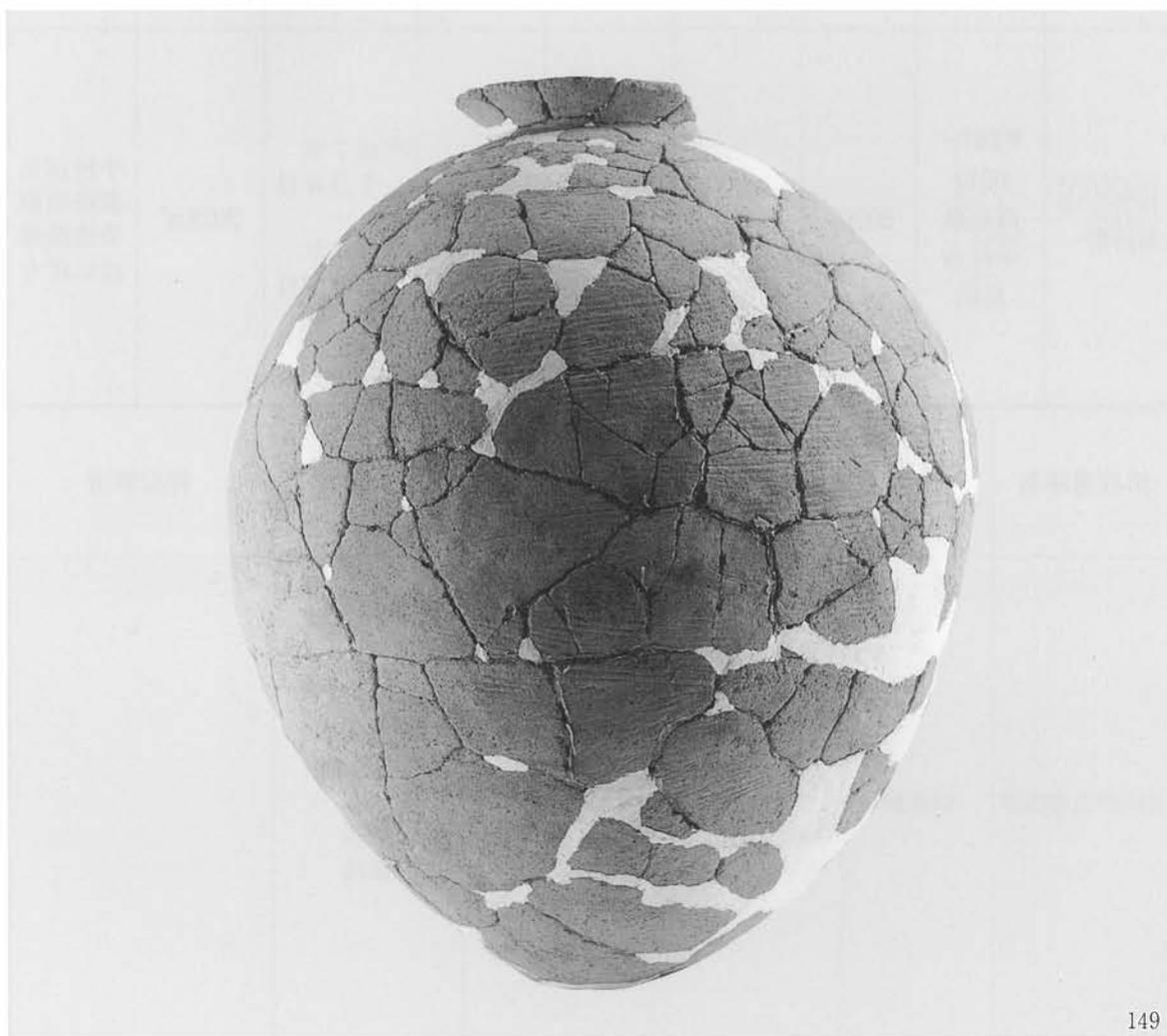
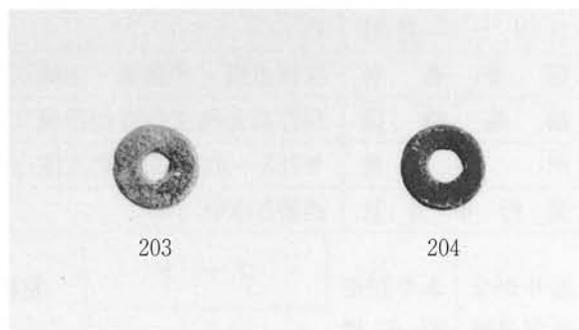








出土遺物22



報告書抄録

ふりがな	ぐどうなかやまいせき							
書名	具同中山遺跡群Ⅱ-Ⅰ							
副書名	中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書							
巻次	5							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	46							
編著者名	松田直則・伊藤強・山崎正明・筒井三菜・久家隆芳							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒783-0006 高知県南国市篠原南泉1437-1 TEL 088-864-0671							
発行年月日	西暦2000年3月							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
ぐどうなかやまいせき 具同中山 遺跡群	〒787-0019 高知県 中村市 具同	39207	070064	32° 58' 19"	132° 54' 48"	平成7年 5月8日 ～ 平成7年 11月27日	2028m ²	中村宿毛 道路高規 格道路建 設に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
具同中山遺跡群	祭祀跡	縄文 弥生 古墳		流路跡	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 木製品			

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第46集

具同中山遺跡群Ⅱ - 1

- 中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書V -

2000年3月

編集 (財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター

発行 高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 川北印刷株式会社